お前はいっぺん死んでこい！

一宮 秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お前はいっぺん死んでこい！

【Ｎコード】
Ｎ３３３６Ｗ

【作者名】
一宮　秋臣

【あらすじ】
自分を凡人と信じこむ黒野真雪は、天才と呼ばれる姉・白雪にコンプレックスを抱く、悩める高校生（女難の相有り）
高校卒業を機に、悩みの根源でもある愛すべき呪わしき家族のもとからの一人立ちを決意していた彼は、卒業を間近に控えたある日、自宅にて謎の侵入者に襲われ、ひっそりと死を迎えた筈ーーが、何故か再び真雪が目覚めた時、そこは平安時代の京都だった！？
家族だけでなく、予想外に現代社会からも独り立ちをとげたてしまった真雪は、果たして無事に新天地にて生き延びる事が出来るのか？

導入部ちょい長めですが、気長にお付きあい頂けると嬉しいです。
『無能な僕と天才な彼女』から題名変更しました。
＊以前、某サイトに載せていたものを引っ越しさせてます

ある姉弟の会話（前書き）

初投稿です。
この物語はフィクションです。実際の人物、団体、事件、国や歴史的背景とは一切関係ありません。具体的にいうと、陰陽師という名称はあくまで異端児の別名であって、本来陰陽師は男性しかなれないという事実は頭から無視しています。

ある姉弟の会話

愛する君と共に生きるより
愛する君の為に死ぬ方がたやすい。

バイロン

◆　◆　◆

何の前置きもなく何の前触れもなく、実に唐突にごくごく自然に彼女はそう言った。
ある日。
「は？」
「思うに、人間っていうのはひどく不便な生き物よね」
実際に、それはよくある事だった。気まぐれに彼女が問いかけ、自分が答える。内容は日々によって様々だが大抵は常に益体もないことで、平々方法幾何学論理とか、嘘しか言わない八人の証言についての審議だとか、あるいはもっと単純に明日の天気だとか。いずれにしても次の瞬間には吹けば飛んでしまうような、中身の会話だ。
――用はお前、単に暇なんだろ。
いつか言ってみたい誘惑に駆られる科白ではあるが、現在のところまだ人生に未練があるのでやめておく。
とはいえ、気持ちは分からなくもない。
窓から吹き込む柔らかな薫風が、ふわり…と彼女長い髪をさらっていく。生まれつき色の薄いその髪は、一度も染めたこともないのに綺麗なセピア色で、彼女の自慢の一つだった。春の陽光を透かし

てきらきらと飴色に輝いている。
降り注ぐ日差しは暖かだが、外の空気はまだ若干の寒を含んでいる。空は青く高く――木々は薄紅色の蕾をまとい、春の訪れがそう遠くないことを告げていた。
散歩するにはまだ寒く、午後のまどろみは如何にも気だるいものだった。
「――どういう意味だよ、それ」
別に興味があったわけでもないが、とりあえず聞き返す。と、姉はその反応を待っていたかのように、もっともらしく頷き、
「だってそうでしょ。人間に限らず、生き物は生まれながらに様々なものに縛られているわ。自分の生まれだったり育ちだったり時代だったり周囲の環境だったりね。その全てのものから一切の影響を受けずに生きていくなんてことは、事実上不可能よ。その最たるものが人間ね。彼らには身に纏う枷が多すぎるもの」
「そうでもねえだろ」
論拠はないがとりあえず反論する。もとより、明確な趣旨があってしている会話ではない。労なく論議を続けようとするならば、とりあえず相手の意見の全てに反対する。彼はＹｅｓと言わない日本人だった。
「封建時代はとっくに終わったんだぜ。本人の努力と望みと環境と才能さえあれば、何にだってなれるだろ」
「最後の二つは、誰しも平等に持ってるものじゃないと思うけどね」
姉は苦笑した。くすりと笑いながら肩をすくめてみせた。やはり色の薄いブラウンの瞳に、どこか面白がるような色が浮かぶ。
「とはいえ、残念ながら私がしているのはそんなポジティブで前向きなお話じゃないのよ。そうね、例えばの話、ここに独りの殺人鬼がいたとしましょう」
もう少しマシな例え話を出来ないのかこの女。
「彼は『殺人鬼』という己の存在起源に則って、当然殺人を行おうとするわ。人を見れば殺す事しか思い浮かばない。殺したくて殺し

たくて堪らない。なぜなら彼は存在そのものが『殺人鬼』であり『人を殺す事』こそが彼にとってのアイデンティティでもあるから。生きることが殺す事でもある彼にとって、殺人行為はそのまま存在理由になっている。でもそんな彼でも現実には決して人を殺さない。なぜだか分かる？それは彼が優しいからだとか、殺人が法律で禁止されているからだとかいうちっぽけな理由ではなくて、もし自分が思いのまま望みのままに人を殺したら『殺人鬼の家族』となってしまう身内に迷惑がかかるから、よ」

「人を殺すような奴が家族の立場を気にするかよ」

「あら？気にするかもしれないじゃない？一体どうして殺人鬼は家族思いじゃないなんて断言できるの？家族に対する愛情は、この世界で何よりも強いものよ」

「まあ、そこにはあえて反論はせんが」

「大体、ゆーちゃんだって最愛の家族である私達の世間体を気にしてくれるから、趣味の猟奇殺人を我慢してくれているんでしょう？」

「仮定の話であろうと、実の弟を勝手に変態犯罪者扱いするなよ！」

ていうか。酷い例え話の対象が実弟だった。

「いいのよ。私の前では嘘つかなくて。貴方のことならお姉ちゃんは何でも分かってるんだから。家族の為とはいえ、ずっと自分に嘘をついて生きてきてさぞかし辛かったでしょう…ありがとう。私達のために、こんなに無理してくれて…」

「待て！その設定で話を続けるな、続けたあげくどさくさに紛れて、自分の好感度をあげようとアピールするな！そんなことをしたって猟奇殺人ネタに自分の弟を絡めてきやがった時点で、お前の好感度は存在しない！」

「あ、でもゆーちゃん。どうせやるんだったら、やっぱり最低限足がつかないように物的証拠は残さないで欲しいわ。身内から縄付きが出たら、いくら月日（つきひ）でも庇いきれるか分からないし」

「さらに現実的な方向に目線を向けるな！あくまで俺を犯罪者に仕立てあげる気かこの野郎！」

無視し続ける姉に対し断固と

して反論を続ける。
「でもこの殺人鬼の彼――つまりゆーちゃんに、もし家族がいなかったらどうかしら？自分が気遣うべき愛する家族がいなかったら？既に天涯孤独の身であるとしたら？彼を縛るものも彼を規制するものも、彼が守ろうとするものも何もなかったとしたら？果たしてそうなった時、彼は今までと同じく殺人衝動を我慢できるのかしら？したくてしたくてしょうがない事を、抑制もなく制御出来るのかしら？一切のしがらみを持たない人間が、自制なんてするかしら？」
「出来るだろ」
そう。別にそんなのは考えるまでもない。
「選ぶのも決めるのも結局は自分だ。自分の選択さえ周囲のせいにするなんて、見当違いにもほどがある」
当然の事を言ったまでだが。それを聞いた姉はなぜか嬉しそうに微笑んだ。舞い散る桜の一片のように儚げで穏やかな微笑み。その笑顔だけを見れば、彼女の本性を知っている自分でさえ思わず見蕩れてしまいそうになる
「そうね。ゆーちゃんならそうでしょうね。でも普通の人間はそんなに不動ではいられないわ。神経が登山用のザイル並みに頑丈で太いゆーちゃんと違って、人間はまず迷うの。他人にどう見られるか、他人にどう思われるか。自分のすることが正しいのか否か。自分にとっては正しい事であれ、身内から、周囲から、世間から、世界から見たら間違っているんじゃないか？何が正しくて何が間違いなのか。自分の望みが果たして叶えていいものなのか。臨んでいいものなのか。誰もが常に迷ってる。誰もが何かに縛られている。この地上で本気で何一つしがらみなく生きているのなんて、私ぐらいなものじゃないかしら」
「なんでだ？」
本気で理解出来なくて姉に聞き返す。姉が自由気ままままに生きているという点には、なんら疑問もないが。人間というものが、そんなに揺らぎやすい生き物だとは到底思えない。

「分かりにくかったかしら？でもゆーちゃんだってそうじゃない？もしもなんて、実際には何の意味もない仮定だけど――もし貴方がうちに生まれてなかったら、ゆーちゃんは今の貴方になっていたかしら？」

「当然だろ。俺は変わんねーよ」

迷う余地がなかったので、断言する。と、彼女はそんな弟の答えを予測していたかのように笑みを浮かべ、

「でも、もしも貴方がこの家の生まれでなかったら、果たして貴方は本当に目指す夢を追いかけていたかしら？史上で最も偉大な異端児（イレギュラー）と言われる『彼女』の末裔としてこの世に生を受けていなければ、あるいは今とはまったく別の道を目指していたかもしれないじゃない。何もすき好んで世界の忌子と呼ばれるような道を選ばずに、もっと普通で当たり前の人生を送っていたかもしれないな、とは思わない？一度でも、そんな風に考えたことはない？」

「ねぇよ」

伺うような姉の言葉に即答する。

「いつの時代のどこの場所に生まれておまけにその時の家族が誰だったとしても、俺は確実に俺になってたって断言するね。『彼女』のことは切っ掛けだったかもしれないけど、あくまで切っ掛けであって決定打じゃない。俺の道を決めたのは俺自身だ」

「ゆーちゃんは単純ねぇ」

あくまで揺るがない弟に、彼女はあきれ混じりにつぶやいた。

「でもそうなんでしょうね、結局。貴方は昔っから恐ろしくシンプルだもの。けどねえ、知ってるゆーちゃん。周りを気にしない人は周りから気にされなくていいと思っている人なのよ。よく周りを気にするなとか、自分と他人を見比べるなとかいうけど、本当の意味で周囲を気にしない人っていうのは、なかなかいないわ。なぜなら、人は本来群れる生き物だから。生物は単体では弱いからこそ、群集として生きる知恵を身につけた。その中で、自分の周りに他人を必要としない。人との関係性をまったく気にしない人間というのはと

ても希少で例外的な存在よ。集団の中で個を主張する存在は排除される。出る杭は打たれる。そういう意味でいうなら、まさに貴方は正しく異端児だわゆーちゃん。その出自に能力に関らず、貴方の精神性だけで人間として立派に壊れた異常者よ。私よりも月日よりもずっとずっと貴方のほうが異端だわ」

「いや、俺もお前にだけは異常とか言われたくないんだけど…」

「異常は異常を知るものよ」

自覚があったのか。

「だったらお前に異常扱いされてる俺の方が、世間一般的にはまともなんじゃねぇの」

「世間一般のまともな人間がこの私と会話出来るわけがないわ」

自慢にも何もならないことを、妙に力強く断言する。

結局のところ、姉が何を言いたいのか分からない。

だけどそれもまたいつものことだった。

全知にして零能。森羅万象の全てを見通す存在の胸中など、もとより自分ごときに測りきれるわけもない。生まれた時から世界の全てを知り尽くしてしまっている彼女を理解しようなどとは、悟りも得ずに涅槃へと踏み入れるようなものだ。

だから別に構わない。人間同士の会話なんて、所詮そんなものだろう？

「お前の話が冗長なのも意味不明なのも毎度お決まり事だから、そろそろ俺も決まり文句としてこれを言わせて貰うぜ。つまりお前は何が言いたいんだ？」

「特にないわ、言いたい事なんて。この世界に対して私が言うべき事なんて何一つないわよ。あるならせいぜい遺言ぐらいなものね。ただの戯言。いつもと同じ意味のない言葉よ――でも、そうね。たとえばゆーちゃん貴方だったらどうしたい？」

「は？」

「もし貴方がこの世界の全てから開放されたら。生まれも育ちも血筋も時代も関係ない、あらゆるしがらみも一切の枷も存在しない、

過去も未来も家族も仲間も全てを失ったとしたら。貴方は一体どうしたい？」

試すような、眇めるような。

表も裏も暗も明もこちらの脳裡を裏から根こそぎ覗き込むような眼差しで、彼女がこちらを見つめてくる。その強さに圧倒され、我知らず自然と息を呑む。

一体何を見ているのだろう。何を視られているのだろう。

過去を知り未来を知り全てを知る時詠みの魔女――世界で最も優れた予知能力者である姉の瞳には、この世界がどう映っているのか。その想像はパンドラの箱を開けるようなものだった。

姉がまっすぐにこちらを見据え、油断すれば聞き逃しそうな、けれど不思議と聞きもらさない、ごく小さな声でそっと呟く。

「もしこの世界の全てから自由になる事が出来たら、貴方はどこに行きたいの？」

「……――俺は」

「貴方は、何になりたいの？」

「俺は――……」

ある少年の日常

願わくば　花の下にて　春死なん

＞ｉ３０６０１―３９２６＜

◆　◆　◆

花が舞う。

例年より一足早く訪れた春は長の眠りから緑を目覚めさせ、綻びはじめた蕾が蜜を含んだ甘い薫風を漂わせていた。

既に花開いた桜は空と大地を薄紅色に染め上げている。儚さと潔さと。相反する矛盾を同時に兼ね備えた桜は、日の下見るにはただただ美しくしかし夜の闇に映える様はどこか幽玄へと誘う妖しさも秘めている。

花散る季節は別れが似合う。

校舎の窓辺に腰掛け人を待っていた真雪（さねゆき）はなんとなく手持ち無沙汰になりながら、何をするともなく校庭の桜を見ていた。暖かな日差しのなかに抗いがたい眠気を覚えるが、時折、強く吹く春風がまどろみと共に彼の黒髪を浚っていく。

もうすぐで高校卒業だ。

日本では三月の卒業式も四月の入学式もどちらも満開の桜に囲まれているイメージがあるが（単に映像記録機器を販売しているメーカーの根強い販売戦略によるものという説もあるが）これはそもそもおかしな話だ。一般的に桜の花の寿命は普通なら一週間。例外的に長くてもせいぜい二週間が限界だ。ならば卒業式と入学式の両方

で花が見れる機会というものは、通常はありえない。
特に卒業式には散り際、入学時には満開の桜という印象がそれぞれ強いが――真雪は思う。
卒業式の時に散ってたら、入学式にはガクしか残ってねぇだろ。と、そして、
花とイベントをマッチングさせたきゃ、開花予想にあわせてイベントの時期をズラせよ、とも。
桜の花は満開時よりもむしろ、地面に散った花びらの方が強い匂いを放つため、彼個人としては毎年散り際の方が印象が強い。そのため、入学式の祝いに満開に咲き誇る姿より、別れの時期に散る様の方が桜の花には相応しく思う。
ま、そういった意味じゃ今年はラッキーだったな。
既に卒業まで早三日となっている。新入生には気の毒だったが、個人的には今年の咲き具合はまさしく理想的だった。
「あぁ…それに俺は別に四月の門出を祝われる立場でもねぇしな」
くぁ…と。
いい加減待ち続けるもの飽きてきて、つい眠気に負けそうになり真雪はあくびをついた。にじむ涙を指端でぬぐう。とはいえ、あまり眠気は覚めない。
別段、特にやる事もないのでこのまま素直に昼寝をしてしまってもよいのだが。どうせすぐに帰るのだと思うと、そんな気にもなれない。なんというか、ここで寝たら負けな気がする。何にだ。何かにだ。
せめて退屈を紛らわそうと、近くにあった鞄からＤＳを取り出したところで、
「おーっす！ゆーちゃん、おっまたー！遅れてゴメンネ。ちゃんといい子に待ってたかー？」
がらがら――っと。
それまでの穏やかな時間を根こそぎ容赦なくぶち壊すような遠慮のなさで教室の扉が開き、騒々しい声と共に深夜（しんや）が現れた。

「悪い悪ぃ。思ったよりトークが長引いちゃってさ。いやぁ老人の遺言は長いねぇ。でも、もうキレーさっぱり片付いたからダイジョーブ。とっとと帰ろうぜ」
「オッケィ」
待ち人来る。
真雪は立ち上がると、窓を閉め教室をあとにした。

◆　◆　◆

「――で、お前今日なんかリクあんの？」
「んー、希望はいっぱいあるけど。お前的な予算っていくらくらい？俺、どこまでおねだりしていいの？ジンバブエの国家予算くらいなら出せる？」
「頼むから一般的な男子高校生の予算で検討してくれ。大体、個人で国家予算枠なんか出せるか、王国築くぞこの野郎」
「いや、だってお前の家それなりにセレブじゃん」
「お前十年近く付き合ってて、俺が一度でも実家の恩恵受けてるところを見たことあるか？」
黒野（くろの）家は子供の小遣いについてさほど厳しい家ではなかったが、それはあくまで自由が利くという意味であって、自由に金銭を恵んで貰えるという意味では決してない。基本的に、使える金額は等価労働で全て自分で稼いだ金だ。
あー、確かにそういうトコ難いよね、お前んとこ。と、深夜はきゃらきゃらと笑いながら、納得したように頷いた。
織神（おりがみ）深夜は俗に言う幼馴染というやつだ。腐れ縁ともいう。別に実家が隣同士というわけでもなく無論、親同士が勝手に決めた許婚というわけでもない。まあ、男同士なので当然だが（姉の白雪との可能性の方がまだ有り得るが、あの悪魔女を溺愛する父親がそんなことを許容するはずがないので却下だ）純粋にただの同級生なのだが、小・中・高と全て同じ公立校のためぐだぐだと無駄に付き合い

が続いている。縁自体が既に腐りきって白骨化しているという説もある。

愛嬌ある顔立ちに常に人懐っこい笑み。ふわふわとまとまりのない髪は明るめの茶色で耳にはピアス。髪型は一見すると単なる寝癖のように見えるが実は綺麗にスタイリングされたものだ。

着崩した学ランの下には、服装規定上等といわんばかりに明らかに校則違反な派手めのシャツを着こんでおり、常に教師陣に喧嘩を売っている。

一方で真雪にはそんな派手なところはない。むしろ地味すぎるくらい外見には無頓着だったが、それを差し引いて尚、彼の容姿は酷く目立つものだった。

身長は図抜けて高い。服の上からでも充分に分かる引き締まった体躯。冴えた白貌。冗談のように黒い髪と野性味を帯びた黒檀の瞳。顔立ちそのものは端整ですらあるのにこの無駄に悪い目つきが、ただでさえ無愛想な少年の雰囲気を一層近寄り難いものにしている。耳を彩る赤い石のピアスが唯一のおしゃれ。

場所は学校から移動して、池袋の東口方面にあるマクドナルド。本日は無事卒業と大学への合格が決まった友人に（本気でかなりギリギリだった）祝いと激励を込めて真雪の奢りでメシでも食べようの会だった。ついでに第二の目的として電気屋に新型のＰＣを見に行く予定だったが目当ての品がなかった。さまよっているうちに小腹が減ってきたので、現在ハーフタイムを挟み再戦の予定である。

まあ、普通に考えれば同時期に卒業する自分だけが、わざわざ奢ってやる義理も理由もないのだが。ないのだがないのだが、延々と続き続けた白骨縁が遂に切れるのかと思うと、それなりに思わない事がないでもない。何せ、計十二年間の就学期間の中で同じクラスにあたったことが十回だ。どんな奇跡だ。

加えて深夜が無事晴れて卒業出来る事となったのが意外だったという事もある。（本当にギリギリだ。いやマジで）卒業直前まで担任教師に説教くらいながら、脅迫、同情、誘惑、賄賂と最後は泣き

ついて拝み倒した結果に、もう面倒くさくなった担任が嫌々卒業を認めてくれたらしい。
「しっかしまー、なんとか卒業出来そうでマジよかったですよ。俺としちゃー。高校留年とかはさすがになー。ちょっとやだしなー」
「ちょっとどころじゃなくかなり真剣に嫌だけどなそれ」
「だって留年とかしちゃったら後輩とタメになってタメ口きかれちゃったりあだ名がダブりんになったりするんだぜ、きっと。ダブリンって。あーやだやだ。ありえないっしょそれ」
「有りねぇのはお前のそのセンスだよ」
あと、留年の危機を迎えてまで気にするところがあだ名程度という感性だ。他人事ながら残念で仕方ない。そろそろ途切れる予定の縁とはいえ、いい加減この幼馴染の将来が心配になってくる。
こちらの至極常識的な突っ込みに対し、深夜は笑って誤魔化すという暴挙に出た。
「あっはっは！まー、結果的には無事卒業出来んだからそれでいーじゃん。これで俺も四月から晴れて大学生。合コン三昧のキャンパスライフが待ってると思うと心が躍るぜ」
「ああ。俺も漸くお前との腐れ縁が切断されるかと思うと、柄にもなく人知を超えた何かに感謝したくなってくるよ」
「まったまたー。ゆーちゃんってば意地張っちゃってー。俺とのお別れが寂しくって、こんな思い出パーティーとか開いちゃうほど俺の事が大好きなくせに」
「いや別にこれお別れ会とかじゃないから。単に絶縁記念会だから」
あと、個人的には禊の意味も兼ねている。禊というか、厄払いというか。
なんのリスクもなくこの馬鹿と縁が切れるとは思えない。そこまでに達してしまった自分の思考回路が悲しい。
「けど心配はいらねーよ。学校分かれても他の奴ならともかく俺、お前とだけは縁切れるつもりはねーからさ。義弟よ」
屈託のない笑顔でぽんっ、と気軽に肩を叩く深夜に、真雪は深く

深くため息をついた。

ある少年の日常（後書き）

一話あたりの分量がどー考えても多いので、読んで下さる方にご迷惑かと思い、短くしました。手探りですいません。

「…だから、昔っから何度も何度も何度も何度も何度も言ってきた事だし、もう今更って気もするがいい機会だから改めて言っておくぞ。いい加減、白の事は諦めろって。一応、曲りなりにも幼馴染としての好というか、武士の情けで忠告してやるが、いつまでもあんな奴追いかけてると、お前本気で一生無駄にするぞ。つーか合コンだらけの大学生活を謳歌する予定なんじゃねぇのかよ？」

「そこはそれですよ。ほら、やっぱいつも松坂牛ばっか食ってると、たまには吉牛とかも食いたくなるじゃん？味見して普通の味を思い出す事で、改めて松坂牛がスペシャルである事を知る――つまり、松坂牛の真の価値を知るためには、適度に他を知る事もまた必須なわけよ！そう、つまりこれは概念としては浮気ではなく、むしろ真実の価値を測りなおすために神が与えた試練！心配しなくても俺は白雪一筋だから。そこは変わらないから」

「世界中の浮気男に夢と希望を与える新しい理論だな」

声高らかに何恥じる事無く、力強く持論を展開し浮気を正当化しようとする深夜に、しみじみとぼやく。浮気という行為をこれほどまでに自身で正当化出来るのはお前と島田紳介ぐらいなものだ。いや、こいつの場合はそもそも、浮気ですらないのか。万年片思いだし。

「だって、白雪（しらゆき）ってすげー美人じゃん。俺、今までの人生の中であいつ以上の美人を知らないぜ。もちろん、芸能界も含めて」

「確かに、それは俺も認めるが…」

その点については、反論しようがないので頷いておく。身内の贔屓目なしにして、確かに姉は美人だった。それも頭に『絶世』がつくほどの。

「でもあいつ性格悪いぜ？俺は今までの人生の中であいつ以上に性格の悪い女を知らないぞ。勿論、歴史上を含めて」

「確かに、それは俺も認めるが…」

と、今度は深夜が黙り込む番だった。それについては反論しようがないので素直に頷く。

黒野白雪（くろのしらゆき）。属性・姉。種別・悪魔。職業・暇人（フリーターという表現をしたら、本人が断固拒否した。曰く『そこまで自由な人生でもないわ』との事）真雪より一つ年上で現在十九歳、無職。外見良し、性格悪し。

基本的には排他的で応用的な社交性もなく発展的な成長の可能性は皆無。愛想はなく（そして恐らくは友人もいない）性格は最悪の一言。特に対人恐怖症や心因性の病を持つわけではないが、人との接触をとにかく嫌う。大したフラグがあるわけでもなく、単に面倒くさいだけらしい。

小・中・高校までの学校生活を一貫して登校拒否児として過ごしたまま、入学式にも卒業式にも参加せずに卒業資格を入手した生粋の引きこもり。そのため一時期、真雪の通う学校では姉の存在が伝説の珍獣扱いされており、その姿を見たものは3つまで願いが叶うとか、テストで百点が取れるとか、運気が向上するとだ、意味不明なジンクスがまことしやかに広まっていた。毎日その姿を見ているものとしては、とりあえず彼女が発見して運気が向上するようなおめでたい存在ではないという点についてだけ力強く断言しておきたい。むしろ運気を吸い取るタイプだ。

生まれつき色素が薄く、日本人にしては珍しい（最近はそうでもないか？）セピアの髪とブラウンの瞳。肌は病的なまでに滑らかで白く、全体のパーツの中で仄かに生身の色味を持つ赤い唇が妙に蠱惑的だ。見かけは控えめに言って絶世の美女。外見の美醜については人それぞれに好みがあるだろうが、それでも世界中を探しても白雪を『美人じゃない』と断言出来る人間は、恐らくこの世にはいないだろう。

高校卒業後の今では、自宅でのんびり余生を楽しんでいるらしい（早すぎる）卒業後とはいえ、卒業前にも学校に通っていた事はな

いのだが、真雪の友人ということで、家に遊びに来る事もあるので深夜とは一応面識もある。
　どうもこの幼馴染はその時、姉に一目惚れをしてしまったらしく、百一回以上のプロポーズをし熱烈に愛を訴え続けているがすげなくあしらわれ続け、未だに片思い継続中である。
「考えてみたらすげー話だよな。その年で十年越しの片思いって。お前は少女マンガの脇役か？物心ついて時点で既にストーカーとしての才能を開花してんじゃねーよ犯罪者予備軍め」
「むしろ超一途って言ってくれよ。俺、白雪がどんなに性格悪い人格破綻者だったとしても気にしないぜ？アイツ以上に性格悪い奴知ってるし」
「あ？誰だ？」
「俺」
　そうでした。
　自分で自分を指差し、にっこりと笑う深夜に真雪はうんざりと溜息をついた。
「…何で俺の周りって頭よくて性格悪い奴か頭悪くて性格の悪い奴しかいないんだろう。たまには頭悪くてもいいから性格のいい奴に登場してもらいたいんだが」
「類友じゃね？」
　深夜はポテトをつまみながらあっさりと冷たく言った。ついで、ずるずると行儀悪く音を立ててドリンクを飲みながら、思いついたように聞いてくる。
「そういやさぁ、真はこれからどーすんの？考えてみりゃ俺、お前が卒業後どうするかとか聞いた事なかったわ。確か受験、してなかったよな？それとも、俺が知らねぇだけで実はどっかの大学受けてたのか？まさかグリーンゲイブルズよろしく姉弟で仲良くヒッキー生活始めるってわけでもねぇんだろ？」
「いや、俺卒業したらＷＩＳに入団しようと思ってんだ」
　深夜が飲みかけのドリンクを吹き出した。

吹き飛んだ飛沫は正面の真雪に直撃した。
「……。……。……」
互いに沈黙したまま時間と共に数秒間フリーズ。
「……おまえ、なぁ」
ぎりぎりと。
自分の歯軋りすら聞こえてくる静寂の中で何かを――明確な何かを堪えながら呻く。とりあえず一発殴っておくか、とも思ったが。
まずは汚れを落とす事が先決だ。真雪は無言のまま席を立ち、トレイの棚から紙ナプキンを取ってきてごしごしと顔を拭き始めた。さらにトイレでハンカチを濡らしてくると、服に飛んだ分を丁寧に落とす。
ていうか、なんでマックでハンバーガー食いながら、よりにもよってホットミルクとか飲んでんだよあいつは。普通コーラとかだろ？
相変わらずチョイズが微妙な奴だ。
おかげでいらん苦労をする。
顔面はともかくとして、問題は制服に飛んだ分だった。彼らの高校は制服が学ランなので黒い生地の上についた白い牛乳の染みは嫌でも目立つ。
あと三日着なきゃいけないのに、なんて事してくれんだあの野郎。
卒業式間際のタイミングでこの手の事をかますあたりが、毎度ながらに迷惑な存在だった。クリーニング代が勿体ねえ。
それでも根気よく頑張ってみたら、大分落ちたようなので最後に広げて目視確認。ＯＫ。よく見れば分かるかもしれないが、これなら注視しなければ気づかないだろう。
手を洗って席に戻ると、既に深夜のフリーズは解除されていた。こいつ相手に今更怒っても意味ないが、とりあえずすれ違い様に背後から椅子を蹴り飛ばす。突如椅子を奪われた深夜は呆気なく床に転がり落ちた。
ざまぁみろ。
多少なりと溜飲を下げ、席につく。てっきり反撃してくるかと思

いきや、深夜は文句も言わずにあっさりと椅子を拾って座りなおした。
「お前、ＷＩＳに入団すんの！？」
全ての空気をキャンセルし――ついでに謝罪もキャンセルして、さらりと会話を再開する。
「ＷＩＳって…あのＷＩＳだろ？異端児の組織としちゃ最高峰じゃん。試験とかめちゃくちゃ難しーんだろ？そんな簡単に入れんのかよ？」
「簡単かどうかは知らんが、ま、なんとかなるだろ。つっても入団試験は毎年五月だから、受けるのはこれからだけどな」
ＷＩＳの入団は年に一回。年齢制限・国籍や資格は一切なく名前からすると、一見異端児のみの集団にみられがちだが（事実、世間にはそう思っている者も多いが）実は普通人であっても受験が可能である。ただし、その能力や年齢に対しなんの保障も保護も得られないというだけで。
「なんでそんな中途半端な時期なんだろうね。普通四月か九月だろ」
うちのばあさんの誕生日だからだよ。
「で、どこの受けんの？確かあれって国籍関係なく各国の入団試験を受けられるんだよな」
「ああ。とりあえず俺は日本の受けるけどな」
「日本…てことは京都か。じゃあ、お前高卒で出家すんだ」
「出家とかいうな。意味が変わるわ」
真雪は憮然として烏龍茶を飲んだ。

WIS

ＷＩＳ。正式名称Ｗｏｒｌｄ　Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ　Ｓｏｃｉｅｔｙ――世界異端社会連盟。あらゆる意味で世界からはみ出てしまった、文字通り『異端児』の集合組織。

一部では新規のオカルト集団だのと揶揄されているが、実はその門戸は広く一般的にも開かれており、普通人（ノーマル）の構成員も数多く存在する。本国はイギリスのロンドンにあり、その支部は世界各国に存在する。その背景、組織の前身としての歴史は非常に古いものがあるが、それが今の形となって世に知られるようになったのは実はごく最近の事だ。

かつて。

魔女と呼ばれ聖女と呼ばれ仙人と呼ばれ妖怪と呼ばれ陰陽師と呼ばれ霊媒師と呼ばれ天使と呼ばれ悪魔と呼ばれ賢者とよばれ聖者と呼ばれ、あらゆる国、あらゆる時代、あらゆる場所において、尊敬であれ軽蔑であれ様々な差別を受けてきた、様々な区別を受け続けてきた異端児が、一般人と同様に公の市民権を得たのはそう遠い昔ではない。

時は十九世紀の産業革命時代。大英帝国を発端とする経済成長が地球環境を容赦なく蝕んでいくなか、とあるドイツの学者によって一つの論文が発表された。詳しく述べると専門用語やら何ならで難しくなるので、誤解を恐れず乱暴に言ってしまうとそれは、これまで塵災害（じん）の原因とされてきた塵（ダスト）が電気やガスに変わる新しいエネルギー源として利用出来る、という内容だった。この論文は世界中に比喩ではない激震を与えた。彼は論文中で塵が空気中に含まれるような、ごく微量の存在では人体やその他の生物にとって無害であること。またその原子より小さな物質の中に核に匹敵する熱量が存在すること。停止し続ける物体が長期に渡って日光と月光にさらされた場合、空気中の塵と結合して塵災害を引き起こすこと。そして物

質との結合から分解された塵を神と名づけこれが環境に対し極めてクリーンなエネルギーとなることを、世界に対して証明してみせた。それは世界そのものを否定するかのような、非常にショッキングな内容であり、同時に微塵の隙もない見事な理論だった。

産業的・社会的・環境的な面から見て塵は非情に魅力的な物質だったが、単体としての塵自体は相も変わらずただの厄介源に過ぎない。塵を有効なエネルギー源として利用するためには　塵を神へと加工するには塵に含まれる不純物を取り除くという濾過作業が必要となる。だが、神の技術開発についてはどこの研究機関でもまだ歴史が浅く、濾過設備の開発についても膨大な時間と莫大な費用がかかる。そこで注目を集めたのが、それまで迫害の対象とされてきた異端児の存在だった。彼らは自ら肉体を媒介にし、塵を神へと変換し自在に操る能力を生まれながらにして身につけていた。それが所謂、神威能力である。

かくて。

その論文の発表を契機に異端児達の社会的立場は飛躍的に向上した。一つの研究施設が三十年間かけて製造した設備機能を、生まれながらにして備えている存在がいるとしたら嫌でもその価値を認めざるを得まい。論文の作者である人物が異端児ではなく普通人だったことも、無視出来ない要因の一つだろう。

とはいえ、長年に渡り積み上げられてきた『悪しき歴史』はそう簡単に覆せるものではない。その異能によって長きに渡り世間から蔑まれてきた異端児は、手のひらを返したような世間の態度に対し素直に研究対象とされる事を是とせず、逆に各国に散らばる同胞達と一致団結してある機関を作り上げた。それが現在のＷＩＳだ。

入団するには厳しい審査を受けなければならないが、資格については特に必要とされるものはない。設立当時は純粋な異端児の集団だったらしいが、今では普通人であれ異端児であれ分け隔てなく受け入れる。そんなＷＩＳが各国の支部で共通に掲げる唯一にして絶対のルールはただ一つ。

『我らは誰の支配も受け入れない』
　世界中のありとあらゆる政治権力に属さず名誉や賞賛であっても外部評価など一切受け入れず，意の向かない事は命をかけてもやろうとしない。世界中から蒐集された非人間（異端児か普通人に限らず）の吹き溜まり。しかし反面、彼らがあげている塵研究の成果は絶大である。
　月ステーションは第三宇宙居住区で使用されている生命維持装置に組み込まれた半永久機関の動力も、現代医学では不可能とされていた塵の物質再構成機能を利用した放射線を使わない末期ガン治療も、身近なところでは原子復元機能の応用によるアンチエイジングなど、その全ての神使用に対する技術提供をしたのがＷＩＳである。現代生活において塵はもはや欠かせない存在ではあるが、それに伴いＷＩＳの地位もまた不動なものとなりつつある。
「――以上、背景説明終わり」
「え？何？」
「いや、なんでもねーよ。ただの意味ない独白って奴だ」
「ああ、若年性アルツか。気の毒にな」
「誰がアルツだ」
　突っ込みながら頭を叩くと、今度は深夜もやり返してきた。痛み分け。相身互い。
「けど真、お前なんでこんないきなりＷＩＳに入団なんてする気になったんだ？　また随分と唐突じゃないですか」
「別にそんな急でもないだろ。特に隠してたつもりもねーし」
「でも俺知らなかったよ？」
「それはお前が今まで、他人の進路にまったく興味を示さなかったからだ」
　よりを正確に言うならば、そもそも他人の将来を気にかけるほどの余裕がこれまでの彼には一切存在しなかったのだが。人間、余裕がないと人への気配りが出来ないというお話。
「つっても意外だなー。俺、お前はあんま異端児とか興味ないのか

と思ってた。そういうの気にしてる雰囲気なかったし」
「あー、まあ、気にしてはいなかったけどさぁ」
まじまじとこちらを見つめる深夜の視線に、なんとなく決まり悪いものを感じて曖昧にぼかす。実際、隠していたつもりはないのだが、いちいち説明するのも面倒くさい。
が、深夜はそんなこちらの胸中など気にも留めず、
「いや、てっきり俺、お前は趣味の猟奇殺人に勤しみながら殺人技術向上の研鑽を積んで、ゆくゆくは暗殺者としての人生を歩んでいくもんだとばっかり思ってたから」
「勝手に人のプロフィールを捏造してんじゃねぇ！誰がいつそんな犯罪歴をお前の前で披露した！？」
さらりと適当なことを抜かす深夜に、さすがに聞き捨てならず全力で怒鳴り返す。なんでどいつもこいつも人を犯罪者予備軍みたいな扱いをしやがるんだ。
しかしあろうことか、こちらの反論に対してむしろ深夜はちょっとびっくりしたように目を見張り、
「え？嘘？真の趣味って通りすがりに道行く人を老若男女無差別に切り刻むことじゃなかったの？」
「誰がだ。つーかお前は今まで自分の友人を何だと思ってたんだ」
「俺も幼馴染の好で通報はしないであげようとは思ってたんだけど…」
「いらん気遣いだし。ていうか別に、通報されるような事今までしてねーし」
少なくとも他人にバレる範囲では。履歴書の経歴はまだ真っ白だ。
「でも確かお前、ゾルティック家のキルアと従兄弟だろ？」
「何が確かだ！最もらしく何の根拠もないことを言うのはいい加減やめろよお前。そして自分の思いつき設定を生かすためにさらに現実の捻じ曲げようとすんのやめろ」
大体。
あんな物騒なセレブと親戚筋にあたるなら、家事手伝いのみで巨

万の富を得て一生遊んで暮らしてやるわ。だって小学生のお菓子代が億単位なんだぜあの家？

「全くどいつもこいつも…どうして俺の周りの人間はこうやたらと人を犯罪者扱いしたがる奴が多いんだ」

なんか聞き覚えのある設定だと思っていたら、よく考えれば冒頭シーンでの姉と会話時に使っていた内容だ。まるで接点のない二人から同じネタでからかわれてしまった。

…そんな物騒な印象かなぁ、俺？

相手が相手なだけに、気にする必要もないがほんの少し傷つく。

ほんの少しだけ。が、深夜はあっけらかんと、

「え、そりゃそーだよ。この前、偶然白に会った時、ゆーちゃんを個性を出すためになんかネタ考えようって話になって趣味は猟奇殺人ってプロフィールを付け加える事で決定した」

「全身全霊余計なお世話だ」

絶対零度の冷たさを持ってきっぱりと告げる。ていうか、そもそも犯人お前らかよ。なんでさりげなく仲いいんだ。あの空前絶後の引きこもりとこの少年が、どこで遭遇したのかがそもそも謎である。普通に生活をしていればはぐれメタル並みの遭遇率なのだが。

「それはそうとお前、いつから京都行くの？」

「卒業したらすぐにでも、の予定。つっても三月は引越し代が高いから四月の頭ぐらいだな」

「ふーん。一人暮らし？もう家とか決まってんの？」

「いや、一人暮らしってーか、親戚の家に居候させてもらう予定。出張ばっかで普段っから留守になる事が多いんで、家の管理がてら余ってる部屋を貸して貰う。管理人兼なんで家賃は無料」

「条件いいじゃん」

「まぁな」

実際に、はたから聞く分には何一つ不足はない。なんの資格も持っていない高卒が独立し始めるには、いささかならず恵まれた条件である。深夜は素直に感心した。

「場所はどのへんよ?京都っつっても広いべ」
「千本…って言って分かるか?ま、一応市街地に近いところだよ。観光地っつっても碁盤目状を離れちまえば結構な田舎だからなぁ、あそこも」
「そーなん?俺、京都っつったら壬生寺ぐらいしか思い浮かばねぇわ」
「…だからなんでお前はそこで微妙にマイナーメジャーな方向に走るんだよ」
普通に清水寺とかいえないのかお前。飽きれ混じりに突っ込むと
「修学旅行で行ったじゃん」と、深夜はししししっと朗らかに笑った。
「ふーん。そっかそっか。ところで真。そーゆーことなら俺、一つお前にお願いがあるんだけど」「断る。何だ?」
聴覚が認識した音声を脳に伝えてその情報を吟味するより早く、脊髄反射によって一秒のタイムラグすらなく拒絶する。我ながら改行を挟むすらない見事な速度だった。
「断ってから内容聞くなよ。せめて聞いてから断れよ」
「お前からの頼み事なんざ、断るのにいちいち話聞く必要があるかよ。脳内で思考するまでもなく条件反射で断るわ」
「ちぇっ、友情がいのない奴だなーゆーちゃんは。で、お願いっていうのは実はさー」
「だから断るっつってんのになんでそこでナチュラルに話を展開させようとしてんだ!?俺はお前のそういう人の都合を無視して、いつの間にかさらりと自分本位に話を進めていくところが本気で嫌なんだよ!」
「はっはっは。真は強情だなー。ま、別にいーじゃんよ。卒業後にお前が独り立ちするってんならこれが最後のお願いって事になるかもしんねーし」
深夜は伺うようにこちらを見ると、にぃっと笑みを浮かべた。この少年が持つ独特の、人を喰う笑み。そう、それはまるで　こんな古典的な表現方法を許されるのなら、とある童話に出てくる世界

一有名な猫のような笑みだった。
明るい茶髪の下から覗く瞳が、きらきらと如何にも楽しげに輝いている。三日月猫ような彼は、確信に満ちた口調できっぱりと告げた。
「それに、お前が俺の頼みを断りきれた事なんて今まで一度もなかっただろ？」

ＷＩＳ（後書き）

お気に入り登録をしてくださった方。ありがとうございます。
感想などお気軽に頂けますと、より励みになります。

クロノ

黒野家は古い血筋の家系である。

さすがに神代の時代より延々と続く、とまではいかないが、それでも遡ればその起源は平安にまで辿り着く。遥か千年以上の長きに渡りその血筋を代々守り続けてきた、その血脈を脈々と繋ぎ続けたという、価値があるかどうかは知らないが少なくとも歴史のある一族だ。

その始祖となったのはとある一人の女性だったという。残念ながら正確な名前は伝わっていないが、伝承によるとその彼女は、神に等しき力を持つ花のごとく麗しい人物だったそうだ。昔の話ではあるし英雄譚には尾ひれ葉ひれがつくものとして、話半分に捕らえたとしても『神』の呼び名がつけられる時点で、彼女が一角の人物であっただろうという事は想像に難くない。実際、伝説の真偽はともかくとして始祖が残したとされる塵の技法や術式などは、当時のレベルから比較するとずば抜けたものであった。その多くは現代においてさえ使用されており、彼女が黒野家の礎を築いたといっても過言ではないだろう。

家系図の中には『赤姫（あかひめ）』とのみ、その名が記されている。故に彼女の末裔はその偉大なる祖を呼び現す時には『始まりの人』『赤姫』あるいはもっと単純に『彼女』とのみ呼んでいる。

起源が女性であったためかどうかは知らないが、代々女系の家系である。ついでに、女傑の家系でもある。生まれる頻度は圧倒的に女性の方が確立が高い上に、生まれてみれば際者曲者キレ者揃いという、男の身からすれば非常に迷惑な話だ。まあ、確かに日本は元を正せば母系社会らしいけど。そして今では男女平等の時代なんだけど。女性進出が盛り上がっている時代ではあるんだけど。それでも時々、思わなくもない。

何も千年も時代先取りしなくていいだろ、と。

歴代の黒野家男子がことごとく自分と同じような境遇と思いを抱いていたのだろうということが、はっきりと確信出来てしまうだけに少し――ほんの少しだけ思うところが、ないわけでもない。

それはともかくとして黒野家の人間が誰もが『彼女』に焦がれている。

文字通り恋焦がれている者もいれば、その才に対して嫉妬に焦がれる者もいる。ある者は羨望し、あるものは畏怖し、それでも誰もが『彼女』の存在を恐れ敬い慕っていた。それは、祖を尊ぶ風習が薄れた現代では非情に分かりにくい感覚なのかもしれないが、祖霊――一種の神霊に対する敬意に近いのかもしれない。

幼い頃から折に触れ、その『彼女』の英雄譚を聞いて育った真雪にとって『彼女』は文字通りに英雄だった。『彼女』が残した偉業の数々も、まだ子供だった彼にとっては胸躍る冒険譚の一つでありそれはまるで異世界の御伽噺のように。

不可思議で。

不可解で。

不可能に満ちたわくわくするような物語だった。いつか自分もこんな凄い冒険をしてみたいと、そんな『彼女』のような存在になりたいと本気で思った。幼い子供がお話に出てくるヒーローを目指すように、彼もまた心底『彼女』に憧れた。

そしてその気持ちは。

今も少しも色褪せない。

◆　◆　◆

「…あー、喰いすぎで胃が気持ち悪ぃ…」

夜。

古き世とは異なり、現代では例え空の陽が沈み夜の帳が幕を下ろそうと人の住む場所に真の闇が訪れる事はない。路は街灯に照らされ都心ではビルに浩々とした明りが灯り、昼も夜もないその人工の

光は夜闇を照らす月光ですら霞ませてしまう。
光は人類が文明の進化と共に得た掛け替えのないものであり、同時に引き換えとして世界から多くのものを奪っていった。夜の闇もその一つだ。
文明の失われぬ限り、もはや人のある場所に夜の闇は訪れない。
悪友と別れて自宅まで辿り着いた彼は、なるべく音を立てないようにそっと門を空けた。特に門限をつけられているわけでもないが、姉にでも見つかったらまたごちゃごちゃと煩い事を言われそうな可能性がある。不要な要素は可能な限り排除するに越したことはない。とはいえ
門をあけた程度の音じゃどうせ誰も気づかねーけどな。
人の来訪をその存在だけで拒むかのように巨大な門戸を開き、家までの道を歩きながらそんな事を思う。そんな事を思うことが出来るくらい門から家までの距離が遠い。
彼の家は武家屋敷だ。
都内二十三区にある庭付き一軒屋。一体いつから続くのか（あるいは意外に近代に購入したのか）は知らないが見るからに重厚な如何にも古めかしい造りの日本家屋だ。城門のごとき門を潜るとそこには、池や縁石やら石灯篭やらが置かれた雄大な日本庭園が広がっており（親父の趣味だ）住宅街のど真ん中にありながら、まるで人の世とは隔絶されたような静寂な空気が流れている。
ひょっとしてこれ実は重要文化財か何かに指定されてんじゃねぇかと思うぐらい、年季の入った家だが、更にとんでもないのがその庭面積だ。庭というより庭園というより公園といった方が近い。昔、自宅に遊びにきた同級生が冗談ぬきに庭で遭難したことがあるほどである。
東京の土地が高いって嘘だろ。
家族四人で住むには些か以上に広すぎる自宅を見る度に、つくづく思う。完全な所有物件なので家賃はかからないが、かわりに税金が半端ないらしい。と、いうのが現所有者である祖母の言だ。

静まり返った庭内では、靴音さえよく響く。真雪は縁石をよけながら苔生した庭を進み、ふと思いついてその歩みを止め――くるりと方向を変えると離れ近くの土蔵を目指す。

「…ま、べっつに急ぎってわけじゃねーんだけどさ」

多少愚痴るような口調になったのは自分に対する言い訳だったのかもしれない。実際、それは特に急ぐ用事でもなかった。そもそも用事というほどのものでもない。無理やり押し付けられただけの厄介事に過ぎない。

『頼みっつってもそんなに面倒なことじゃなくってさ。ちょっと鑑定的な事をして欲しいわけよ』

『はぁ？ざけんなよなんで俺がつーか鑑定なんか出来るわけねーだろ。なんだ？どっか田舎の倉庫から意味不明なもんが出てきたか？なんでも鑑定団にでも出してこいや』

『いやいや。惜しいけど別にそーいうんじゃなくて。つか、なんでも鑑定団出すならむしろお前の家の蔵だろ』

『今んとこ中身売る予定はないんだとよ。だったらなんだ？お前の未来でも鑑定して欲しいってのか？まあ、見るまでもなく暗雲に覆われてるけどな』

『ヤだよ。それこそなんでそんなのお前なんかに頼むんだよ。真って人を見る目ねーじゃん』

本気で心外そうに断られた。

人を見る目がないと言われた。

『それが人に頼みごとする奴の言い草か。――ま、どっちにしろお前の頼みなんざはなから聞く気がないんで関係ないけどな』

『結局最終的にはどんなお願い事も絶対に断らない癖にー。お前って本当ツンデレだよね』

『やめろ。勝手に人を変なカテゴリに括るな』

『まぁ、お前がツンデレってのはただの真実だけど。鑑定っつっても美術品とかじゃなくってさ。これこれ。精霊石』

『……嘘だろ？』

『その嘘かどーかをお前に判断してもらいてーんじゃん。なーんか知り合いから借金のカタに貰ったんだけどさ。公式鑑定じゃやっぱ金かかるし高いじゃん。もし偽物だったら鑑定料で赤出るのも悔しーし』

『それで俺かよ？』

『いーだろ別に。お前だったらそーゆーのぱぱっと分かるべ？ＷＩＳデビュー目指してんなら、これくらいの事朝飯前に解決出来なきゃいかんでしょ』

『因みに借金の額はいくらだ？』

『二千円』

『…聞いた俺が馬鹿だった』

更にいうなら引き受けた自分はもっと馬鹿だ。

自分自身に飽きれながら歎息を漏らし、ポケットから問題の品を取り出し、なんとなく月光に翳してみた。古い意匠の銀の指輪。その年代を物語るように――あるいは単に手入れ不足の証のように金属部分が薄く黒ずんでいる。全体に精緻な紋様が施されており、そのせいで指輪自体が透かし彫りになっておる。一見すればなるほど、歴史ある品のようにも見えるしそれっぽく作られただけのパチもんにも見える。判断に困る。

そしてその中央に輝く留め金で固定された、赤く紅く暗い石。濃い赤暗色は月光の下ではほぼ黒に近い。冴えた夜の光の中では、その内に秘めるものを照らしきる事は出来ない。

精霊石は数ある奇石の中で最も価値のある一つだ。通常は空気中に分散している塵が結晶化し安定したもので、その価値はダイヤモンドなど遥かに凌ぐ。一粒で一財産と言われている。

「――勿論、本物ならの話だけどな」

真雪は独りごちると、月天に掲げた指輪を自分の指に嵌めてみた。するりと、まるで計ったようにぴったりと嵌まる。やばい。抜けなくなったらどうしよう。

一瞬地味な焦りに襲われたが、考えてみればそもそもが単なる親

切心からのボランティアだ。礼を言われこそすれ、文句を言われる筋合いもない。いや、それでも文句をいうのが深夜なんだけど。

まあ、いいや。

一般的に、普通人が精霊石を見分ける術はないが、異端児になら何の苦労もない。簡単な事である。実際に使ってみればいいだけだ。

「ただし、この方法は今回は禁止だよな」

塵エネルギーの結晶体である精霊石は指向性を持っていない高密度の塵だ。異端児ならばそのエネルギーを転化して利用出来るが、その場合使用された精霊石はただの鉱石となり粉々に砕け散ってしまう。奴がこの指輪そのものを得ようとしている以上、その手段は論外だろう。精霊石がついてなければ、こんなものただの汚くて古いだけの指輪だ。

「確か、蔵の中に月日の鑑定セットが入ってた筈だよな…」

最善の方法が選べないのならば次善の手段を選べばいい。単純にそう結論を出すと、彼は蔵の扉を開け――

宝物庫の中に、見たこともない黒尽くめの不吉な男を発見した。

命日

「――……は？」

一瞬、わけが分からず思考停止する。

足の踏み場もないほどに散らかった室内。根こそぎ荒らし尽くすような、軒並み散らし尽くしたような。壁は破れ花瓶が砕け壊された木箱の破片があちこちに散乱している。それより何より最も目を引いたのが、恐らくは確実にこの状態を生み出したであろう男――男か？の姿だった。体格は少し細身。顔に覆面、手には手袋。足元には見るからに頑強なブーツを履き、全身を黒衣に包んでいる。皮膚といい髪といい全身を包むパーツの一切全てが露出されていないので、ぱっと見で年齢はおろか性別や人種さえも断定出来ない。だけど。それでも。

この不吉な存在が、どうしようもないものだということだけは、はっきりと理解できた。

理性ではなく直感でもなく。本能よりなお原始的な何かが、脳を揺さぶるように全身という全身に危険信号を発している。吐き気がするほどの重圧感。ヤバイ。

「――……っ」

威圧される。圧倒される。マズイ。

逃げないと。みんなを逃がさないと。俺の――

その男は。

突然の家主の登場に、しかし慌てる事無く焦る事なくたった今まで手にしていた箱の中身を、まるで興味がないとばかりに塵のように投げ捨てた。放り投げられた小さな何かが、乱雑な背景に紛れてその価値を失くす。

何しているんだろう。何をしていたんだろう。何を探しているんだろう。

「……――お、前」

意図があったわけではない。

声をかけた時には、何かはっきりとした目的があったもない。ただ自然と声をかけていた。あるいはこの存在を目の前にしたまま、なんだかよくわからないという不確かな状況下にいることに自分でも耐えられなかったのかもしれない。

だが黒衣は、そんなわけもないのにまるでそこで初めてこちらに気づいたように、特に興味もなさそうな様子でゆらりとこちらを振り向いた。覆面に覆われた顔からは瞳も表情も伺えない。まるでのっぺらぼうでも相手にしている気分だ。が、その覆面の下から覗く視線が暗い食らい視線が突き刺さるように自分に向けられていることをはっきりと自覚する。

しくじった……っ！！

遅まきながらも痛烈に思った。声なんかかけるべきではない。黒衣を目にした瞬間に後先考えず逃げるべきだったのだ。男の意識がこちらに向く前に。

逃げられる可能性があるうちに。

「……――……××××××……――」

黒衣が何かを呟きながら、すっとこちらに歩み寄る。当然だ。唯一の出入り口を自分が背にしていえる以上、そこを通らずに外に行くことは出来ない。あまりにも自然に。何の気負いもなく歩く様子に我知らず後ずさる。と、刹那

まるで最初からそこに生えていたように。一本の銀のナイフが深々と真雪の腹に突き刺さっていた。

「……はっ」

――なんだこれ？

何が起こったか分からぬまま、呆気にとられて腹部を見やる。細長い銀の刃。それ自体には何も価値もないただの道具に過ぎない。刃渡りはせいぜい十ｃｍ程度だろう。ダガーナイフやアミーナイフ

のような肉厚で無骨な類ではない。ともすれば芸術品と紛うばかりに繊細で薄い造りの刃物が、刺したというより『ただ隙間を通した』といわんばかりに、柄の部分ぎりぎりまですっぽりと体内に埋まっている。刺された箇所にはまだほとんど血の滲みもなく、ただどうしようもなく致命的に彼の内蔵を抉っている。

なんだよ、これ……

鋭く冷たく硬質な刃が柔らかな肉を貫き、堪えがたい激痛が襲ってくる。傷の上から手で押さえてみるがどうしようもない。触れる指先が、さっきよりも徐々に広がりつつある血の染みを捕らえる。

「あ、ぐ……」

我知らず力を失い、がくん――と膝から潜れ落ちる。その、無様に倒れかけた自分に気にも留めず、不吉な男が何事もなかったように横を通り過ぎていく。何事もなかったかのように。自分が殺しかけた存在になど、本当にどうでもよさそうに。

ふざけるな。

気を失いそうになるほどの激痛を無視して、去り際の男の足をあらん限りの力で掴む。行かせるか。

それが自殺行為であることは、誰に言われずとも承知していた。賢明な判断を選ぶなら、ここは黙ってやり過ごすべきだ。ポケットには携帯電話が入っている。男が過ぎ去った後で助けを呼ぶのは難しくない…

だがしかし、それでも真雪にその選択は出来なかった。少し離れた母屋には姉も父も祖母もいる。相手が何者か目的が何なのかも分からない、けどそんな事はもうでもいい。行かせるか。

絶対に計り違えてはならない天秤に、大切な家族の命がかかっている。たとえ無駄な足掻きであろうと見逃す事は出来ない。

こんな不吉な存在を、俺の家族の所になんて行かせて堪るか。

握り締めた足首からみしりっ…と骨の軋む音がする。真雪は途切れそうになる意識を死に物狂いでかき集めて軋るように呟いた。

「――行く、な」

それは如何にもか細い言葉ではあったが――

仮に相手に言葉が通じなかったとしても、こちらの意図が届かなかったという事はないだろう。そのせいか。あるいは単に掴まれた足首の痛みが気に障ったのか。男が無関心にこちらを振り向いた。見下ろす視線と見上げる視線が、覆面越しに絡み合う。

「……？」

当然の事ながら相手の表情は伺えない。だからなぜそう思ったのかは自分でも分からない。でもなぜかその時。

俺を見て微笑ったような気がした。

疑問に思うも束の間、足を掴んだままの手を手首の骨ごと踏み砕かれて、真雪は声も上げずに絶叫した。体の一部が崩れる痛みに、それでも足を離さずにいると、今度はその足が再び頭部へと容赦なく叩きつけられる。

声もなく。

言葉もなく、容赦なく破壊された少年の体は、今度こそ力なく崩れ落ちた。男はその様子を一瞥するとその少年に未だ掴まれたままの足を、瀕死の間際に意識を失って尚離さなかった彼の手を一歩進むだけで呆気なく振りほどき、その場を静かに後にした。

血に染まった視界の中に、その姿を納める。それが、彼の見た最後の景色。

あー、これじゃやっぱり深夜に指輪返せねーや。

身を裂くような熱さと。溶けるような寒さと。犯し難い眠気に襲われながら一人、冷たい倉庫の床に血まみれで横たわりそんな事を思う。

そして。

――――……

、、、、、溶暗。

――死。

ある彼女の日常

緑陰の闇を泳ぐように、彼女は一人気ままに庭を歩いていた。壁で囲まれた箱庭は夜陰に閉ざされ如何にも歩きにくそうではあるが、気に留める様子もない。軽やかな足取りで闇の中の散策を楽しんでいる。歩く度に微かな衣擦れを立てるショールは月光に照らされ絹の光沢を放ち、春風に靡く様がまるで舞姫の羽衣のようだ。

闇の中を進むのは、どこか水中を歩くにも似ていた。見上げても水面のない水底。いつかこの空が水に覆われる日が来たら、果たしてそれは今の世界とどう違うというのだろうか――

自らの詮のない思考に、彼女はくすりと笑みを零した。魅惑的な紅い唇が僅かな弧を描く。実際、気分は悪くない。先の見通せない暗闇というのは、なるほど生きていく分には不便かもしれないが、彼女にとってはその感覚はとても新鮮なものだった。自分にすら見えない世界。それを思うとなんとなく嬉しくなる。

とはいえ、進む足並みにはまるで迷いがない。予め決められていた予定をなぞるように、彼女はそこに辿り着いた。

扉を開ける。と、中から零れる光の強さに闇に慣れた目を僅かに細めた。明反応は暗反応より時間がかかる。長い睫に縁取られたブラウンの瞳が、眩しそうに眇められる。

光に照らされた室内は――

一言でいうと、散々たるものだった。あらゆる物が散らかり床に投げられ壊されている。整理にしろ修復にしろ、元に戻すには手間と時間がかかるだろう。

端麗な顔をほんの少しだけしかめ、自分ではない気の毒な誰かが行うであろう片付けの手間を思い、彼女は軽く歎息を漏らした。が、すぐに意識を切り替え中に足を踏み入れる。踊るように滑らかな足取り。室内をぐるりと見回し、不思議そうに小首を傾げた。端整な容姿には酷く不似合いな子供っぽい仕草。長いセピアの髪がそれに

あわせてさらりと流れる。
「…あら？なんだかここで私の大事な大事な弟が、幼馴染に頼まれたお願いごとを純粋なる親切心で解決してあげようと仏心を出し、うちの蔵に道具を取りにきたら、厚かましくも我が家に忍び込んでいた不法侵入者に、いきなり問答無用で刺されたたあげく、腹部に穴が開き大腸菌が血管を通じて脳に達してしまい、出血多量の前に細菌感染による脳損傷で今にも死にそうになって、床に倒れてる気がしたのに…私の可愛いゆーちゃんは、夕飯の支度もサボって一体どこに行っちゃったのかしら？お姉ちゃんはおなかが空きました。罰として、後で呪ってあげちゃうわ」
白雪は。
黒野白雪は。
いつも通り登場とともにいきなり全ての状況を見抜きいつも通り神のごとく万事を把握した彼女は、やはりいつも通りそれ以上の事は何もするつもりがないようだった。全知にして零能。無力な万能の魔女は荒らされた室内の様子など気にも留めず、その透徹した双眸には欠片の悲嘆も悲観もない。探しにきた筈の弟の姿がないことすらも全て、予定調和だというように。
真雪の不在を確認すると、そのままあっさりときびすを返して蔵を離れ――去り際に何かに気づきふと床の一点に目を留める。そこには。
「……あら？」
既に酸化してどす黒く変色した血溜りがあった。

ここは？

ながらへば　またこの頃や　しのばれむ

◆　◆　◆

風の音。緑の匂い。血の温もり。原初の空気。命尽きる寒さ。

土に頬をつけながら――つまりは地面に倒れた状態で――真雪は生と死の間隙を彷徨っていた。死にたくない。

何が起こったのか分からない。どうなっているのか分からない。自分の状態も置かれた環境も、突然に起こった出来事も。家の蔵にいたはずの自分がなぜ地面の上に倒れているのか。それを疑問に思う余地すらない。

ねっとりとした、真夏の湿気のように濃厚な空気中にある何かが、肌に絡みつく。厭わしく、そしてどこか懐かしい。

流れ出る血液と共に何か――生命を維持する上で欠かせないであろう何かがゆっくりと失われていくのを感じる。此方の一歩が遠ざかる事に彼方の世界へと近づいていく……

ちくしょう。死にたくない！

「――――――？」

と、その時。

僅かな違和感を感じて、彼は残っていた意識の全てを集中し耳を研ぎ澄ませた。幻聴ではない。倒れた地面を通して音が直接響いてくる。何かが歩く音、何かが近づいてくる音。近づいてくる者がいるという事。何かがやってくるということ。

「――い！確りしろ！大丈夫か！？」

唐突に。

聞いたことのない男の声が頭上から降り注いできた。続く足音と

――複数の人の息遣い。顔を上げる気力もないので姿を見ることは出来ないが、声の主は自分を見て絶句したように息を飲んだらしい。竦む気配になにやら緊迫した様子が伝わってくる「一体どうして――」「誰なんだこれは――」「生きているのか――」「なんで……ところに　」「　早く……に――」「――治療を　」「――」音が。

次第に遠ざかっていく。

僅かに残っていた聴覚までもが麻痺していく。それと同時に体から――疾うに限界を過ぎていた体から今度こそ力が失われていくのが分かった。腕が動かない。足が動かない。寝返りどころか顔も上げられず助けを求めようにも喋る事さえ出来ない。

だけど、もうどうでもいい……

生暖かい自分の血溜まりに沈み込みながら、乾いた土の匂いに包まれ真雪はゆっくり眼を閉じた。

今眼を閉じたらもう二度と目覚めないかもしれない。最後にそう思った。だけどどうすることも出来ず彼の意識はそこで途切れた。

◆　◆　◆

知らない部屋の布団の上で彼は目を覚ました。

「……あれ？」

びっくりした。

一瞬夢オチかと思った。

覚醒しきっていない頭は未だ眠りを要求していたが、それを振り払ってあたりを見回す。

「……どこだ、ここ……」

見覚えのない部屋。硬い板の間。フローリングではなく、剣道場のように加工されていない本物の板の間だ。清潔だが薄くて硬い布団が床に直に敷かれており自分はそこに寝かされていたらしい。妙に体の節々が痛いのはそのせいか。床と変わらねぇじゃねーかこれ。

ついでに首が痛いと思ったらなぜか枕が箱枕だった。こんなもの、小学生の頃に歴史の資料集でしか見たことない。なにかの苛めだろうか？枕元には盆に置かれた水差し。気が利いているのかいないのかがいまいち分からない。

水差しを見て、真雪は喉の渇きを痛烈に意識した。身体が汗で湿っている。だが決して汗ばむほどの陽気ではない。むしろ目覚めてみれば、周囲の気温は少し肌寒さを覚えるほどだった。なんで、こんなに汗をかいたんだろう。

悪い、夢でも、見たんだろうか……？

身体を起こそうとして——途端、腹部に引きつるような激痛を感じた。起き上がるのを諦め、元の位置に収まる。いつに間にか着ていた浴衣（温泉宿などで出てくるぺらっぺらなものではなく、麻で出来た本物のそれだ）をはだけて、自分の腹部を確認する。布で覆われたわき腹に、紅い小さな染み。それを見た瞬間、全ての記憶が繋がった。

「……ああ、思い出した」

そうだ。あの時俺はあそこで刺されて、それで——それで。

「それで、どうなったんだ……？」

痛みで意識が朦朧としていたためか、失う寸前の記憶がはっきりしない。誰かに助けを求め、誰かが助けてくれたような気もするが定かではない。

「……てゆーか、だとしたら本気でここ、どこだ？」

間違っても自宅ではないし、とりあえず知り合いの中にこんな板の間のある家はない。月日の別邸という事もありえるが、さすがにそれはないだろう（あの女は西洋かぶれだ）

あの世？

可能性としては一番高いが、彼は無神論者だったのでその案を却下した。次いで思いついたのが地獄という選択肢だったが、やはり同様の理由で却下する。第一、

「死後の世界にしちゃぁ、なーんかありがたみがねーよなぁここ」

ていうか俺は死んだのか？

俄かには受け入れがたい見解ではあったが、それを否定するほどに根拠ある回答を思いつけそうにない。だが、丁寧に施された治療の痕は幻想の死からは程遠く、どことない違和感がある。そぐわない、というか。一部だけが妙にリアルで夢と断じ切れない感じ。と、そこで。

思考を一時中断すると真雪は、ばっと音を立てるほどの勢いで、唐突に扉へと振り向いた。

気配を感じた、などという繊細な話ではない。少なくとも、相手に隠すつもりは全くなかったのだろう、板と布が擦れる——誰かが近づいてくる足音。俄かに緊張し、視線を入り口へと向ける。それはだんだんと大きくなり、この部屋の前でぴたりととまった。そして。

がらりと音を立てて扉が開くと、そこには見知らぬ男の姿があった。

「……おや？」

厳しく睨むこちらの双眸に——起きていたのが予想外だったのか——きょとんとした相手の顔が映る。が、男はシャッターを切るようにカシャンと表情を切り替え、

「あ、よかった。目が覚めたんだね」

そう言ってにっこりと笑みを浮かべる青年を、真雪は無言で見据えた。

そこにいたのは背の高い一人の青年だった。年の頃なら二十歳前後。未成年ではないだろう。あるいは単に見かけが大人っぽいだけかもしれない。柔和そうな顔立ちに、優しげな笑みを浮かべた優男だ。長い黒髪を背中で一つに括っている。が、それより何より特筆すべきは彼の服装だった。男は着物を着ていた。いや、それならばまだいい。ひょっとして実家が茶道の家元か何かなのかもしれないし、そうでなくとも世の中にはいろんな趣味の人間がいる。和装趣味の人間だっているだろう。少なくとも猟奇殺人よりは平和な趣味

だ。それだけならば特に変な事ではない。
だが、男の服装は単なる和装趣味を通り過ぎて斜め上に変だった。変というより単に異常というか。
青年は狩衣と呼ばれる着物を着ていた。平安時代、貴族の一般的な装束だったといわれる例のアレである。一枚布の着流しや紋付はかまをはるかにぶっちぎって異常な格好だ。今日び、そんなものは仮装や葵祭りでしかお目にかかれない。いつの時代の人間だ？
「怪我はどうかな？一応、手当てはしたんだけど、今は生憎専門家が不在でね。もし痛みが酷ければ痛み止めがあるから――」
にこにこと。人のよさそうな笑みを浮かべながら、青年が無造作に入ってくる。真雪はその様子を無言で見つめ。
今度は、間違えなかった。

俺にとっての大切な

意識を紡ぐ。意志よりも早く。大気中の塵を呼吸と共に体内に取り入れる。満ちる塵は血流に乗って全身を巡り、流れの中で練成されて神になる。脈動を駆け巡る神は術者の望むがままに姿を変え、元の世界へと立ち戻る……

神威（しんい）三大系統が一、物質操作。体内で練成した神により世界に干渉し、その一部を限定的に自分の理想へと可変する。塵によって引き起こされる、最も基本的な精霊現象。

閃光と爆発。

耳を劈くような爆音は強烈な光と熱波を生み出し、一瞬にしてあたりの気流を掻き乱した。踊る火の粉と光の隙間に、青年の驚愕の顔が浮かびあがる。

その表情を意識の端に収めながら、身体だけは素早く次の行動に移っていた。布団を跳ね除けると同時、そのまま一気に間合いを詰める。火傷を気にする必要はない。もとよりフェイントのために起こした爆発だ。見かけほどの威力はないし、炎熱も長くは続かない。そして何より俺の生み出した炎は決して俺を傷つけない。

一歩の踏み込みで肉薄する距離まで迫ると、襟首を掴んで腕の関節にそっと手を触れる。炎熱に対する生物としての根源的な恐怖は、容易に相手の意識を乱し男は反射的にこちらを振り払おうとした。ただ触れているだけの無害な手。そこには何の力も込めていない。当然、相手の抵抗には逆らえずその動きをなぞるようにして、真雪は触れた腕を軸にくるりと身体を反転させた。ついでに掴んだままの腕を上に向かって捻り上げる。急に派手動いたせいで、反動もまた凄かった。腹の傷からは気絶したくなるほどの激痛が押し寄せてきたが、この際なので豪快に無視する。どうせ気絶も出来ないのだから、我慢するしかないだろう？どちらにせよ――

全ては一瞬で事足りた。

筋の伸びきった姿勢で相手を捕らえている。完全に殺し業が嵌った状態だ。人間としての構造を持つ以上、ここまで決まればもう逃げられない。止めにさらに更に四分の一程腕を捻ってやると、男はその苦痛から逃れようと爪先立ちとなり、限界ギリギリまで身体を伸ばした。はい。これで詰み（チェックメイト）。

不安定な姿勢になったところで軽く足を払うと、既に体制を保つことも出来なかった男は呆気なくバランスを崩した。その勢いに乗せ、今度は自分の足を軸に転がすようにして男の身体を床へと叩きつける。

それでも腕だけは離さずに、レバーのようにぐるりと回してもう一度肩を決め直すと、今度は膝を使ってがっちりとロックした。状況終了。

男は仰向けに寝そべったまま動かなかった。倒れた時に頭を打ったのかも知れないし（一応、そうならないように腕を支えたのだが）そうでないのかもしれない。どちらにせよ関係ない。今では完全な死に体だ。この状態から逃れようとすれば、間接を外すしかない。

本来は後の後から始まる専制防御の技だったが、ここまで綺麗に決まったのは初めてだ。否、防御の技だからこそ、か。身を守るために発案されたその技術には単純な攻撃とは比べ物にならない程、執拗なまでに相手の動きを疎外しようという意志がある。繰り出される一挙一動の中には無駄な動きは何もない。そうして敵を捕らえた。つまりここまでが防御だ。そして、次からは攻撃の時間だ。

それでは開始（ヒア ウィー ゴー）しよう。

仰向けに倒れたまま、ぽかんと呆気にとられた表情を浮かべている男を冷めた目で見下ろすと、真雪は捕らえている側の手のひらを掴み、親指を握るとバイクのグリップをねじるようにぐりっと半回転させた。途端、走る激痛に男の身体が海老反りになる。

「ちょ――いだだだっ！待って待って待って待って！！せ、説明するから！ちょっと一瞬本気で待って！！」

かなり真剣に痛かったのか、男は涙目になって慌てて訴えてきた。

降参の証か、自由な方の腕でばしばしと床をタップしている。なんとなく。

そのあまりの情けなさに面食らい、ついでにもう少しだけ捻りを加えてから腕の拘束は解かないまま真雪は親指だけを離した。最後の捻りがかなり効いたのか青年は暫く床で悶絶していた。

「……なんで待ってって言ってから止め刺すんだよ。、鬼か君は。全く……安心したところで攻撃されるのって結構きついものがあるんだけど。君、優しさが足りないって言われるだろう」

「やかましい」

相手の愚痴には耳を貸さずに一刀両断する。それでも大分楽になったのか、男は（床にダウンしたままの状態で）あからさまにほっとため息をついた。

「いやだから待って。そうかっかしないで。少し落ち着こう。あのさ。君が――混乱する気持ちは分かるよ。目が覚めたばっかで一人ぼっちだったし。あんな怪我して倒れてたくらいだ。なんか事情がある事ぐらい想像がつくよ。多分、私の事を警戒してるんだろ？」

「……」

「でも――誤解されちゃ困るが、君をそんな目にあわせたのは私じゃない。君がそんな酷い怪我を負って、林の中で倒れていたというのは、あくまで君の物語であって私の関与する話じゃない。でも、君を助けたのは私だよ。連れ帰って……治療をしたし休ませた」

「……」

「別に恩に着せるつもりはない――けど、お礼をしてくれても罰は当たらないんじゃないかな……君はそんなに、礼儀知らずには見えないし」

つまりはそれが、男の釈明の言葉だったのだろう。

そして彼は恐らく、その説明で自分が納得すると思ったに違いない。言葉を終え、開放を待つばかりと明らかに安堵した様子でのんびり構えている。それを見下ろし、相手の言を自分の中で反芻し――真雪はただ無言で掴んだ指を捻じ切るように更にぐりんと捻った。

筋の千切れるような痛みに、男の身体が決して大げさではなく大きく仰け反る。
「ちょ――き、君、今私の話を――」
「うるせぇ。勝手に喋るな」
脅すつもりがなかったと言えば嘘になる――が、威嚇よりも先に、自分の声に潜む硬質な響きに気づいたのだろう。男は先程とは違う緊張した態度で大人しく沈黙した。
話の内容に、不自然な所はない。如何にもざっくばらんな説明だったが、そんなものだろう。別に凝った話をする必要もないのだ。放っておけば死ぬ筈だった。その自分を騙して彼に何の得がある？わざわざ手当てまでして？
男の話を疑う理由はない。疑問を抱く事に理由が必要ならの話だが。なのに、なんで。なんで俺は――？
「……あの。なんか、私の話に問題でもあったかな？分からない事があればちゃんと答えるからなんでも質問して欲しい。沈黙はやめよう沈黙は。この状況で黙り込まれるとかえって不安になってくる」
「黙ってろ」
一言の元に切り捨てて、ふと思いたって尋ねる。
「……あれ、そういや雪（ゆき）は？」
「え？」
「アンタが俺を見つけた時――傍に、誰かいなかったか？若い女とか……」
白雪とか。俺の姉とか。
そうだ。あれから――家族は。俺の家族はどうなった？
慎重な面持ちで問いかけると、青年はそこで初めて表情を変えた。腕を折られかけてまで無抵抗だったこの青年が。躊躇うような気遣うような、どこか痛ましげな顔。その表情を見ただけて、答えを聞かずとも理解する。未だ完治せぬ腹の傷が、思い出したように疼き出す。
「……君、連れがいたの？」

「いや……いなかった、んだな？誰も」
「ああ。あの時――君を見つけた時、君は一人で林の中に倒れていた……傍には誰もいなかったよ。君を傷つけた人間も、君を気遣う人も」
「……そうか」
男の言を疑う理由はない。人を疑う事にいちいち理由が必要ならばの話だが。不自然な所はない。如何にもざっくばらんな説明だったが、そんなものだろう。傍に誰もいなかった。つまりそれは――どういうことだ？
あれから何が起こった？家族は一体どうなった？そして――あの、不吉な男。あいつはどこに行ったのか。
分からない。何もかもが分からない。曖昧憮然であやふやで、意味のない焦燥が胸を募らせる。フィルター越しに世界を覗いているような、どこか余所余所しい無力感。
「ねぇ……君、大丈夫？なんか、マズい事を言ってしまったのかな、私は。なんだか――すごく酷い顔色だよ」
実際に、よほど酷い顔色をしていたのだろう。そういう青年こそが、幽霊にでも出会ったような顔だった。普段はたんに目つきが悪いだけの双眸が、更に凶悪に吊り上っているのを感じる。恐らくは、その表情に怯えたのかも知れない。こちらの様子を伺うように見上げてくる男の顔には、怪訝さと僅かに怯えらしき影が浮かんでいた。複数の感情が入り混じった視線が無神経に突き刺さる。鬱陶しい。いつもは何の気にもならない他人の視線が、なぜか酷く癇に障る。
「やっぱりまだ万全とはいかないみたいだね。疑問はいろいろあるだろうが、とりあえず今は一旦休みなさい。お姉さんの事を考えるのは後にして――」
その言葉を耳が認識すると同時。男が喋り終えるより早く、真雪の身体は動いていた。
握り締めた指先に塵を集める。手のひらに生まれた炎熱は悪夢のように増殖し地獄のように燃え滾り刹那のうちに凝縮しながら、大

気を巻き込み火勢をあげる。
神威とは人によって引き起こされる精霊現象である。己の肉体を介して大気中の塵を神へと練成し、それを使って世界の一部を変更する。いわば神を媒介に世界に自分の意志を伝える力だ。神威を使うのに特別な道具や技術は必要ないが、誰もが使えるわけではない。その才は純粋な遺伝要素によってのみ受け継がれる。そしてその能力を持つ者を神威操者――あるいは神使いとも呼ぶ。
神威一式――羅炎（らえん）。
神威を使うには大気の塵を体内に取り込み神へと硝化するというアクションが入るため、準備から発動までにはどうしても若干のタイムラグがある。が、真雪の神威はその常識を打ち破るような精度と速さで展開された。今度はフェイントではない。純粋に攻撃のための力。その速度と威力に男がぎょっとしたように目を見張り、慌てて拘束から逃れようとする。だが遅い。
腹の疵が疼く。その疵が逆にたった一つの心理を脳裏に告げてくる。
信じるな。考えるな。疑問を持つな。死にたくなければ――二度と殺されたくなければ、やられる前にやれ。
多分きっと、
この時の俺は
正気を失ったんだと思う。

俺にとっての大切な（後書き）

一応、毎日の更新を心がけております。
読みにくい点や間違いなどございましたら、ご指摘頂ければ随時対処していく予定です。

躊躇いもなく。容赦なく。勿論優しさなど欠片もなく猛る火炎をまとった拳を男に向かって振り下ろす――と、その寸前で。

何の前触れもなく唐突に。

脳を揺るがすような衝撃を食らい、真雪は真横に吹っ飛んだ。比喩ではなく、冗談抜きに二・三メートル程の距離を文字通りノン・バウンドで飛んで行き壁に激突したところでようやく止まる。が、そこで落ち着く暇はない。

「――……っ！！？」

咄嗟に何が起こったのか。考える暇もないが、身体の反応は理性の復活より迅速だった。吹き飛んだ拍子に拘束の緩んだ（つまりは一緒に攻撃された）男を投げ捨て、全力で防御に回る。正気を失くしかけた頭でさえ、瞬時に理解出来る程の圧倒的な危機。

大気の塵が一瞬で収束する。続く連撃もまた初撃と同じく簡潔で強力だった。知覚できるギリギリの速度で放たれた神威が迫ってくる。何の練成もされていない、殺気も悪意も敵意すらもない、ただの強靭な神の塊。たとえばそれは、子供が雪球を作るような。目の前にあるものを、単に無造作にまとめて固めただけだといわんばかりの大雑把な構成。にも関らず、その一撃が冗談のように重い。完全にはかわし切れず、拳に纏った神威の炎で相殺する。押しつぶされそうになるところを、なんとか必死で堪えきる。覚えがある、この感覚。ヤバい、これは――

（月日と同等か――あるいは、それ以上の神威能力者！？）

つまりこの相手は、現ＷＩＳ会長にして当代最強の神威能力者である祖母と匹敵する実力を持っている事になる。

（冗談じゃねぇ）

そんな者がその辺に気軽に転がっているとは思えない。が、そうとしか思えない。

何かが閃いたわけではない。ただなんとなく直感に従って、真雪はその場で振り向いた。――時には既に間一髪だったらしい。いつの間にそこにいたのか。触れ合う程に近づいていた小さな影が、眼前に迫っている。寸前から繰り出される蹴りを反射神経に助けられてかわし、バックステップで飛びのくように距離を取ると、相手はそれ以上の追撃をしてこなかった。それでも完全にはかわし切れなかったのか。一拍遅れて、髪の一房がはらりと落ちる。目の前を落ちていく自分の黒髪と、その向こうに立つ人影を見て、

「……」

絶句する。

そこにいたのは小さな子供だった。

鮮烈な真紅の着物に、想像以上に小さな矮躯が包まれている。普通の着物ではなく、こちらもまた先ほどの男と同じく奇妙な型の衣装だった。上の丈が短く下には袴を履いている。ぱっと見の印象で一番近いのは巫女さん衣装だったが、あれは白と紅の上下だし少し形も違う。真雪は知らなかったが、それよりもっと似ているものが平安時代に流れ巫女と呼ばれた白拍子の衣装だ。但し、彼女達が聞いていたのが白の水干だったのに対し、目の前の小柄な人物が着ているのは上下共に目の覚めるような真紅の衣だった。なんだろう。局地的な和服ブームなのか？流行に乗り遅れたのか俺？

雪白の肌。濡れたような黒瞳には強い意志の光が浮かび、年相応にきらきらと輝いている。驚くほどに整った、どこか中性的な顔立ち。否、整いすぎたが故にそう映るのだろう。なまじ美しすぎるものは、えてして性別すらも超越してしまうものだ。

着物を着ているため身体のラインがはっきりしないが、どちらにせよこの歳と身長では外見だけではっきり識別できるほど成長していないだろう。服を着ているというより、紅い布に包まれているようだ。そのせいか、どこか七五三じみた印象を受ける。

腰まで届く黒髪はゆったりと自然に流れている。艶やかな長い髪。人間ではない。何か別の生き物だと言われても信じたかもしれない。

一目見ただけでは、年齢はおろか性別さえも区別できない。が、こんな状況にも関らず真雪は思わず一瞬見蕩れてしまった。そのぐらい、とても綺麗な生き物だった。

一目見て誰かに似ている、と思った。だけどそれが誰か分からなかった。

「あ、明様（あかる）……」

部屋の隅に避難していた――にも関らずしっかり巻き添えを食らったらしく、何やらずたぼろの青年が、困惑気味に呻く。が、名前を呼ばれたその子供は気にも留めず無造作に、てくてくとこちらに向かって歩み寄ってきた。嵐でも通り過ぎたかのような室内（自分でやった）の様子を見回し、

「やれやれ……」

と、仕方なさそうに華奢な肩を竦めた。

外見通りの高い声。

改めて近くで見ると、思った以上に小柄だった。身長は真雪の胸ぐらいまでしかない。とはいえ、彼の身長は平均日本人よりも遥かに高いので、そういう意味ではこの綺麗な生き物のほうが普通だろう。ミニモニに入れるかギリギリのところだ。まあ、多分成長期なので、順調に育てば入れない可能性の方が高い。などと場違いに呑気な事を考えていたせいかもしれない。次に起こる出来事に咄嗟に反応出来なかったのは。

「うりゃっ」

唐突に。

正面から腹に前蹴りを食らい真雪はうめき声を上げた。小さな裸足の爪先が、突き刺さるように綺麗に深々と食い込んでいる。

狙い済ましたかのように、ピンポイントで例の傷口の真上にヒットした。

想像を絶するほどのダメージを受けた。

身体を貫通したんじゃねぇかと思う程の痛みに、真雪は思わず身体を折ってかがみこんだ。おかげで子供より身長が小さくなってし

まったが、相手はそんな事は気にしないらしい。どころか、もがくこちらの様子にすら構いもせず、文字通りに上から目線でなにやら尊大に腕を組む。

「まったく――なんだかやけに物騒な気配がするから何かと思って覗いてみれば……何を考えてやがるんだ、いましは。起き掛けにいきなり人の家で暴れるな」

男か女かも分からない、それでも息を飲むほどに美しいその生き物は、蹲るこちらを見下ろしながら不機嫌そうな口調でそう言った。

それが彼らの。

黒田真雪と明と呼ばれる少女との最初の出会い。

そして。

後に始まる真雪の数奇な人生の第一歩だった。

彼の数奇な人生（後書き）

ＰＶ　が徐々に増えており嬉しい限りです。お気に登録してくださった方、ありがとうございます。
感謝の気持ちに本日第二段を投稿しちゃえ！

とりま、現在の目標はＰＶ一日あたり百件越しか、お気に登録十件以上か感想・評価を頂ける事です。

叶ったらお祝いとお礼を込めて、真雪かヒロイン（明）のイラストを挿絵でのせようかと。あるいは、誰かのスピンオフとか。更新回数を増やすとか。ご希望あればリクも受け付けます。皆さまのご希望には柔軟に応えてまいります。一宮です。

これから

落ち着いて話を聞いてみれば。

自分が青年に助けられたのというのは、どうやら本当だったらしい。他出からの帰り道、瀕死の状態で倒れていた真雪を、そのまま連れ帰って治療してくれたそうだ。先ほど聞かされたのと同じ内容だが、冷静に聞けばなるほど、別段不自然なところはない。それに。記憶が曖昧なのではっきりと確信はないが、自分が意識を失いかけた時に助けを求めた『誰か』の声と青年の声はとてもよく似ていた気がした。

「ふぅん……それを聞くとまるで俺がとてつもなく恩知らずで失礼な奴みたいだな」

「いや、実際かなり失礼で恩知らずな奴だと思うけどね君。私もまさか純然たる善意で助けた筈の人間に、問答無用で襲われるとは思いもしなかったよ。拾い犬に手をかまれるとはまさにこの事だ」

「はっはっは！まあ、もう謝ったんだからいつまでも小せぇ事を気にするな。笑って許しとけよ。大人だろ」

「年齢で言えば君だってもう充分に大人だろう……」

そこはかとなく理不尽そうな面持ちで真雪に胡乱な眼差しを向けてくる。

青年は伊々美（いいみ）と名乗った。

年齢、二十二歳。初対面の時に年上だと思った印象は間違いでなかったらしい。年の割りに落ち着いた雰囲気のあるせいか、一見すると大人っぽく見えるが一度話してみると相応な闊達さが伺えた。

「伊々美？変な名前だなー。なんか呼びにくいし」

「……仮にも、年上でほぞ初対面の命の恩人に対して、びっくりするぐらい正直すぎる感想だな。君には年長者と恩人に対する敬意というものがないのか？つくづくもって失礼な子だな」

「あるぞ。一応。まあ、それはそれとして名前が変なのは事実だろ」

ばっさりと告げると、伊々美はそこで黙り込んだ。言っても無駄だと思ったのかもしれないし、あるいは結構本気で気にしていたのかもしれない。

既にお互い簡単な自己紹介は終えている。こちらが年齢を名乗ったときだけ、伊々美は驚いたように目を見張った。

「十八歳？本当に？とてもそうは見えないけどな」

「そうか？だったらいくつくらいに見えるんだ？」

「改めてそう言われると、それはそれで返答に困るんだけど……そうだな、明様と同じぐらいだと思ってたよ」

「いや、それにしちゃ俺身長がデカすぎるだろ」

この歳になって中学生に間違えられるとは心外だ。自分は決して年少に見られるタイプではないのだが――

「いや、身長云々というよりむしろ……まぁいいや。ところでその後、体調はどうだい真雪」

「ああ、おかげさまでそこそこだ」

実際、腹の疵はまだ完治こそせぬものの痛みもほとんど癒えている。回復は時間の問題だろう。

「うん。君は元々、瀕死の状態だった時も無意識に自分で神治療をしていたからね。普通に比べて回復は早いよ。この分だと後遺症も残らないんじゃないかな」

傷の具合を確かめながら、てきぱきと包帯を取り替える。傷口からはもう新たに血が滲む事もなく、傷口自体も塞がりかけていた。

「とはいえ、まだ完全に治ってはいないんだから無理は厳禁だよ。今しばらくここで大人しくしていないさい。話を聞くのは、それからだ」

「至れり尽せりで申し訳ないが……話つっても俺にはもうこれ以上喋れる事なんて何もないぞ」

「真偽を問うのは残念ながら私ではないのでね。とはいえ、まだ先の話だ。あ、それと君の服。返しておくよ」

言いながら、伊々美が差し出してきたのは、綺麗に折りたたまれ

た学ラン一式だった。ここに来るときに自分が身に着けていた衣服。
広げて確認して見ると、制服には一滴の血の染み（と牛乳の染み）さえ見当たらなかった。ちょうど、今の自分の傷口の上に当たる、刺された筈の箇所にも破れた痕は無い。丁寧に繕ってあった。しかも繕うといってもただ縫い合わせただけではない。破れた付近の糸を解いて生地の網目に沿ってきちんと糸を通してある。所謂かけはぎという技術だ。現代では家庭科の授業ですら習わない。服の修理に出せばやって貰えるが手間がかかるので結構な金もかかる。それをこんなにあっさりとやってくれるとは、
「……ロスト・テクノロジーだなぁ」
「え？何か言った？」
新品同様になった制服の状態を試す眇めつしながら感嘆の声を漏らすと、聞きつけた伊々美が怪訝そうな声を上げた。真雪は誤魔化すように「なんでもねえよ」と首を振り、まるでクリーニング後のように綺麗になった制服をもう一度見た。
「ありがとう。洗うだけじゃなくて破れた所も直してくれたんだな。俺、裁縫とか一切出来ないから助かった」
「どういたしまして……それにしても変わった服だね。見たこともない意匠だ。真雪はよほど遠くから来たんだね」
「まあ、遠くっつっちゃ確かに遠くではあるんだが……」
そのあたりの事は適当に言葉を濁しつつ、視線をそらす。が、伊々美は特に気にした様子もなかった。
「まあ、変わってはいるけど、実際動きやすそうな服だよね。真雪は背が高いから普通の着物じゃ丈が足らないだろうしな」
百八十センチを超える真雪の身長は、現代高校生としてもかなり大きいほうに入るが、ここではずば抜けて長身の部類に入る。成人男子という点では伊々美の身長も決して低くは無い。むしろ、周囲と比べればはっきりと長身に属するはずだが、それでも彼の身長は真雪よりも十センチ程低かった。
「それから、これも君の物だろう。忘れないうちに一緒に渡してお

くよ」

言って、伊々美がにっこりと笑顔で差し出してきたのは、思い出したくもない一品だった。彼に致命傷を負わせた刃。薄めの刀身には武器というよりも芸術的な美しさがある。

自分でもはっきりと分かる程度には顔を引きつらせ、一旦迷ってからも真雪は結局その刃を受け取った。当たり前だが、あの時についた血は綺麗に拭われている。

「……いや、確かに俺が持ってきたものには違いないんだろうけど。普通、これを俺の持ち物だって思うかぁ？」

「うん？でも君の腹に刺さっていたんだから君の物で間違いないだろう？」

凶器を私物扱いしないでくれ。

何一つ疑問などないように。きょとんとする伊々美に真雪は仕方なく、やけくそじみた苦笑いを浮かべてそして――

「――さぁて。これからどーすっか」

これから（後書き）

あれ？なんか昨日の時点ですでにＰＶ百件越えてました。ありがとうございます！

てなわけで、宣言通り真雪のイラストを挿絵でのせますね。て、も挿絵入れたことないんで、やり方いまいち分かりませんが。第二章の一ぐらいに入れたいと思ってます。

ていうかみてみん様には載せたのですが、それを挿絵として小説に貼る方法がいまいちよく分かりません。誰か助けて。なぜ？

現は夢

回想シーンを振り返り、屋敷の庭で風に当たっていた真雪はぽつりと独りごちた。なんとなく手持ち無沙汰になり、伊々美から渡された刃を手の中で持弄ぶ。

自分の腹部を貫き根元まで血塗れた刃にも、今では曇り一つすらない。磨きぬかれた刀身は新品同様に冴え冴えと輝いており、美しくすらあるがそれでも人を傷つける凶器には違いない。その刃を指先でなぞるように撫でて、ぱちん……と鞘に戻した。元々は鞘など無かった筈だが（鞘の代わりを果たしていたのが自分の身体だったわけで、それは間違いない）作ってくれたらしい。つくづく至れり尽くせりだ。柄にあわせて作られた白木造りの鞘からは新しい木の匂いがした。

そういえば……、と思う。

そういえば、白木作りの刃子なんてあの男も随分な古典趣味だな。現代では、こういった和刃よりも西洋ナイフのほうがずっと安価で簡単に手に入る。別に切れ味でもさほど劣るわけではない。

なにか拘りでもあんのか、これ？

当てもない疑問には当然答えなど帰ってこない。そもそも、一体どこからその答えが返ってくるというのだろう。本人に聞けるならばまだしも——こんな違う場所で。

真雪はうんざりと溜息をつくと、頭と一緒に思考を振り払った。持っていた刀を帯に差し込む。

彼が着ていたのは馴染みの制服ではなく、着付けて貰った着物だった。慣れない和服は動き難くはあるものの、それでも今はまだなんとなく学ランを着る気になれなかった。上掛けを羽織ってはいるが桜の花咲く今の季節、夜風が若干肌寒い。

永延三年　四月。

時遡ること遥か千年の昔、一条天皇の納める御世。古の京の都—

―平安京。

目が覚めた後で。現在の場所と時間を尋ねる真雪に、伊々美は事も無げにそう答えた。

「マジかよこの状況……」

うんざりとぼやく声にもさすがに力がない。

なぜここにいるんだろう？

なぜ京都なんだろう？

そしてなぜ千年も前なんだろう？

「千年前じゃなぁ……さすがに知り合いなんて誰も生きちゃいないだろうしなぁ……」

せめて百年くらい前だったら、月日あたりが生まれてたかもしれないのに。

ちょっとした現実逃避にそんな妄想に逃げる。実の孫にすら実年齢を明かそうとしない祖母ではあるが（以前、さりげなく調べようとしたら本気で半殺しにされた。以来、生命の危険があるのでその話題には触れないようにしている）噂では幕末あたりからは既に生きていたらしい。そんな祖母なら頑張れば平安時代からもうっかり生きていそうな気がするが――いや、やっぱり無理だ。というか、そこは一応まだ存在しないでおいて欲しい。なんというか、最低限人として。

「……つーか、なんでいきなり平安時代なんだよ。本気で意味分かんねーし」

一体、どこで何をいくつくらい間違ってこんな目にあっているのか？

学校帰りに幼馴染に飯奢って、家に帰ってきたら謎の泥棒にいきなり腹刺されて、それで死にかけてたらそのまま意識失って、目が覚めたら狩衣でコスプレした変なにーやんがいて、そいつをぶっ飛ばそうと思ったら逆に近くにいた人形少女に返り討ちに合わされて、しかもなぜか平安時代の京都にいた。

改めて状況を振り返り、その脈絡のなさにげんなりする。何の罰

ゲームだこれは。
いやまぁ確かに自分は、高校を卒業したら独り立ちして家を出る覚悟は決めてたけど。決めてたけど決めてたけど、だからといってさすがに現代社会からも独り立ちする覚悟までは決めていない。
一体なんの因果でこんな目にあっているのか。獅子は我が子を千尋の谷から突き落とすというが、自分のようなゆとり世代にそんなスパルタ教育は過激すぎやしませんか？若者への試練にしちゃ、ちょっとやりすぎなんじゃないですか神様？
汝が小説だったらならば私は読むのをやめている、と言ったのが確かゲーテだったか。それに倣って言うと、仮に自分の運命に作者がいるなら、そいつに小説家の才能はなさそうだった。
この状況が運命の用意した試練だというのなら、それこそ運命を呪うぐらいの方法しか思いつかない。
とはいえ、自分でも奇妙なほど冷静に真雪はこの状況を受け入れていた。否――違う、決して受け入れているわけではない。が、こんな意味不明な状況にも関らず、彼はなぜかこの場所が過去の世界であるという事実にだけは、些かの疑念も抱いていなかった。どんなに突拍子のない事態であれ、ここが自分のいた場所とは違うところだということだけは、はっきりと確信出来ていた。――なぜか。
らしくもなく重い溜息をつき、吐いた分だけの息を吸う。甘く濃い空気がゆっくりと肺を満たしていく。息を吸うたび、一呼吸ごとに隅々まで活力が行き渡る。彼のいた現代では考えられない程に大気が塵に満ちている。ふるい古い――太古の空気。
それだけで疑いようもない。少なくともここが、今までの世界とはまったく異なる場所だということを。
「一条天皇っつーと……どのあたりだっけ？後白河？はもっと後か。あのあたりって天皇がころっころ変わってたからなぁ」
ぶちぶちとぼやきながら、脳内ＣＰＵの使用率を百％まで上げて、どうにか歴史の授業内容を再生させようとする。頑張れ俺の記憶力。
永延三年――西暦九八八年。現代から時遡る事約千年。一条天皇

の即位する平安中期。
幼くして即位した一条天皇の外戚として藤原道長が政治を支配した、世に言う摂関政治の政策が取られていたのがこの時代である。
平安中期では平安時代の中でも特にその文化が花開いた時代とされ、後世に伝わる芸術家や文人などの数多くがこの時代に生まれている。土佐日記――紀貫之、清少納言――枕草子。紫式部――源氏物語、など。
また藤原氏の摂関政治に代表されるように、貴族勢が栄華を誇った時代でもあり、以降これを過ぎると武家が対等し始め、鎌倉幕府の幕開けとなる――
「と、確かこんな感じだったか」
よく覚えていないけど。
脳内から引き出された情報量の意外な多さに満足する。
歴史の授業選択を日本史にしてよかった。
生まれて初めてそう思った瞬間だった。
とりあえず現状把握が出来たのはよいとして――
「結局のところ、なぜ俺はここにいるんだろう?」
基本原点に立ち返る。
現状に納得が出来たところで、他の疑問までもが消えるわけでない。もしも仮にここが真実、千年前の世界だというのなら――
どうして俺はここにいる?
どんなに脳内をググってみても、その謎を解く鍵だけは思いつきそうになかった。
鍵。キーワード。ロゼッタ・ストーン。
例えばこれが白雪だったなら。
もしも今この場にいるのが自分ではなく、全知の異能を持つあの不愉快な姉であったならば。恐らく彼女にとっては、この程度の状況などそもそも疑問にすらならないだろう。真実の意味でどうとでもするだろう。彼女はこんな事で悩むようなレベルの低いステージにはいない。過去も未来も現在も普く全てを識る彼女の前では、あ

らゆる疑問がその意味を失くす。悩む事さえも出来ない絶対的な才能。

でも自分には無理だ。

現実の自分は、あの日家で刺されたまま植物状態となっており、今のこの状況が全て眠っている自分の夢なのだと聞かされても、存外あっさり信じてしまうかもしれない。

果たして俺は。

蝶の見る夢を見ているのか、蝶の夢を見ているのか。夢の世界にいる者に、現実と夢の区別などつくはずが無い。

世界そのものが入れ替わってしまったならば、現実との差異など見出せる筈がない。

現は夢。夜の夢こそ真なり――

「……子供騙しじゃねぇんだっつの」

夢も現も変わりない。世界の中心を自分に据えれば、どこであろうと揺らぐ事はない。

「つーか、これがマジに夢じゃないとしたら、俺は今頃あっちで行方不明扱いか？家族が失踪届けとか出してればだけど」

そう呟き、家族の顔を順番に思い浮かべてみる。姉。祖母。父。俺の家族達。

とりあえず一年くらいは失踪届けを出される可能性もなさそうだという結論に達し、真雪はちらりと右手に視線を向けた。ごつごつと筋張った指には、古風な指輪が嵌められている。

「でもま、この指輪もさっさと深夜に返してやらにゃいかんし。引越しの準備もあるしな。雪がいねーんだったら俺一人でなんとかするしかねぇか」

諦観でもなく気負うでもなく。

ごく当たり前のようにそう言うと、彼は大きく伸びをして藍に染まった夜空を見上げた。

汚染物質の欠片もない澄み切った空には、眩いばかりの星屑がきらぎらしく輝いていた。

現は夢（後書き）

活動報告にも書きましたが、真雪イラストを第二章の『ある少年の日常』アップしました（出来た）

某友人のイラストレーター、Ｓｉｎｏ　に描いて貰った美麗な一品です。ちゃんと本人から直で貰ったもんで、決して無断でパクって来たわけじゃありませんのであしからず。

他にもあるんで、また記念の時にちょいちょい公開していきたいと思います（お気に入り登録５０件！とか。いや、目標ですよ目標）。

と、明日あたりまた題名変えるかもです。安定しなくてすいません。ご不便をおかけして恐縮ですが、続きを読んで頂ける場合、作者名で検索していただいた方が確実だと思います。

宜しくお願いします。

塵

寝ても見ゆ　寝でも見えけり　おほかたは

塵。

塵とは何か。

その命題について、正確に解き明かすことの出来る人物は未だ存在しない。生まれた時から塵と共にあり、その知識に関して人類とはかけ離れた歴史の蓄積を持つ異端児にとってさえ、まだ謎とされる部分が多いらしい。とはいえ、一説によると異端児達は既にその解明を終えていて、単にその結果を出し渋っているだけだ、という説もあるが。そのあたりは定かではない。

ただ一つ言える事は、塵は遥か古くからこの世界に存在していた、ということだ。それこそ、誰もその存在について疑問を思わないくらい昔から。

例えばそれは、空気のように水のように大地のように光のように。この世界にあって当然のものなのだ。塵という物質は。

それは原子より尚極小の単位で空気中に存在し、その総体に対し全体含有量は約3％。常温常気圧下ではその性質が変貌することはなく、比較的安定した物質である。稀にごく高密度の塵が発生する場において、塵そのものが硝化し結晶となる事がある。これを精霊石と呼ぶ。

塵をエネルギーとして転化する際には必ず精霊石を使う。塵は現代社会にとってもはや欠かす事の出来ない存在だが、反面デメリットも併せ持つ。それが『精霊現象』だ。

高密度の塵、あるいは凝った塵がなんからかの形で周囲や環境に影響を及ぼす事を俗に『精霊現象』と呼ぶ。これに対し無機物・有

機物を問わず、塵に接触した結果本体が蝕まれる事を『精霊化』と呼ぶ。

現在（無論これは現代社会においての現在だが）エネルギー源として人類が使用出来る塵は大よそ全体の１％にも満たない。塵を使用するには濾過作業による純化が必要となるが、この設備の製作が追いつかないためだ。ところが、世の中には純化をせずに塵を直接体内に取り込んで操れる人種がいる。彼らを総じて異端児と呼ぶ。

生まれつき塵に対する強い耐性を持ち、のみならずその塵を自分の自由に使える存在。古くは霊能者・神・陰陽師・魔法使いなど、時代や国と共に名を変え、立場を変え敬い蔑まれてきた彼らだが、近年になり塵が解明されその名称も異端児と統一される事になった。

異端児の能力は大きく分けて三種類に分別される。現象操作・精神支配・運命干渉、の三つだ。

異端児が何故その身をもって塵を操れるのか、その謎は未だ解明されていない。彼らは人類ではない新たな種族だという生物学者もいる。ただ一つ言える事は、異端児は純粋に遺伝要素によってのみ受け継がれ、その血が古ければ古い程に強力な力を得る、という事だ。

◆　◆　◆

じんわりと汗が滲んでいる。

適度に使用された筋肉は熱を放ち、廻る血の鼓動が若干早まっているのを感じる。風は少し冷たいが火照った肌に気持ちいい。地面が土だからか、それとも近年の温暖化現象は自分の想像以上に地表温度を上昇させていたのか。同じ季節にも関らず、この時代の春は現代と比べてやや肌寒い。この環境下にロクな防寒具もない状態で冬を過ごすのかと思うと、素直にぞっとする。

なんとか冬までには帰ろう。真雪は胸中で密かに決意を新たにした。どちらにしろ、これだけ汗をかけば気化熱ですぐに冷めるだろ

う。

一通りの型を終えて残心の姿勢を解くと、真雪はゆっくりと息を吐いた。滴る程ではないが、それでも全身に汗をかいている。やはり大分身体が鈍っていたらしい。汗に体温を奪われる前に、乾いた布で身体を拭くと近くにおいてあったシャツを羽織った。

あれから三日後。

塵治療のおかげか若さの力かは不明だが、真雪の疵は既に完治していた（人間じゃねえ）傷口こそは残ったが、内蔵などにも影響はなく後遺症も残らないらしい。

現状把握と鈍った身体のリハビリのために外出を申し出ると、伊々美はあっさり承諾した。そもそも、別に監禁しているわけでもないので許可は必要ないだろう、というのが彼の意見だった。言われてみれば尤もだ。

「ただ、出来ればこの陰陽寮からはなるべく出ないで欲しいな。まあ、君がどうしても外に行きたいっていうなら、こちらにも止める権利はないんだけど。最近は何と物騒だからね」

「物騒？なんかあったのか？」

「精霊現象が頻発しているんだよ。その被害が広まっているせいで、今は神威能力者に対する批判が強いんだ。どこで暴動に出くわすか分からないから、今は他出は控えた方がいい」

「りょーかい」

元より、地図も観光ガイドも無い状態で地の利も文化も分からない場所を一人でうろつくほど、冒険心に富んでいるわけではない。散歩程度なら敷地内を歩くだけでも充分だ。真雪は伊々美に礼を言ってその場を後にした。

陰陽寮。

この国でもっとも古く巨大な異端児組織である。天武天皇時代に創設され、祭事や呪い等を専門に扱う公的機関であり、天候による災害や飢饉・塵災害や精霊被害など人の手ではどうしようも出来ない事態が発生した時は、彼らが対処にあたっていた。塵被害はとも

かく、天候やら伝染病やらは異端児であれきっぱりとどうにもならないとは思うのだが、塵の原理も解明されていない時代ではそんなものだろう。異端児にとってはいい迷惑だったに違いない。

やがて明治時代になってその名称と組織そのものは解体され、その後はＷＩＳの一部として吸収・合併されたが、現在でもその名残は残っている（現代でＷＩＳの日本本部が京都にあるのはそのためだ）

「……だったかな、確か」

この辺の知識は歴史の授業というより五月に受ける試験対策だ。ＷＩＳの歴史と成り立ちについて。とはいえ――

「まさか当時の本物見れるとは思わなかったよなぁ……さすがに」

現在、真雪が暮らしているこの建物も現代では歴史資料館として残っているが、あちこち修復されたりなんだりで当時の面影を残しているのは外観だけだ。大分印象が違う。

建物全体はかなり広い。自分の家も大概だと思うが、ここは更にそれ以上だった。当時の陰陽寮は純粋な異端児のみの組織で、同時に彼らの詰め所も兼ねていた為に常時百人以上の人間が生活している。基本的に平面構造なので敷地面積は半端なかった。この中だけでまるで一つの町のように完結している。まるで一つの世界のように完成された、閉ざされた世界。

庭園にはとりどりの野草や草花が植えられており、その間を擦り抜けるように清流が流れ池に繋がっている。濁りのない水は水底すら覗けそうなほどに澄んでいた。

「精霊現象ってことは、どっかに精霊石でもあんのかもな。それが影響を与えて塵災害が広まってる、とか。ま、どっちにしろ俺にゃ関係ねーけど」

気の無い調子でぼやく。そう。別に関係ない。

衣食住の面倒を見て貰っている以上、完全に無関係とはいえないが（彼はそこまで不義理な人間ではなかった）この世界この時代にとって所詮、自分はただの迷い人に過ぎないのだ。

感謝はしている。恩も感じる。ただそれでも、あまり深く関るべきではないのだろう。

異邦人の少年は見慣れぬ世界を彷徨いながら、そんな事を考えた。

勿論、行くあてなんかなかった。

痛い娘

「……お？」

散歩を始めてから大よそ三十分ほど過ぎた頃（ここに来た時の数少ない所有物だったシチズン製腕時計による計測。因みに太陽電池式。ビバ文明）真雪は進行方向に見覚えのある赤い人影を見つけ、思わず足を止めた。

「んんー？」

目測、約三百メートル程。その距離ですらはっきり分かる、狂ったように鮮烈な真紅の衣。

そもそも現在からの迷い人である真雪にとって、この時代での知り合いなんてそれこそ数えるくらいしかいないのだが。その数名の中でも、あんなまっかっかな服を恥ずかしげもなく着ている人物なんて、一人しか心当たりがない。

「確かあいつ、明――とかいったっけ？」

伊々美が呼んでいた名を思い出す。

因みに視力は二・0。

見間違いではないだろう。

一瞬、このまま踵を返して戻ろうかと思ったりもしたが（もともとが気晴らし程度の散歩なので特に目的も決まっていない）コンマ3秒程考えて、そのまま歩みを進める。ここで方向転換するのもなんだか逃げ出すようで癪だ。

まあ、相手もまだ子供だし。

無視するというのも大人げないだろう。

挨拶は人間関係の基本だ。

そんな事を考えながら、進む方向は変えずに真っ直ぐ歩いていく。さほど親しい仲でもないのであまり距離が近くても警戒されるだけだろう（とはいえ前回被害を受けたのは間違いなくこちらなのだが）あの年頃の少女は繊細だと聞く。地面に座り込んでなにやらぼーっ

としている赤い姿に近づいたところで、一歩分の距離を置き努めて明るく声をかけた。
「よぉ。何やってんだお前」
少女――明はゆっくりと振り向いた。歳のわりに妙な貫禄のある瞳がこちらを捉え、温度のない声で平坦に答える。
「蟻を殺してた」
「……」
気軽な挨拶に対して、予想外に痛い返事が返ってきた。
「……えーっと。楽しいのか？それ」
なんと答えていいものか分からず、思いついた一言を告げる。対して相手はどうという事もなく細い肩を竦め、
「別に。蟻の行列見つけて潰してたんだけど全然減らなくって。いつまで経っても途切れないからなんとなく続けてただけ。でも段々飽きてきたな。巣穴に湯でも流しこむか」
「なぜそこまでして止めを刺そうとする!?蟻にどんな恨みがあるんだお前」
「馬鹿だなぁいまし。蟻に恨みなぞあるわけないだろう。こんなのただの暇つぶしだよ。退屈だったんだ」
「お前は暇になると昆虫虐殺に走るのか？」
もう少しマシは趣味を見つけろ。
一応年長者として心の底から適切なアドバイスをしてやるが、明は特に気にした様子もなく立ち上がると、うんっと窮屈そうに伸びをした。近くで見ても、やはり随分と小柄だ。同世代の子供と比べても小さい方に入るだろう。とても出会い頭に人に蹴りをかますような人物には見えない。
だがこうして改めて見てみると、やはり明は驚くほどに麗しかった。
漆黒の大きな瞳は印象的に煌めき、長い睫は綺麗にそりかえって目元を華やかに縁どっている。こぶりだが高い鼻と、一本の無駄もない秀麗な眉。白い肌は練絹のようにすべらかで、形よい唇は赤く

熟れた果実を思わせる。

背中に垂らした長い髪は黒々とした艶を放ち、一房を組紐で結んでいる。

性別すらも超越した完璧なる美。触れたいと願うには、彼女の造作はあまりに整いすぎている。

タイプはだいぶ異なるが、彼女を見て真雪はなぜか姉を連想した。白雪や月日に匹敵する美貌の持ち主を見るのは真雪にとっても初めてだった。あまりに整いすぎていて、同じ生き物だとは到底思えない。美人には耐性のあると思っていた自分でさえ、うっかりすると見惚れてしまいそうになる。

――彼女が、生来そのままの美しさを誇る、普通の状態であれば。

痛い娘（後書き）

サブタイトル、最初は明媛だったはずなんだが、読み返したら変わってた。はて。。。？

違い（誓い）

改めて、少女の顔を観察する。少なくとも、顔面のあちこちにその美貌を覆い隠してしまうような白いあて布がされており、そこにわずかに滲む血の跡が見えるとなれば、見惚れるどころの話ではない。

こちらの視線に気づいたのか、明は少し顔をしかめた。あまり不躾に見すぎたらしい。あるいは、少女の顔でなく怪我を見ていた事が気に障ったのかもしれない。一瞬、謝ろうかとも思ったが、

「なに人の顔じろじろ見てるんだ。私が思わず見惚れるほど絶世の麗しさなのは知ってるが、いましごときが馴れ馴れしく見ていいものじゃないぞ。ちょっとは弁えろ」

かなり派手に勘違いをしていたので、謝るのはやめにした。

これだけ綺麗な容姿をしていれば、多少の自信過剰は仕方ないかもしれないが、それにしても自分の外見を謙遜する美人と自慢しちゃう美人ってまたえらく印象が違うんだな。

嘘でもいいから「普通の子」ぐらい言っておけよ。

つーか、いましってなんだ？

会話の流れ的にいけば二人称の代名詞っぽい感じがする。でも伊々美は『君』という言葉を使っていたし。ひょっして古語とかか？

とはいえあえて聞く気にはならず、さして深く考えもせずに真雪はあっさりと疑問を放棄した。彼は古典の授業にはあまり勤勉ではなかった。とはいえ、呼び名は訂正しておこうと思い、改めて名乗る。

「いましじゃねーよ。俺の名前は真雪だ。黒野真雪」

「真雪？ああ、確か陰陽博士の一人がそんな名前の奴を拾ってきたって聞いたな……あれ、いましか」

「つーか、普通に呼び捨てかよ……言っとくけど俺、お前より年上だぜ？敬語を使えとは言わないけど、せめてさん付けくらいしろよ」

「はあ？」
きょとんと驚愕の――恐らくは心底と思しき驚きの色を浮かべ、明が見下すような軽蔑の眼差しを向けてくる。いや、美少女がそんな顔をするな。
「どうしてこの、有史以来最高にして最高にして最高の天才と崇められ称えられる私が、たかだが先に生まれた程度の理由で、いましごときの凡俗にわざわざ敬意を示さねばならないんだ？いましが私を尊敬するならともかく」
「……いやなんか結構失礼な事言われてるけど、とりあえずごめん俺が悪かった。いいよ別に呼び捨てで。何もそこまでしてさん付けして欲しいわけじゃねーし」
考えてみれば自分だってそもそも、伊々美のことを呼び捨てにしている。今更、他人にだけ敬称を押し付けるというのも妙な話だ。
「まあ、それはそれとして。お前その――」
「お前って誰だ？」
「……なんて呼べば満足だ？」
「他の者からは明媛と呼ばれているな」
「んじゃ明で」
媛は大胆に省略した。意外なことに少女はそれについては咎めなかった。
「――で、話を戻すと明どうしたんだよ、その怪我」
「ん？ああ、これか」
言われて初めて気づいたように、明は自分の頬に触れた。だが触っても肌の感触はないだろう。彼女の小作りの顔をなかば半分以上覆うように頬にも布があてられている。
「別に大したことない。ちょっと怪我したんだ」
「だからどういう理由で怪我をしたのかって聞いてんだよ」
顔面の傷が一番目立っていたのでうっかり無逃しそうになったが、よく見ればその細い手足や身体のあちこちに傷らしき跡がある。決して過去の怪我ではなく、つい最近のものだ。

虐待……？

まさかとは思うが、うっすらとそんな考えが脳裏をよぎる。例えどの角度からどう控えめに見たところで明は『か弱い被害者』のポディションに収まる人間には見えない。そも、この時代に果たしてネグレクトなんて文化があるのかは不明だが、可能性だけで放棄するには彼女の怪我はあまりにも酷かった。

が、本人にとっては大した事でもないらしい。例によってあっさりとした口調で「狩りに行ったんだよ」と答えた。

「狩り？」

「うん。精霊現象の。最近、なんだが塵が活発になってるらしくてな。そこで鎮禍（ちんか）に行って少し失敗した」

「失敗って……」

隠す程の事でもないと。事も無げに言う明の様子に絶句する。聞かされた内容にではない。だが彼女はきっと、それを本心で言っている。それが理解出来たからこそ、真雪は言葉を失った。

その幼さで、命を懸けて傷つく事を当然として受け止める、当たり前の事として受け入れる精神。

それは一体、どれほどの強さなのだ？

「どうした？突然黙りこくって」

「……いや。ここでは明みたいな子供でも鎮禍に加わるのか？お前以外にもちゃんと大人だっているだろ。そいつらに任せればいいじゃねえか」

暴走する意志――精霊現象を沈めるには神威能力者が対処にあたるしかない。だが、神威を使える者は限られているし、ましてや彼女ほどの強大な能力者は、陰陽寮とてそうそうはいないだろう。だけどそれでも。

こんな子供が。綺麗な顔に傷作って体中怪我だらけになって、命までかけなくてもいいんじゃないか？

「なんでだ？」

恐らく彼女からすれば甘い思考であろう自分の言葉に対して。

明が答えたのは軽蔑でも嘲りでもなく単純な疑問だった。
「年齢なんて関係ないだろう。私は陰陽師だぞ。塵を鎮めるのが役目だ。それ以外になすべき事なんてない」
異端児が生きる存在理由。塵に抗える唯一無二の存在。
「失敗は別に恥じゃないし、生きていれば怪我なんて治る。民草が弱いのは罪じゃないだろう。戦えないほど弱い者達を守ってやるために私のような強者がいるんだ。私のほどの実力者が出来ない事を他の誰が出来るというんだ？」
「……それを本気で言ってるとしたら、確かにお前は強いんだろうよ」
根拠なき自信に満ち溢れた明の様子に、困惑を隠しきれずにぼやく。これが若さなのかそれとも単に幼さなのかは知らないが。
慈善であれ偽善であれ、自分を信じ切っている彼女は確かに強いのだろう。
理由なき正義ほど確固たるものはない。
「別に理由がないってわけじゃないよ。――そうだな。なんで戦うのかと言われれば確かに私が強いからだけど、なんの為に戦うのかと聞かれたら、それは自分の為だしな」
「自分の為？」
「ああ。父上の力になれる自分であるため、だ。身寄りのない私を引き取って、名を与え理由を与え生きる場所を与えてくれた。その父上の役に立つためならば、命の一つや二つ、そもそも惜しくもない」
彼女はごく自然にそう言った。
「父上のためにこの身体が傷つく事を恐れる理由も躊躇う必要も全くない」
それは当たり前のような気軽さで吐き出されたのに、信じられないくらい重い覚悟の言葉だった。
誇張でもなく誇大でもなく。まるで当然の事のように決死の覚悟を口にする彼女は、気高く美しく実に堂々として格好いい。そんな

少女の姿に惚れ惚れと感嘆する。
こんなにも輝かしい生き物だっただろうか？この年代の子供というのは。
俺は。深夜は。白雪は。
果たしてこの歳の頃はどうだっただろうか……？

一号さん

少女の気高い宣言に対し、真雪の口から出た感想はごく素直な一言だけだった。
「お前、えらいな」
「は？なに急に」
「いや、気にすんな。ただの正直な感想」
これがジェネレーションギャップというものだろうか。価値観の違いに圧倒的な格の差を見せ付けられた気分になって、真雪は心からそう呟いた。そのままなんとなく、感心の意を込めてぽんぽんと頭を撫でてやる。明は突然伸びてきた手に、きょとんと驚きの色を浮かべた。だが振り払いもせず、戸惑ったように対処に困っているようだった。
なんか妹が出来た気分になった。
「でもこいつ、妹系にしちゃ攻撃力が若干高すぎる気がするよな……」
「いきなり何寝言ほざいてるんだ？いまし」
うろんな眼差しを向けてくる美少女に、一つ思いついた事を忠告してやる。
「お前さ、人任せにしないのは立派だけど、だからといってそれが怪我を放置する言い訳になるかと思ったら大間違いだぞ。ここには治癒系能力者もいるみたいだし、とっとと治して貰ってこいよ」
暫く留守にしていたとの事だったが、先日になってその担当者が帰ってきたらしい。かくいう真雪の怪我も、帰還早々にその人物に治して貰ったので、今ではこうして無事に散歩にも出歩ける。腕は確かなようだ。
が、対して明は迷わずきっぱりと首を振った。
「嫌だ。私はあいつ嫌いだし」
「……なんでだよ。俺も前に治療してもらったけど、結構頼りにな

る感じだったぜ。同じ同僚だろ仲良くしろよ」
「……あいつが頼りになるとか、絶対あり得ないだろ」
「ん？何か言ったか？」
ぼそりと呟く明の声に聞き返すが、彼女は面倒くさそうなしぐさで、話題をそらすように手を振った。
「いいや。――とにかく、私とあいつは相性が悪いんだ！前世で何か因縁でもあったとしか思えないぐらいにな」
前世が登場しましたか。
「そんなわけだから、用事でもない限り奴には絶対に会いたいとは思わないな」
「いや、あるだろ用事。治して貰え」
「用事があったとしても会いたいとは思わない。別にいいだろ。怪我してる本人が構わないって言ってるんだから。見かけほど痛みは酷くないし、今は神威の使いすぎで力が出ないけど、回復したらこの程度の怪我なんて自分で治せる」
「ガキみたいな駄々こねんな。つーか、本人良くても見てて痛々しいんだよ、お前のその怪我。せっかくご自慢の麗しさとやらが台無しだろうが。そんな状態でほっといたら、周りの人間にも心配かけるぞ。いるだろう。お前にだって心配してくれる友達とか」
「いないよ」
「いないのかよ」
きっぱりと。コンマ一秒の間さえもあけず明が断言する。
まあ、なぁ……
あまり人の事を言えた義理でもないが、この性格と顔では確かに人付き合いは苦手そうではある。
友人どころか知人と呼べる程度の知り合いすら少ないに違いない。
無意味に心が痛む話だった。
やれやれ。
仕方なさげに溜息一つ漏らし、真雪は明の手首を掴んだ。彼女が一瞬、驚いた表情を浮かべるが――無視して意識を集中する。薄く

肉のついたその手首は驚くほど細く、少し力を込めただけでも折れてしまいそうなほど儚かった。

僅かに触れる手の先に熱が生まれる。人肌よりも熱く小さなその熱は、仄かな燐光を発しながら彼女へと移り、鼓動とともに強まって血潮と一緒に徐々に広がる。

少女の華奢な肢体が燐光に包まれ――刹那の間に弾けて消える。

「……お？」

そして光の消えた後には、明の身体から大小無数にあった傷跡が、嘘のように消えていた。

塵の物質操作による人体活性術。治癒術の基本だ。

「治してくれたのか？」

「表面の傷塞いだだけ。それでも一応破傷風とかの二次被害くらいは抑えられるだろ」

こちらの言葉を確かめるように、彼女は頬の布を剥がすと自分の手で触れてみた。新たに再生された柔肌は陶器のように滑らかで、見るからにすべすべとしている。その感触に満足したのか、彼女はにっこりと微笑んだ。

「ありがとう」

存外、素直にお礼を言われた。

裏も表もない、純粋な感謝の笑顔。恐らくは、大人になったら失われてしまうような。この年頃の子供にしか許されないであろうその無垢な微笑みは、控えめに見てもとても魅力的だった。

「細かいところは自分で治せよ。俺だって治癒はそんな得意ってわけじゃねーんだ。自分のならともかく、他人の怪我はあんまうまく治せねぇし」

彼の使う治癒術は怪我の根源に対する対処ではなく、あくまで人体の持つ回復機能を強化して怪我を塞ぐ、という程度のものである。自身で使うにはさほど問題ないが、これが他人の治療となると格段に難易度があがる。自分の身体なら痛みや何やらで、治療の必要な箇所というのが本能的に分かるが、他人の怪我では外見から重症度

を推測するしかない。
あるいは。祖母・月日のような支配者級（クエストクラス）の能力者なら、死人だろうと蘇生させてしまうのだろうが。生憎、自分にはあそこまでぶっとんだ力はない。
いずれにせよ、神威能力者の基礎回復力は普通人より遥かに高い。この程度の怪我であれば、本人の言うとおり自分で治癒出来るだろう。
彼女は一通り自分の体を改めると、真雪に向き直り、感心の色を浮かべた。
「うん。綺麗に治ってる。さてはいまし、いい奴だな」
「どうしてそこに『さては』なんて接続詞が入るのか理由がさっぱり分からねぇが、基本的に誰がどう見ても、俺は間違いなくいい奴だ。ついでに身内と家族には無条件に優しいんだよ」
それを聞いて、彼女は少し怪訝そうに首を傾げた。
「身内？」
「ああ。仲間でもいいけどな。お前、友達いないんだろ。だったら俺が第一号になってやるよ」
実際、それは素晴らしい名案に思えたが。
彼女はそうは受け取らなかったらしい。こちらを見つめる黒々とした瞳に、僅かな険が浮かぶ。

そこから？

真雪としては、その申し出自体は何の裏もない本心からの言葉だったため、少女のその反応は意外だった。宵闇のような瞳の中に、若干の怒りが滲んでいる。

「仲間だと？いまし、わたしに同情でもしているつもりか？」

「いや、そうじゃねえよ。別にお前に同情する理由なんてねぇだろ。ただ――」

なんと伝えようか一瞬悩む。が、結局彼は思ったままを口にした。

「お前、格好いいからな」

「はぁ？」

少女は思い切り怪訝そうな顔を浮かべた。言葉が足りないかと思い、補足する。

「ああ。俺はなんつーか……昔から、お前みたいに自分の意思を堂々と伝えられる奴が気にいってんだよ。誰に怯む事なく誰に気遣う事もなく、自分の目指す目的のために確固たる意思を持つ奴を尊敬してる。格好いいと思う。そしてなるべくなら、俺は気にいった奴とは仲良くしたい。だから、そういう奴を見つけたら、まずは自分から声をかける事にしてるんだ」

父親のため。恩人のため。

身体中傷だらけになりながら尚、命を失う事すら恐れないと、堂々と言い切った彼女の姿は。

無謀でもなく無策でもなく無覚悟でもなく無抵抗でもなく。

現実の痛みと苦しみを知った上で尚、断固たる意思を貫こうとする彼女の姿は。

とても、美しいものに見えた。

年齢など関係なく。充分、尊敬に値うる程に。

「折角会えたのに、これきりになっちゃ勿体ないしな。用は、自分の好きな奴と単純に仲良くしたいんだ俺は」

「……なんだ。つまりはいまし、私に惚れたのか？」
「生憎だが俺は胸と背中の区別もつかない生物は恋愛対象に含めてねぇ」
ナチュラルに不名誉な誤解をしている少女に対し、きっぱりと告げる。
つーかさりげなく図々しいなこの小娘。
なんの臆面もなく、ほぼ初対面の人間が自分に惚れてると断言しやがった。
どんだけナルシストなんだよ。
飛ばされた場所がここでよかった――と痛切に思った。この上、他言語圏なんぞに行っていたら、苦労は今の比ではない。
「まあ、妙な誤解をせずつるむ相手が増えた程度に思ってくれりゃいいんだよ。俺はお前を気にいった。だから今度から、困った時は声をかけろ。俺でよけりゃいくらでも助けてやる」
それを聞き、彼女は――本人には別に大仰なつもりもないだろうが――若手大衆芸人のように、やれやれとオーバーアクション気味に首を振った。この時代にはまだ西欧と国交を結んでないのに（それ以前にアメリカ合衆国が生まれてないのに）なぜか妙にアメリカンな仕草だった。
「大げさな科白を吐いてくれるものだな。いまし、異邦人なのだろう？自分の事もおぼつかない奴が他人の面倒まで見れるというのか？」
「余裕はなくても心はあるよ。人間だからな。心を亡くすのは人間失格した時だけだ」
「……神威能力者の癖に人間を名乗るのか。真雪は面白いな」
呟いて。
彼女は実際に、とても面白そうに嗤った。
それ先ほどの純粋な笑みとは違い、どこか奇妙に自嘲的な笑顔だった。
「……？」

その笑顔に、一瞬どこか軽い違和感を覚える。が、疑問を抱いたのも束の間――

「ああ、いたいた真雪。ここだったのか。早く戻ってこいよ。伊々美様がお待ちだぞ」

御殿から掛けられる声に振り向くと、そこには那由多（なゆた）がこちらに呼びかけながら手招きをしていた。

「ああ、悪い今行く」

さほど時間が立っているとは思わなかったが、思いの外、明と話し込んでしまったらしい。呼びかけに手を上げて応えると、戻る前に念を押す。

「じゃ、呼ばれてるらしいんで俺戻るから。好き嫌いなんて言ってないで、ちゃんと治して貰ってこいよ」

またな、と。

まるで気の置けない友人のように、再会を前提とした挨拶をする真雪を、寸前で明が呼び止めた。

「――ところで、真雪。最後に一つだけ、教えて欲しい事があるんだけど」

「ん？なんだ」

「友達って何？」

……。

そこからかよ。

ふぁっしょんしょー

硬い板敷きの床に座り込み、真雪はぼんやりと外を眺めていた。

遣り水を使わした庭園からは、ささやかなせせらぎが聞こえており、耳に心地よい。とりどりに植えられた四季の花（名前は分からないが）は、計算高く配置され見目も鮮やかに咲き誇っている。

陰陽寮は俗に寝殿造りと呼ばれる平安時代の貴族の屋敷に倣って作られた建物だ。ただし当然、並みの屋敷とは違い建物には常に数多の神威能力者――この時代の呼び名を借りるなら陰陽師――が詰めており、ここで生活も出来るようになっている。

上・中級職クラスや、元より京に自宅のあるものは、勤めが終わった後はここに泊り込む事なく家に帰るらしいのだが、地方出身者や独身者などは、こちらの寮に住むことが多い。とはいえ、屋敷全てでその住居を賄うには限度があるため、近くに宿舎専用の建物もある。

言ってみれば、ここは社宅付き全寮制の会社のようなものなのだろう。

実際はどうあれ、そう考えるのが一番理解しやすいため、真雪はそう認識している。

真雪にあてがわれたのは、その宿舎専用の建物で、その中のさして広くもない一室を専用に与えられていた。運び込まれた当初、彼が意識不明の重態だったということもあるだろうが、それ以前にこんな得体の知れない人物と陰陽師たちを、一緒の部屋に置いて置けないという常識的な判断によるものだろう。

結局のところ、彼がこの世界に持ち込めたのは自前の制服以外には、学校の鞄だけだった。筆記用具、ガム、携帯、財布……当然だが大したものは入っていない。仕方ないとはいえ少し残念だ。

故に、真雪に与えられた部屋にも、本来なら散らかるほどの荷物はない。せいぜいが夜具に、水差し程度である。が、今現在。その

シンプルな筈の部屋は色の洪水に襲われていた。
「うーん、どれにするかなー。蘇芳じゃ如何にも派手だしなぁ」
「那由多、蘇芳の衣は私自身も着ているものなんだが、そんなに派手かな」
「伊々美様はいいんですよ。この色を着こなせる落ち着きというか、風格をお持ちですから。けど、真雪みたいに、顔の造りの派手な者が蘇芳を着ると、変な意味で悪目立ちしすぎるというか……」
「……柄物は着ねーぞ」
「贅沢言うなよ。お前、ただでさえ無駄に図体でかいせいで、選択肢なんてほとんどないんだぞ。伊々美様の服をお借りするにも、お前が着てもおかしくないものなんて限られてるし……」
那由多は噛み付くようにそう言って、顔をしかめた。
男三人が雁首つき合わせて狭い部屋で何をしているかというと、真雪の衣装選びだった。なんでも、これから陰陽寮のお偉いさんと対談をせねばならないらしく、非礼にならないような衣を着ろというのだ。
だが真雪は当然学ラン以外の服など持っていないし（鞄の中にジャージはあるが）そもそも、着物など選び方はおろか、着方さえも分からない。なので彼の数少ない知人の中で、恐らくもっとも体型が近いであろう伊々美の着物を借りる事にしたのだ。本当は真雪に合わせて仕立てるのが一番いいのだが、服一着を作るにも結構な金がかかるらしく辞退した。
とはいえ、伊々美もその手の事ではあまり頼りにならないらしく、彼の弟子である那由多が助っ人として参戦したのだ。療養中、何くれと世話をしてくれたので、真雪とも面識がある。最初のうちは非常に礼儀正しい、昨今ではありえない程、きちんとした少年だったが、何度か顔を合わせるにつれ態度が雑になってきた。真雪が伊々美の客ではなく、『親切心で助けてあげた人』と認識したあたりから、彼の中では立場が逆転したらしい。今ではこちらに対し、兄貴風を吹かせるに到っている。

外見上は小学生だが実年齢も小学生だ。十二歳。つまりは、歳相応ということだろう。伊々美の弟子ということで、当然、陰陽師候補生。綺麗に切りそろえられた黒髪にくりくりした目が特徴的な、きゃんきゃん吠えるトイプードル。

こんな子供に怒られてもまるで応えない。真雪は半ばうんざりした面持ちで肩を竦めた。

「ていうか、俺この服じゃ駄目なのか？一応これって、俺のいたところじゃ冠婚葬祭に使える礼服でもあるんだが」

嘘ではない。学生にとっての制服とは、その一着で自身を現す標識であり、日常生活から式典にも使用出来る最強のワイルドカードだ。

「お前の郷里の風習なんてどうだっていいんだよ。遠野様にお会いするのに、そんな変な衣で行かせられるか。何かあったら伊々美様の恥になるんだぞ」

那由多はぷりぷりと怒って、蘇芳の衣とやらを丁寧に畳んだ。綺麗な色だとは思ったが、確かに派手な色だったので真雪はほっとした。

尚もぶつくさと言いながら、とっかえひっかえ着物を選んでいる。と、ようやくお気に入りの一品を見つけ出したのか、ぱっと表情が明るくなった。手にしていたのは萌黄色に藍袴の上下。落ち着きがある色合いで、さほど派手ではない。

実際の色合いやらを見たいのか、那由多が「立って」というので、真雪は素直に従った。萌黄の狩衣を羽織り、那由多が腰に藍袴をあてる。上下共にほぼ七分丈。

肘と膝の少し下あたり。嵐でいうと相葉丈というやつだ。いうまでもなく、丈が足りていない。

「……」

「……」

那由多は三点リーダで八文字分沈黙すると、忌々しげに舌打ちをした。

ファッションショーの終わりはまだまだ遠そうだった。

「だいたいさ、お前はなんでそんな無駄にデカイわけ？何食ってそんなに育ったんだよ、この唐変朴。その無駄に育った分の身長を、ちょっとは俺に分けろよこの野郎」

「無駄とか言うなな。そして無茶言うな」

シメるぞこのガキ。

「伊々美様は陰陽師の中でも長身でいらっしゃるんだぞ。折角お借りした着物も着れないでどーするんだよお前。このデカ！」

「るせえチビ」

あと平安時代の人間と同列で比較されても困る。

真雪の見たところ別段、自分の足が特別に長いというわけではない。単純に身長の違いである。なるほど、確かに伊々美はこの時代の人間としては恐らくず抜けて長身なのだろうが、真雪は現代においても更に長身の部類に入る。双方の差は目測でも約十ｃｍ強。丈が足りないのも道理だろう。

「もういいから諦めようぜ。つーか、そんなに偉い相手なのかよ、これから会う遠野様ってのは」

既にこの状況に飽きたと言う事もあり、半分以上は本気で告げると、那由多は如何にもとんでもない事を聞いたという風に、ひどく憤慨してみせた。怒りで顔を赤くした、ごく分かりやすい怒った顔。

「失礼な事をいうな！当たり前だろ！遠野様はこの陰陽寮の司にあたられる方だ。立場で言えばお前がさっき話してた明媛よりも上に当たられるんだぞ！」

「え、何？あいつってそんな偉いの？」

「うん？真雪はまた明媛と会っていたのか？一体いつの間に」

伊々美と真雪から全く別の二つの質問が重なった。思わず顔を見合わせる。

当然というかなんというか、那由多が優先したのは師からの質問

の方だった。師に向かいこちらを指差しながら、
「さっきこいつを呼びにいったら、庭で明媛と話し込んでいたんです」
「明媛と真雪が？」
それを聞いて、伊々美は不思議そうに首を傾げた。あの初対面の現場を目撃していればさもありなん、といったところである。真雪は「散歩してたら偶然会ったんで雑談してたんだよ」と端的な事実を伝えてやった。
「明媛と雑談、ねぇ……君、あんな事された後でよく立ち話なんぞする気になったね」
「あんな事？真雪と明媛の間って何があったんですか？」
「初対面の時、出会い頭に塵で攻撃されたあげく、腹蹴りくらって吹っ飛ばされた」
好奇心に瞳をきらきらさせている那由多にぶっちょう面で告げると。彼は爆笑するでも驚愕するでもなく、ごく普通に納得したように頷いた。
「なんだ。普通じゃないですか。どうせ真雪が失礼な事を言ったんだろ？」
「一方的に人を悪者にすんな。俺はあいつには一切何もしてねぇよ」
「うん。あの時の真雪は明媛に文字通り、手も足も出なかったからねえ。初めて目を覚ました真雪が誤解で私に攻撃してきたところを、通りがかった明様が抑えて下さったんだよ」
「目が覚めた時？ああ、伊々美様が家族の事を喋った途端に逆上して掴みかかってきたという、恩知らずな真似をした時ですね。なんだ、やっぱり真雪が悪いじゃん」
「……だから、それに関しては悪かったってきっちり何べんも謝っただろうが！」
後ろめたさも手伝い、真雪は拗ねた口調でぶっきらぼうに言った。
伊々美の保護された後、初めて意識が回復した折に多少の記憶の混乱もあり、彼の口から話した筈のない『姉』というキーワードが

出た瞬間、逆上して殴りかかってしまったのだが、落ち着いて話を聞いてみれば単に、気絶中の自分が、寝ぼけて口走ったというだけの事だった。その点については、のちに正気に返った後できっちり詫びを入れたのだが、まあ確かに殴られても文句は言えないかもしれない。

「明様は陰陽七星のお一人だからな。真雪程度が足元にも及ばないのも当然だろ」

「陰陽七星って何だ？」

聞きなれない単語に首を傾げる真雪に、那由多は愕然とした表情を浮かべた。伊々美は今更驚く事も無く、さも有りなんと肩を竦めた。共に、呆れ返っているらしい。

「うっそだろ？お前それ、本気で言ってんのか？陰陽七星を知らないなんて……どんだけ世間知らずなんだよ」

「しょうがねぇだろ。俺、ここの人間じゃねーんだから」

「それにしたって、仮にもこの日の本の国で陰陽師をやってる者なら、知らない筈ない名前だろうが。お前、本当にどっから来たんだよ」

「……お前の知らないところだよ」

予知能力を持たない彼には、決して知り得る事のない遥か時の彼方。遠い先の世界。

そしてそれは、今の自分にとっても等しく遠い。あらゆる意味で。

時の流れの先にある、千年後の未来。

果たしてこの先、自分は再びあの時代あの場所に戻る事が出来るのか。

胸中に浮かんだ疑問を噛み殺し、真雪はひっそりと溜息をついた。

陰陽寮

如何に本人にとっては真剣な悩みだとはいえ、それを知らない周囲にとってはなんでもない。周りに聞こえないほど小さな真雪のぼやきに、那由多はやれやれと溜息をついた。気を取り直してか、着物を畳む手を休めこちらに向き直る。

「いいか。この国には帝に定められ、国の守護をお役目とする部署がある。それがつまりここ――陰陽寮だ。そこまではいいな」

「ああ」

突如豆知識コーナーを始めた那由多の口調は、なんとなく得意げで年下を指導する先輩のようだった。弟子の解説を、師である伊々美はどこか面白そうに見守っている。

「陰陽寮には塵災害に対抗する能力者――俺たちみたいな陰陽師で構成されている。中にはここに属さない、市井の陰陽師なんかもいるみたいだけどな。所詮、三流だよ。本物の能力者はみんなこの陰陽師に来るんだ」

この国で最高峰の才能が集まる場所なんだよ、と。そう語る那由多の表情は、どこか誇らしげですらあった。続ける。

「そして中でももっとも優れた才能を持つ七人が『陰陽七星』の名を冠している。中でも明媛は、陰陽師では最年少で七星になったお方で、歴代最強と名高い方だ。更にお父上がその陰陽七星の長でもあり、陰陽寮の頭も務めている。今はまだ年若いけど、明媛はいずれその地位を継ぐであろうと、もっぱらの噂だ。当代では間違いなく最高の陰陽師の一人だよ」

「へぇ……てことは、ここって世襲制じゃねぇのか。珍しいな」

現代ならばともかく、この時代においては家と血筋を存続させることは必須であった筈だ。特に名だたる家柄や地位を誇る人にとっては、それこそが使命だったといっても過言ではない。その義務をあっさりと放棄した明の義父とやらに感心して呟くと、二人は呆気

に取られた顔でこちらを見つめていた。
「なんだ？俺、また何か変な事言ったか？」
「いや、そうじゃないけど……真雪。お前、何で明媛が陰陽頭の実の娘御じゃない事知ってるんだ？」
「ああ、そのことか。本人から聞いたんだよ。さっき話してる時に」
「明媛が……？そんな事まで話したのか？」
伊々美が改めて驚いたように呟くが、真雪はそれこそ意外な思いだった。一度でも彼女と話をした事があるならば、さほど驚く事でもないだろう。
彼女は嘘をつくような人間ではないし。
隠し事をするようなタイプでもない。
たとえ相手が誰であっても、聞かれたことには堂々と胸を張り、真っ直ぐ正直に答えるだろう。
あれは多分、どこまでも正しい生き物だ。
「まあ……確かに明媛と陰陽頭には血の繋がりがあるわけじゃないけど……真雪。出来ればあまりその話は、余所ではしないで欲しいな。公然の事実とはいえ、余所様の家の事情をべらべら吹聴するなど、あまり品のいいことじゃないだろう？」
「ああ、そうだな。気をつけるよ」
諭すようにやんわりと告げられ、反省する。いくら本人が隠し事をしないとて、それを赤の他人が気軽に喋っていい理由にはならないだろう。
「――で。あの小娘がタダ者じゃないのはなんとなく分かったが、これから俺が会う遠野さんとやらは一体どんな奴なんだ？」
「遠野様は陰陽司――この陰陽寮の最高責任者だよ。明媛の父君が寮内で最高の実力者だとしたら、遠野様は陰陽師で最高の権力者だ」
「げっ」
地位に怯んだわけではないが（実の祖母がそれこそ、世界中の異端児の頂点に立つ人間なので、権力者には慣れている）飛び出してきたのが意外に地位の高い人物だったので、思わず呻く。実のとこ

ろ、偉い奴らにはロクな知り合いがいない。
「いっがいに偉いやつが出てくるもんなんだな……なんでそんなのが俺みたいな怪しい奴と面会するんだ？」
「俺が知るかよ。とにかく！そういう立場の方をお会いするんだから、お前も相応の格好をしなきゃ失礼にあたるんだって」
最終的にその地点に着陸し、再び勇んで着せ替えに乗り出そうとする弟子を、伊々美がやんわりと止めた。
「残念だが、そろそろ時間切れだよ那由多。仕方ないから真雪にはこのままの服装で参上して貰おう。何、本人が言うには礼服に使われるくらいだ。見たところ、造りも割合に確りしているし、先方も真雪が異邦よりの客人である事は承知の上だ。さほど失礼にもあたらないだろうよ」
「伊々美様！？でも……」
「それにこれ以上時間をかけて探したところで、どっちにしろ真雪に丈の合うものは見つからないだろうしね」
やっぱり今度、新しい着物でも仕立てるしかないかなぁ、などと言いながら伊々美が立ち上がるのに倣い、真雪も腰を上げた。一人憮然とした顔の那由多に苦笑を浮かべ、
「そう拗ねないでおくれ。じゃあ、ちょっと行って来るよ。私達が出ている間に、このへんの着物の片付けお願いね」
にっこりと笑み、さりげなく弟子に雑用を押し付けたところで、伊々美は真雪を連れて部屋を後にした。

喰われるな

長い廊下を連れ立って歩く。距離はさほど苦にならない。ただ、これだけ広いとさすがに一人では迷子になりそうだった。伊々美が付き添うのはその意味もあるのだろう。例え部屋を指示されたところで、これでは無事に辿り着けまい。

「でも、私がついていけるのは部屋の前までだよ。実際に遠野様に会うのは君一人だ」

「え？そうなの？」

てっきり彼も同席すると思っていたので、その事実は意外だった。伊々美は苦笑を浮かべ、

「当然だろう。先方が御用があるのはあくまで君であって私ではないんだからね。そも、一介の陰陽博士ごときが気軽に拝謁出来る方ではないのだよ。何分、高貴な方だからね」

所謂、身分違いというやつだね。と、特にどうという事もなさそうに語った。その間も歩みは止まらない。伊々美自身が長身のせいか、彼の足取りは意外に早い。

「だから那由多じゃないけど、くれぐれも振る舞いには気をつけてくれ。何かあっても私ごときじゃ力になりきれないかもしれない」

「まあ、その辺は大丈夫……だとは思うけど。一応、あんたには迷惑をかけないように頑張るよ。助けて貰った恩もあるしな」

そう、彼には借りがある。瀕死の自分の命を助け、拾ってくれた。仇をなして返すわけにはいかない。

「そんな気負わなくてもいいけどね。同じ陰陽師なんだし。同胞が困っていたら助けるのは当然の事だろう」

対する伊々美はそれにかこつけるでもなく、本当に当たり前の事のようにそう言うと、鷹揚に笑って受け流した。人間が出来ている。真雪は素直に感心した。

「俺もそんな下手打つ気はないけどな。因みに、その遠野さんって

どんな人？いくつぐらいなんだ？」
「……遠野様、だよ。間違っても本人の前でさんとか言うなよ、本当。んー、歳は……実際のところ、詳しく知ってる者はいないんだよなぁ。大分、以前から今の地位にいらっしゃる方だから相応にお歳を召されている筈な　んだけど」
「意外と謎の人物？」
「そうでもない。唯一つ、これだけははっきり言えるのは、彼女がたいへんなお方だと言う事だよ」
　脅しというにはあまりに抽象的なその表現に――
　真雪は更に詳しく尋ねようとして、足を止めた。質問のためではない。伊々美が立ち止まったからだ。指をさす。
「ああ、ついたよ。あの部屋だ。いいかい。ちゃんと挨拶をして入るんだよ。そして万が一にも失礼な振る舞いをしないように」
　子供に言い含めるように、口煩く注意する伊々美に苦笑を返す。なんとなく聞きそびれてしまった質問の代わりに、真雪は以前から伝えようと思っていた事を言った。
「……あのさ、ありがとな。伊々美」
「？　なんだい突然。藪から棒に」
「いや、別に冗談とかじゃなくてマジで。なんかどたばたしてせいで、ずっと言う機会を逃してたんだけど。あの時助けてくれた事、俺、結構本気で感謝してるんだ」
　目が覚めてから殴りかかった事についての謝罪はしたが、一度も感謝を伝えていない。普段は世話人として那由多が傍にいる事が多いため、気恥ずかしくって口に出せなかった。
「お前がいなかったら、多分俺はあのままあそこで死んでたしな。本当にありがとう」
　助けてくれて。と、笑顔で謝辞を告げると、伊々美は面食らったような反応をした。
「……なんか真雪、いきなりそんな事言い出すなんて、まるで遺言みたいだね」

「縁起でもねぇ事言うんじゃねえ！！」
これから権力者と面会する前だって時にそんな科白を言って、死亡フラグになったらどうしてくれる。
「いーや、もう。適当にこなしてくるよ。無事に帰れなかったら俺の事は探してくれ」
「探して欲しいんだ……」
「当たり前だろ！探さない気かよ！？」
「なんでそこで突然怒り出すんだ！？」
「頼まれなくても自発的に探せよ」
咄嗟のアドリブに対応出来ず、焦ったように慌てる伊々美に、じゃあな、と軽く手を上げて進もうとすると。そこで。
去り際の彼を引き止めるように、伊々美がその手を掴んだ。
「……どした？忘れ物か？」
「いや……真雪。冗談抜きに、遠野様には充分に気をつけろよ」
「わーってんよ。何度も言うなって。そんな繰り返すと俺が馬鹿みたいだろうが」
「そうじゃない、そうじゃないけど……多分、そんな事以上に、あの女人は君にとって——否、どの男にとっても間違いなく天敵だ。喰われないように注意しろ」
心配よりも尚深度の深い憂慮の眼差しで、伊々美がこちらを覗きこんでくる。
彼の手をほどき、手だけでひらひら挨拶すると真雪は今度こそ振り向かずに歩き出した。

謁見

少し進んだところで、女房が待っており、彼女に導かれて通されたのはまたしても板敷きの座間だった。

真雪にあてがわれたものより、遥かに広い部屋。室内には畳が一枚だけ敷かれており、その上に女性が座っている。

謁見。

なんとなく、そんな言葉が脳裏を過ぎる。

近くには几帳があったが、深窓の姫君よろしくその影に隠れて声だけを聞かせるつもりはないらしい。それは、真雪の頼りない記憶によれば、この時代の女性にしては非常に珍しい振る舞いのように思えたし（明は別だ。多分この時代において、彼女はあらゆる意味で規格外なのだろう）あるいは、会話をする相手に自分の姿をみせた方が効果的と思ったか。別にどれでも構わない。ただ、後者の方が納得がいくとは思った。

真雪は所謂、上座・下座の位置関係で彼女と対面させられており、会話をするには両者の距離は少々離れてる。が、現代においては珍しくも眼鏡やコンタクトの力を借りずに、裸眼で二・〇という脅威の視力を誇る彼には、相手の顔がはっきりと見えた。

ぱっと見で年齢はよく分からない。が、伊々美の話からするとかなりの高齢だという。外見だけではさっぱり分からないが、落ち着きや風格からしても、確かに二十代には見えなかった。アサラーかアサフォーあたりだろう（真雪にはその辺の区別がいまいちよく分からない）入念に化粧の施された肌は少女のように滑らかで、年齢からすると驚くべき色艶を保っている。

長く豊かな黒髪はゆるやかに浪打ち、幾重にも重ねられた色鮮やかな内掛けの裾が優雅床へと広がっている。室内に焚き染められた香は、今までに嗅いだ事のない独特な香りで女性らしい甘やかさがあった。

「そなた、名はなんと言う？」
相手の口から零れる声は意外と低く、少しかすれていたがそれでも耳に心地良い。その声を聞いた瞬間、真雪の背筋にぞくりとした何かが走った。
「黒野……真雪、です」
「ふうん。黒野、に真の雪……か。なるほど、上下で繋がっておるのじゃな」
変わった名じゃの、と呟き、何が楽しかったのかは知らないが、しどけなく寄りかかったままくすくすと笑う。そんな何でもない笑い声すら、耳にするだけで酩酊に似た何かが襲い掛かってくる。
（うっわ……）
ここに至って、真雪は伊々美のアドバイスをこれ以上なく理解した。
目の前の遠野は絶世の美女、というわけではない。年の割りに信じられないほど若作りではあるが、女の外見は金と時間の掛け方次第でいくらでも何とかなるものだ。現に彼の祖母などは今でも孫の白雪と双子に間違えられる。まあ、あれは一種の例外だけど。
見目だけでいうなら遠野に比べ、明や姉らのほうが断然に麗しい。が、それらの誰もが持たないものを遠野は大量に持っていた。なめかましさと――妖艶さ。
今まで自分は育った家庭環境的に、美人にはかなりの耐性があると思っていたが、それは大間違いだった。なまじ傾国の美女ともいえる白雪と、これ以上なく深く血が繋がっている真雪は、確かに外見上の美醜には耐性があるが反面、色香に対する耐性は皆無といっていい。というか、実の姉に色気を感じてる奴がいたら、それは間違いなく筋金入りの変態だ。
麗しさだけでいうなら明も負けていないのだが、あの超越者には姉以上に色事の関心が抱けない。
明が性別を超越した神性な麗質を備えるならば。
遠野は性別を意識させない魔性じみた妖艶さをまとっている。

つまり、あの姉以上にどうしようもなく。あの少女より厄介だ。
天敵どころの話じゃねぇ。これもう既にラスボスだろ。
彼にとっては、恐らくこの世でもっとも苦手とする人種であった。
「そなた、東の森に倒れていたのを伊々美に拾われたそうじゃの」
「……はい」
出来る事ならお魚咥えたドラ猫追って裸足で逃げ出したかったが、そんなわけにもいかず観念して真雪は頷いた。
そんなこちらの胸中には一切構わず、遠野はゆっくりと話を進めていく。
「何故そのような場所におったのじゃ？あそこには、地元の民でさえめったに近寄らぬ場所と聞くが」
「分かりません」
一瞬躊躇うが、既に何度も聞かれた質問である。解に矛盾が出ないよう、真雪は素直に答えた。
「既にその質問には何度も答えていますが……俺は何も自分で意図してあの場所にいたわけじゃない。自宅の庭で不審者に襲われて……気がついたらあの場所にいただけです。それまでの経緯は自分でも一切思い出せない」
「なるほどのう」
話を聞いた遠野は、おざなりな様子で頷いてみせた。だが真雪にはむしろ、そのやる気無い態度よりも彼女の視線の方が気になった。
揺ぎ無い視線。まるで、柔らかい針にでも貫かれているような。覚えのある感覚に、連想したのは姉だった。つまり、何を見られているか分かったものではない。
「……やはり離れていると、少し声が聞きづらいな。互いの顔も見えんようでは、真偽など探りようがない。接見を許す。近う寄れ」
「……」
行きたくねぇ。
素直にそう思った。

ヤな予感

「うん？どうした？わらわがよいと言うておるのじゃ。遠慮は無用ぞ。早う来ぬか」

「いや、あの……俺のような得体の知れない怪しい奴を近づけるなど、無用心ではありませんか？」

「なに、そなたごときが何をしようが、わらわを害せる筈もない。ぐずぐずするな。何も取って喰いなどせぬわ」

いや、喰われそうだよ。

別の意味でな。

「そなたも珍妙な奴よのう……あの明媛に平然と近づく度胸がありながら、何をそんなに臆しておる？」

あの少女とこの妖女じゃそもそも、危険値の種類が違うんだが。

相手の言葉に疑問を覚え、真雪は遠野に近づかぬままに尋ねた。

「……別に、びびってるわけじゃないですけど。なんでそんな事まで知ってるんです？」

明と立ち話をしたのは、ここに来る少し前である。携帯もメールもない時代にしちゃ、情報展開が早すぎる。

「……あの娘は、この陰陽寮の中であってさえ立ち位置が少々特殊でな。あれに関することならば、大抵わらわの耳に入ってくる。ましてや、あの赤娘に自ら近づくような奇妙な生物がいるとなれば、何をおいても知らせが届こう」

「……まるで見張っているみたいですね」

彼女の発言はまるで。

あの少女が、常に監視されているかのような話ぶりだ。

特殊な立場。特別視される存在。幼き天才児。

どこかの姉と被るフレーズになんとなく沈黙する。

「否定はせんよ」

脳裏に微かな余韻を残すような声で、遠野は特に悪びれもせず笑

った。
「だが、あの赤娘にすら気後れなく近づく剛胆な青年が、わらわを遠ざけるというのも、些か悲しい事よの。こんな僅かで嫌われるほど、わらわとそなたに不快な事をしてしまったかのう？」
にぃと笑う。そんな無造作な仕草の一つがぞっとするくらい蠱惑的で妖艶だ。
「それともそなた、まさかわらわが怖いのか？」
それが挑発の言葉だと、気づかないわけではなかったが。
それでも無視する事は出来ずに、観念して真雪は彼女の元に近づいた。とはいえ、近づきすぎることはない。一m程の間隔を開けたところで踏みとどまる。――そこで留まっていかないと色んな意味で、それ以上先に進んでしまいそうだ。
傍に寄ると遠野からは、白粉に紛れて甘く蜜やかな匂いが漂っていた。焚き染められた香とは違う、もっと濃密な。嗅いだだけで、頭の芯までぼうと痺れる感覚に襲われる。だが不快さはなく、眠りにつく前まどろむような安心感があった。ヤバイ。
遠野がにこりと笑って手を伸ばす。何をするのかと思い、だが不思議と警戒も浮かばすにいると、彼女の指先が頬を撫でた。冷えた指が熱を持った肌に心地よい。――その時点で初めて、自分がほてっている事に気づいた。
あー、なんかくらくらしてくる。
「そなたも陰陽師なれば、塵災害がなんたるやは知っておるな？」
「勿論です」
こちらの胸中になど構わず、遠野は話を続けた。落ち着け落ち着け俺。
何かの誘惑に負けそうになっている自我を必死に奮い立たせる。何せ相手はアサフォーか、よくてアラサーだ。どう考えでも自分より一回りは年上、下手すると倍は離れている。女っつーかもはや親子だ。
高校生の時点でそんな年上キラーな能力を身に着けてどうする。

「ここ最近……丁度そなたの現れる一月ほど前からか。塵災害による被害が増大しつつある」
正気に返って背筋が伸びる。
その話は以前。
伊々美から少しだけ聞いた事があった。
だが遠野は、更に真雪の知らない先の話を続けた。
「塵災害の鎮禍は当然、我ら陰陽寮の役目。その任を果たせなんだら、帝よりの信を損ない民草からの不満も募る。が、しかし此度の塵災害では、さほどその声も大きくない。何故だが分かるか？真雪」
唐突に彼女から自分の名を呼ばれ、真雪の肩が一瞬跳ね上がった。名前を呼ばれたくらいで反応するなんて、小学生かよと胸中で自身を罵りつつも、緊張は解けない。マジで相性が悪すぎる。
「被害が拡大しているが、一般人はその被害者とはなってない。直接的に自分に関らない事だから、対岸の火事として見過ごせる……という所ですかね」
「その通り」
慎重に導いた回答に、遠野は満足気に頷いた。どうやら及第点だったらしい。密かに胸を撫で下ろす。
「此度の塵災害で被害を受けているのはこの陰陽寮なのじゃ。奇妙な事に、一般の民草には何の被害もなく陰陽師だけが死んでおる」
「嘘だろ？」
思わず素で突っ込んだ。普通人と比べ遥かに塵への耐性を持つ異端児が率先して被害者となる理由はない。それでは理屈が通らない。
「神威能力者は普通の人間に比べ、遥か強いに塵への耐性を身につけている。ただの人間が無事なのに、神威使いにばかり被害が広がる道理はないでしょう」
「そなたの言う通りじゃ。が、現にこの陰陽寮からも既に多くの被害者が出ている。まるで塵が選別して襲っているかのようじゃ」
「それこそありえない」
真雪はきっぱりと告げた。

「塵災害は塵によって発生するとはいえ、あくまで自然現象です。恣意的に被害対象を選別するなんて話聞いたことない」

過去の歴史を紐解いてみても、該当するような案件はない。こういった場合は大抵――

「そうじゃ。ふん……『悪意ある現象』とはよく言ったものじゃが、そういう視点で見てみれば此度の現象もまるで、そこに人意が介しているようではないか？」

あ、やばい。

そういう展開に進むのか？

漠然とだが。

なんだか酷く、やな予感がした。

運命？

世の中というものは出来たもので、悪い予感に関しては大抵が当たる。別に、当たって欲しくもないのだが。

「実はそなたを発見した者達も、問題の塵災害鎮禍の為に探索に出ていたところだったのじゃ。正確には、物見として放った筈の先発隊から救援の知らせが届いてな。――だが、辿り着いた時には既に手遅れだった。その場はもう災害の影もなく、残されていたのは先発隊の死体と――唯一の生存者であった異邦人のそなただけじゃ」

恐らくは伊々美達が意図的に黙っていた事まで暴露されて――

真雪は落ち込むでもなく寧ろ納得した。

行きずりの、拾っただけの他人に対する扱いにしては彼らの対処が丁寧過ぎるとは思っていたのだ。だけどそれも、理由を明かされればなるほどと納得出来る。

つまり自分は。

この陰陽寮にとってはたった一人の生き証人であり。

そして同時に容疑者でもあるということ。

被害者でも加害者でもある可能性のある人物だから、手厚く看護され隔離されていた。

それでも、彼らのくれた善意までもが全て偽りだったとは思わないけど。

思いたくもないけど。

「……俺の仕業だと？」

「それはまだ分からぬ。わらわはまだそなたをさほど知らぬ。判断を下すには些か性急に過ぎるが……問題はそう考える者が少なからずいる、という事実じゃ」

その問題より先に、さっきから人の太股を撫で回しているあんたの手をなんとかして句欲しい。

これはこれでかなりハイレベルな問題だろ。

「特に此度の件にて仲間を失った者達の心痛は大きい。そなた一人を排除して災厄が収まるならば、喜んで手を下そうという者達は少なくない」

「それは仕方ないでしょうね。俺がそっちの立場であっても、この状況では俺が怪しいと思いますし」

思うどころか間違いなく決め付けてかかるだろう。身内を失った人間の心情を思えば、仕方ない事だ。

その発言に遠野は些か驚きを覚えたらしい。目を見張って、ついでにこちらに顔を近づけてまじまじと覗きこんでくる。だから近い。距離近いって。

「なんじゃ。思ったより物分りがよいのう。その発言はつまり、そなたが非を認めるという事でよいのか？」

「まさか。単なる客観的な感想ですよ。たとえ証人がどこにもいなくても、俺の無実は俺が一番よく知ってる。その事実がある限り、むざむざ犯人として罪をきせられるつもりはありません」

同情はする。だが遠慮はしない。

少なくとも、無実の罪でむざむざと汚名を被れるほど自分はお人好しではない。

「正論じゃな」

遠野は納得したように頷いた。

「とはいえ……我らも実際に手詰まりな状況には変わりない。たとえそなたが無実を主張しようと、現時点においてそなたがもっとも怪しいという事実には変わりない」

「ですね」

こちらも納得し、仕方なく頷く。これでは平行線だ。

困ったのう……といいながら、遠野は更に彼の内太股に手を伸ばした。奇妙にくずぐったいのと、今まで経験した事のないそれ以外の感覚が、脳の活動を疎外する。ていうかこれ、セクハラじゃねぇか！

妙齢の女性に問い詰められながら身体を撫で回されるって、これ

一体なんの罠だよ!?

「そなたは何故ここに来たのじゃ?」

唐突な質問に正気に返る。いかん。頭がぼーっとしてきた。

「何故って言われても……さっきも言ったとおり『ここ』に来るまでの記憶はないんですよ。気がついたらここにいたってだけで。最後の記憶は自宅で途切れてますし」

改めて問われて思い出す。そう。そういえばその問題も放置していた。

「ならば質問を変えよう。そなた、ここにくる以前はどこにいたのじゃ?」

今度の質問には即答出来ずに言葉に詰まる。一体どう説明しろというのだ?この現状を。

本人にすら事情の分からぬうちに、千年後の未来から平安時代に飛ばされ、あげくそこで殺人犯扱いされるなど現実の出来事とは思えないが。原因の分からぬ状態では誰を恨みようもない。運命でも呪えばいいのだろうか。まったく。

ん?運命?

今何か、思いつきそうだったが――

「黒野の姓を持ち、陰陽師でもあるそなたを誰も知らぬというのも奇妙な話じゃ。差し支えぬなら、その辺の事情を話してくれぬか?そなたの身元の証が立てば妙な嫌疑も晴れよう」

それは実際、素晴らしく正論のように思えたが――

残念ながら続く言葉を持たず、真雪は再び沈黙した。馬鹿正直に未来から来たといったら頭の痛い奴と勘違いされそうだし、宇宙人に誘拐されて記憶を失ったのです。などと言ったところで、ネタが通じるとは思えない。寧ろ容疑が推定有罪から可及的速やかに確定有罪に変わるだけだろう。はて、どうしたものか。

ていうか、今気づいたがひょっとして『黒野』の姓はこの時代で既に確立されていたのか?遠野の話を聞く限り、そんな印象を受ける。そも、黒野家は歴史の長い一族ではあるが、それが表立って

頭角を現したのはここ百年程の、つい最近に過ぎない。それまでは一血統として静かに血脈を守りってきたのだ。

そういや、うちの起源も確か平安からだっけ。

いつの時代だったか細かい年代までは覚えていないが、ひょっとするとここに先祖がいるのかもしれない。

否、それだけではない。もしかして、もしかするとだが。『彼女』がいる可能性も皆無ではない……のでは？

単なる思い付きに過ぎなかったが、そう思った瞬間、俄然興味が沸いてきた。

「さあね」（前書き）

本日二回目。雨でひまなので。皆さんは大丈夫ですか？

「さあね」

「どうした？やましい事がないならそなたの素性を明かしてみせよ。証人が必要というなら連れてきてもよいぞ」

「残念ながら出来ません」

結局誤魔化すことも惚けきることも出来ず。真雪は素直にそう告げた。

「仮に住んでいた場所を言ったところで、貴女にはきっと分かりません。俺がいた場所とここはあまりにも離れすぎてる。どうやって来たのか自分でも分からないし、どう帰ればいいのかも今のところ見当もつかない。身元を証明するようなものも何もないんです」

正確には鞄の中には学生証が入っているし、財布の中には免許もあるが。それが一体何の役に立つだろう。

「そうか。分かった」

残念じゃの。そう小さくぼやくと、彼女はしどけなく脇息によりかかっていた姿勢を正し、ついでに彼の腿から手を離すと、きちんと座りなおして真雪に向き合った。

「ならばそなたには、これより場所を少々移動して貰いたい。今より多少手狭になり――住環境の質が落ちるが構わぬか？」

突然切り出された現実的な話に、真雪は若干面食らった。

「移動？」

「ああ。この屋敷の地下に、今ではさほど使われていない部屋があり、そこならば外から鍵がかけられる。そなたの無実を事実上証明出来ぬ以上、二次災害を防ぐためにそなたをそこに『保護』させて貰いたい」

保護って……

真雪は思わず苦笑を浮かべた。

「それ監禁っていいませんか？」

「そうともいう」

遠野は悪びれずに答えた。

「が、現に今ではこれ以上の案は思い浮かばぬ。わらわとて、このままこれ以上むざむざと同胞を死なせとうない。便宜上そなたを『閉じ込めて』おけば、騒いでいる者達も納得出来ようし、仮にそなたが犯人であったところで被害は止まる。逆にそなた以外の何者かが、何やら手妻でも使って凶行に及んでいたとしても、現時点でもっともあやしいそなたを隔離しておけば、その者への牽制にもなろう」

「――つまり、硬直状態を作ろうと？」

「ああ。そなたには気分のよいものではないだろうが、別に全ての因がそなただと決め付けているわけではない。些か不自由な思いをするやもしれぬが、衣食に関しては今まで通りを保障しよう」

「……ふーん。ま、構いませんよ。仕方ないといえば仕方ないし。落ち着きどころとしてはそんなもんでしょう」

こちらの一方的な偏見かもしれないが、予想以上に頭がいい。この時代なぞ所詮、権力者が自分の立場に物を言わせ、証拠も論理もなく拷問やらのごり押しで冤罪を押し付けるのかと思いきや……なかなかどうして、それなりに筋の通った理論だった。

娯楽の一環として推理ものやらミステリ小説やらが跋扈している現代の自分から見ても、彼女の言にはさほど無理はない。多少、恣意的な部分が見られるが。

「――で。その『保護』とやらは一体いつまでの予定なんですか？とりあえず一年とか言われたらさすがの俺も暴れますけど」

「そう長引かせたくはないが……一月ぐらいになるやもしれぬ。まあ、実際の罪人として閉じ込めるわけでもなし。可能な限り便宜は図ろう。――どうせ、身寄りのないそなたでは、ここを逃げたとしても行き先などあるまい？ならば屋根と食事の保障がされておるだけマシというものじゃろう」

ぐっ……

見透かされている。

遠野からの条件を真雪が素直に呑んだ理由の一つ――というか、一つしかない理由がそれだった。

何せ、この場所に来た理由も帰る方法も知らない。勿論、知り合いなども皆無である。なんとか、なけなしの悪運を振り絞り、第一次接触で伊々美のような人間に会えたからいいものの――仮にここで放り出されたら行く場所がない。金もコネもツテもない。勝手が分からぬこの時代ではバイトで糊口を凌ぐことも出来まい。

第一。元の時代に戻るにしても、神威能力者の集まるこの施設にいた方が、ずっと情報は入手しやすいだろう。

やれやれ。つくづく災難だ。

「では女房に新しい『部屋』まで案内させよう。必要な物があれば申すがよい。大人しくしておれば、悪いようにはせぬ。ゆめゆめ妙な気などおこすでないぞ」

それで、話は終わりという事だろう。彼女が再び脇の脇息に寄りかかると、音もなく後ろの襖が開いた。驚いて振り向くとそこには、先ほどこの部屋まで案内してくれた女房が立っていた。

け、気配を全く感じなかった……

ずっと部屋の外にいたのだろうか？

女房って確か、この時代のメイド的なポディションだったと思うが、なんかこの人の場合、女房っていうか忍の者みたいだ。

部屋の外へと促される。どうやら、またどこぞに連れて行かれるらしい。いや、どこぞっつーかさっきの話だとその監禁部屋とやらか。準備のよろしい事だ。

だが了承した以上、拒否する理由もない。

立ち上がり、一応遠野に礼をして去ろうとした時、その彼女が何かに気づいたように呼び止めてきた。

「待て、そなた……」

「はい？」

「そなたの、その……指と耳の飾りは――ひょっとして、精霊石ではないか？」

「さあね」
真雪は、ただ肩をすくめた。

監禁

我が心　なぐさめかねつ　更級や

この世に神はいない。
だから奇跡は起きない。
だけど運命はある。

例えばの話。
この世に生まれ、それなりの期間を生きてきたものたちの中で――少なくとも、成人近くになるまでは生存出来た者達の中で、果たして心から神の存在を信望している人間が、一体どれだけいるというのか？
無論、宗教感なぞは人それぞれなので、ここで強固に自説を語るつもりはない。およそ、信仰なぞについて語りだしたら、お寒い展開になるのは間違いない。そうでなくてもこの問題は結構デリケートなのだ。若造風情が気軽に手を出していいものではない。
だが、もしも真実この世界で生きてきた者ならば、誰であれ確実に神の不在を疑った瞬間が――否、確信した瞬間があるはずだ。あるに決まっている。ないわけがない。
自我を持って生まれ、人のように高度な文明と文化を持ってしまった生物の中で、
挫折を味わった事のない人間などいない。
苦悩を抱えた事のない人間などいない。
絶望を知らない人間などいない。

つまりこの世界に絶対たる超越者はいないという事になる。否、確かにその一点のみを神の不在の根拠とするにはいかにも薄弱だ。ならば、こう言い換えよう。

この世に神がいたとして

少なくともそれは、人間を救ってくれるような、人の為の優しい奇跡をもたらしてくれる存在ではない。

本当は誰もが、心の中でその事実に気づいている。なのに、誰も祈りを止める事をしない。この世界に救いがない事を知りながら、それでも奇跡を願わずにはいられない。

故に真雪は、何があろうと決して神には祈らない。祈りが無意味な事を知っているからだ。

神の奇跡は起こらなくても、この世界には道理を捻じ曲げる力が確かに存在している。それが塵能力だ。

物理法則の全てを無視する『物質操作』

意味破壊をもたらす『精神支配』

そして――時流の因果律を崩壊させる『運命干渉』

塵能力は遺伝要素による先天性の才能で、その能力自体が既に非常に稀有なものではあるが、実際にはその能力ごとに更に希少さがある。中でも群を抜いて珍しいのは運命干渉だ。

一般的に塵能力者の生まれる確立が千人に一人というなら、運命干渉系能力者が生まれる確立は一千万人に一人と言われている。対して、真雪の扱う物質操作はもっともオーソドックスな能力だ。無論、希少さがイコールで能力値に結びつくわけではないが、それでもやはり運命干渉系がレアな事には変わりない。

過去の世界に訪れた原因。今ある自分の現状。

そして、運命干渉という神威。

それらを踏まえた上で、真雪には一つ思うことがある。

ひょっとして。

元の世界に戻るために、もしかすると俺は、もう一度死ななけれ

ばならないのかもしれない。

◆　◆　◆

「うっわー……」

真雪が連れて行かれたのはリアル牢屋だった。

石階段を降りた先、つーかこの建物地下室とかあったのかよ、とか思いつつついて行った下にあったのは。これでもかというぐらい見事な牢屋だった。

頑丈そうな木組みの檻に、いかにも古めかしい南京錠がかかっている。地面だけはむき出しの土だったが、壁は全て石造りとなっていた。これではプリズンブレイクばりの脱獄は出来そうにない。

ＴＨＩＳ　ＩＳ　ＴＨＥ　ＲＯ－ＹＡって感じ。

こういった地下牢などでは、ぼっこぼこに拷問とかされた罪人やら死体やらが倒れてて、かなり悪臭が酷いかと思いきや、案外そうでもなかった。というよりどうやら長年使われていないらしく、人の匂いがまったくしない。が、さすがに空調整備は整っていないらしく、地下特有の黴臭さが充満していた。

「……俺、ここで暮らすのか」

「はい」

自ら了承した事とはいえ、早くもやる気を失いつつあった。

住めば都とかいうけどあれ絶対嘘だろ。

現在の状況で快適な住まいなど望むべくもないが、目の前の設備を見る限り、どうあがいたところで環境改善は出来そうにない。

てか、下世話な話これトイレとかどーすんだ？

まさかとは思うが……ここで？

胸中の不安を見透かしたかのように、付き添ってきた案内人の女房が口を開いた。

「お食事はこちらまでお運びします。二刻ごとに見回りの者が様子を伺いに参りますので、用を足す際などはその時に声をかけて頂け

れば。湯浴みにも無論、付き添いがつきます。単独行動は許可出来ませんが、御身の証となる方の付き添いがあれば外出は可能です。お会いになりたい方がいらっしゃれば、面会も自由です」

「結構融通利くんだな」

「遠野様のお決めになられた事ですので。貴方様はあくまで罪人として捕らえるのではないので、可能な限り便宜を図るよう仰せつかっております。必要なものがございましたら、見回りの者などになんなりと申し付け下さい」

　では、と綺麗な礼をして去ろうとする彼女を、真雪が寸前で呼び止めた。

「あ、だったらさっそくあんたにも一つ頼みがあるんだけど」

「はい。なんでしょう？」

「外出したいから付き添ってくれ」

「……」

とりあえず付き添って貰えた。

勿論、真雪としてもギャグで言ったわけではなく、ついでに嫌がらせで言ったわけでもない。ちゃんと目的があっての申し出だった。

一つには、自分の要求が果たしてどこまで相手に通じるか、という事。

二つ目は、水差しの中身を取り替えたかったということ。いや、それは頼んでもいいんだけど、なんとなく念のため。

あまり自分の事を他人任せにするのは得意ではない。彼はこう見えてA型なので微妙に几帳面だった。

そして三つ目は――これが最大の理由で要するに説明義務というやつである。

一ヶ月間の隔離生活――否、事実上の監禁。

一旦、前の部屋に戻ってそれを告げると、伊々美は口をあんぐりと明け（間抜け顔）呆気にとられた顔をした。那由多は掴みかからんばかりの勢いで身を乗り出し、勢い余ってかなりの音を立ててこちらにヘッドバッドをかましてきた（痛かった）

うむ。どちらも予想通りのリアクション。

「なんでっ！？」

まだ変声期前の甲高い声で、那由多がぎゃんぎゃんと吼えている。

「なんでなんでなんで！？一体なにがどーいうわけでお前が座敷牢なんぞに閉じ込められなきゃ何ねーんだろよ！？別に真雪は何もしてないんだろ？」

「那由多、落ち着きなさい。遠野様がお決めになられた事なんだよ」

罵声をあげるトイプーを師匠が横から諌めている。傍から見ていると、師弟というより飼い犬と調教師のようだった。

ていうか、やっぱあそこ本気でマジのギャグ抜きに座敷牢なんだ

……。

「だからってなんで、真雪が地下牢なんかに……理由がないじゃないですか！」

「そうだな。俺がここに来てからしたことなんて、せいぜい錯乱ついでにうっかり伊々美を殺しかけた事ぐらいだし。監禁までされる覚えはねぇな」

腕組みなどしながら真雪がしみじみ頷くと、なぜか師弟はそろって半眼になり互いに顔を見合わせた。

「……なんだ。そういやちゃんと理由があるんじゃん、お前」

「……ほら。御覧、那由多。火の無いところに煙は立たないんだよ」

失敬な奴らだ。

「にしてもお前、本当に何したんだよ一体。監禁って。どうせ、遠野様に対してもの凄く失礼な事でもやらかしたんだろ」

「人が犯人の前提で話を進めんな」

那由多の言に憤慨し、真雪は今までの経緯を話した。自分が容疑者として扱われる理由。遠野からの提案。そして、現在とこれからの状況。

「……なるほどね」

一通り聞き終わって、歎息を漏らしたのは伊々美だった。ふうむ、と唸り考え込むように顎下に手を添える。

「俺が犯人って説がどこまで広まってんのか知らないけど、下手にいつまでも延々疑われるくらいなら、多少不便だろうが身の潔白示しておいた方がなんぼかマシだろ。俺的にはあんま気にしないけど、俺がいつまでも疑われてちゃ、拾ってくれた伊々美にも迷惑がかかるし」

「いや、そんな事は別に気にしなくてもいいんだけど……」

伊々美は戸惑ったように口を開いた。

「真雪はいいのか？本当にそれで」

「ああ。さっき下見させて貰ったけど……ま、確かに快適空間とは言いがたいが、そこまで非人道的な扱いをされるってわけでもなさ

そうだったしな。この通り、望めば外にも出られるし、会いに来て貰う分には自由らしいから。暇なら来てくれ。退屈だし」

「そうか。君がそういうなら仕方ないけど……それでも一日やることがないのは辛いだろう。何か書でも読むかい？」

「いや、俺字読めねぇから」

青年の親切な申し出をあっさりと断る。正確には字が読めないわけではないが。この時代の書物を読むなど、素で古文書を読ませられるようなものだ。それならまだ英文学でも読んでたほうがなんぼかマシというものである。

まあ、電気も電波もないしＤＳも携帯も使えないので、マジに暇つぶしには困るのだが。一ヶ月くらいならなんとかなるだろう。寝てるぐらいしか思いつかないけど。

「とはいえ、一月というのも結構長いからねぇ。私は公務があるからそうそう頻繁には会いにいけないが……那由多。君は暫く庶務を免除するから、なるべく真雪に会いに行き話相手になってあげなさい。多少なりと気散じになるだろう」

「あ、はい。分かりました」

「そういうわけだ、真雪。何か私に用があったら那由多に伝えてくれ」

「ああ。ありがとう。助かるよ」

社交辞令ではなく本気でそう言って、真雪は立ち上がった。実際、伊々美の申し出は非常にありがたいものだった。恐らくこれからの自分には、うんざりするような退屈が待ち受けているのだろうから。

「何から何まで本当に悪いな。じゃ、俺そろそろ行くわ。お前らに事情の説明もしたし、案内の人もそろそろ待ちくたびれてるみただし」

一応、気を利かせてか部屋の近くで待機してくれているのだが（相手が伊々美だったからだろう）あまり待たせすぎるのも悪い。いや、本音を言えばあまり悪いとは思っていないのだが、これ以上に自分の立場が悪化したら不味い。

襖を開いたところで、立ち去ろうとする真雪を伊々美が少し慌てたように呼び止めた。
「真雪――今の話、明媛にはお伝えしなくてもいいのか？」
「はぁ？あいつに？なんで？」
唐突な発言に面食らう。が、伊々美はその反応にこそとまどったように、
「いや、なんでって……友人なんだろう？彼女」
「言われてみりゃ確かにそうだが……」
別にそこまで深い付き合いではない。ていうかあれ？俺、あいつと友達になった事とかこいつらに話したっけ？
まあ伊々美の方からこう言ってきている以上、話はしたのだろう。覚えてないだけで。
だがそう言われると、こちらから声をかけておいて相手に黙って姿を消すというのも、随分と不義理な気がする。真雪は那由多に声をかけた。
「那由多。お前、ちょっと明に伝えておいてくれないか？俺の事」
「へっ！？なんで俺？」
「だって俺、これから監禁生活だし。もう時間ねーし。いつまでも人待たせとくのも悪いだろーがよ。つっても、牢に入っちゃったらあいつに会いに行けるかも分からねぇし。お前に頼むっきゃねーじゃん。伊々美に休暇も貰ったばっかなんだし、どうせ暇だろ？」
「お、俺に明様と話をしろというのか……」
那由多が顔を引きつらせ、慄いたようにぼやいた。
「なんだよ。びびんなよ。あいつ、お前と五歳も年離れてないだろ。多分」
「年齢の問題じゃねーよ！俺らにとっちゃ明様なんて、雲の上のお方なの！天上人なの！俺みたいな下っ端の見習いの雑魚がおいそれと話しかけられるお方じゃねーんだよ」
「階級意識が刷り込まれてんなぁ……」
全然違うけど、なんかパブロフさん家のわんこみたいだ。

「だからって、俺がこのままも一度あいつ探しに行くわけにもいかねぇだろ。これから、監禁されて自由を奪われてしまう可哀相な友人の頼みくらい聞けねぇのかお前は」

「なんで頼み事してるはずのお前がそんなに偉そうなんだ……」

がっくりと力なく項垂れるが、それ以上は反抗してこなかった。

それを幸いと承知の証にとり、真雪は今度こそ部屋を後にした。

それから暫くの生活は予想以上の退屈なものだった。

何が堪えるって、やることのない時間というのがこんなにも長く感じるものだとは正直思いもしなかった。退屈は人を殺せるとはよく言ったものだ。

伊々美は多忙なのか顔を出さなかったが、那由多は約束通り毎日来てくれた。よっぽど暇なのか、単に義理堅いのか。多分その両方だろう。なんにせよ冗長な時間の中で人が尋ねてくれる瞬間というのは、それなりにありがたかった。

地下にあるため、部屋の中――否、もうはっきりと言おう。牢の中はいつも薄暗かった。一応、小さな灯取り用の窓が天井高くについているが、一つしかないため、光量もかなり限られる。日が沈み、周囲が暗くなると牢屋はほぼ真っ暗だ。蝋燭の類は支給されなかったので、暗くなる＝寝るようにしている。塵で光を作ってもいいのだが、真雪は微調整が苦手なのでやめておいた。火事にでもなったらことである。

おかげで、太陽と共に目覚め日が沈むと共に寝るという、超高齢者型生活になってしまった。健康そうだけど、生活スタイルの変更が早すぎる気がしなくもない。

とはいえ、日に一度は外に出して貰えるし、やはりこれは扱いとしては破格なのだろう。形式的に牢屋に入っているが、監視に来る人々も、到底罪人に対する態度ではない。遠野の命令か、あるいはここでも黒野の庇護か。どちらにせよ、ありがたいことにはかわりなかった。

それでも、決して牢屋での生活に慣れる事は出来ないが（やっぱり不便は不便だし、別に気分のいいものではない）しかし実際のところ、真雪はそこまで座敷牢の生活に嫌気が差しているわけではな

かった。

（ぶっちゃけ、抜けだそうと思えば、いつでも脱獄できるしな。ここ）

定時ごとに見回りが来るが、別に入り口が二十四時間カメラで監視されているわけではない。牢は頑強な木枠で作られ、到底人の手で破壊出来そうにないが、掛かっている南京錠は古めかしく無骨そうでも、単純な掛け金式だ。やる気になれば、クリップ一つでピッキング出来る（ペンケースに入ってた）

そして抜け出したところで、地面に赤外線センサーが張り巡らされているわけでもなし。この時代の危機管理意識がどれほどのものなのかは知らないが、現代人の彼の目から見ればここの管理体制は隙だらけだった。まあ、セコムもない時代にそんな事を言っても仕方ないが。

そも襖一枚で仕切りを作るだけで密室になると信じていたのが、古き良き日本人の国民性である。警戒心など、期待するだけ無駄かもしれない。

「でもなぁ、こんだけどこもかしこもがったがただと、逆に抜け出す気もなくなるんだよなぁー……」

その気になればいつもで抜け出せる。だからこそ、必要性もないのにあえて動く気がしない。これもジレンマなのかもしれないが。

まあ、ここにいればとりあえず衣食住の保障が付いているというのも、実は大きな理由ではある。

人として何か大切なものを無くしかけた結論のような気がしなくもないが、背に腹はかえられないのだから仕方ない。

いや本気でマジに金がねえんだ。

財布に入っている（彼にしては）虎の子の一万円札とはいえ、ここではただの紙切れにすぎない。現代でなら、日本銀行に持っていけば等価分の金と代えて貰えるのに。

畜生、俺もアシタカみたいに財産を砂金で持ち歩いていればこんな事にはならなかったのに。

今更ながらに悔やまれるが、考えてみれば、過去へのタイムワープを想定して、普段から砂金を持ち歩く生活の方が無茶な気がする。コンビニでジュースを買ってもお釣りは貰えそうにない。つーか、過去にワープとか絶対これ日常生活中で警戒しなきゃいけないイベントじゃねーだろ。

正直、無一文のこの状態で放り出されたら、一週間もかからずに餓死する自信がある。生き延びるためには、恐喝か強盗か追い剥ぎになるぐらいしか職業が思いつかない。

「あるいは親父狩り狩りとか……待てよ、そもそもこの時代に親父狩りとかあんのか？」

一時期、道場で流行った遊びで、有段者のおっさん連中が繁華街を無防備な姿でうろつき、金品を巻き上げようと寄ってきた若者達を、正当防衛と称して数々の技の実験台にしたという、どっちが悪人なのか分からない悪趣味な遊びだ。ていうか、今考えてもあれは絶対に過剰防衛だったと思う。

やられた側も自分に非があるのだから、まさか警察に訴える事も出来ず、無駄に力を持て余している現代の怪人達は、存分に猛威を振るったらしい。噂では、現代じゃ道場では試せないような禁技まで使われてたという。

ただの憂さ晴らしっていうか、ようはそれ体のいいサンドバックじゃねーかとは当時も思ったもんだが、言及するのはやめておいた。そもそも、相手も相手なのだから。同情する余地などない。少なくとも、俺はどんなに自分が金に困ろうと、あんな首と顔が同じ太さの和製シュワちゃんみたいなおっさんから、金を巻き上げようとは絶対に思わない。

道場では狩りの成果を自慢するのが皆の習慣になっていたが、ターゲットの年齢層から外れてしまう真雪には、そもそもカツアゲしてくる相手もおらず、成績は最下位だった事をついでにここに明記しておく。

「やくざとかならやっっちゃっても別にどっからも顰蹙こないだろ

うし、まずはそういう奴らを見つけてヤサを壊滅させるとか、シマを乗っ取るとかすりゃいいんじゃねーか？そうすりゃ、金も稼げるし屋根つきの建物も手に入るし、一石二鳥だよな」

かなり真剣に今後の間違ったライフプランの設計を立て始めたところで。

不意に何かの違和感を感じ、真雪は思考を停止させた。

前述した通り、日が沈むと牢の中はほぼ闇に沈む。とはいえ、完全な闇に閉ざされることはない。さすがに千年前だと大気汚染も排気ガスの被害もないのか、こちらの夜空は驚くほど眩しかった。

よく昔から『月のない夜には気をつけろ』とか『星灯り』とかいう言葉があるが、まさか夜の自然光で本当にものが見えるほどの明るさだとは思わなかった。単なるレトリックだとばかり。

とはいえ、地下牢ではその月光の恩恵も小さな天窓から受けるしかないので、結局のところたかが知れているのだが。それでも闇に慣れて目を凝らせば、物の影ぐらいは見通せた。

白雪ならば、こんな不便を感じることもないのだろうが。

当たり前の瞳しか持たない自分には、コンタクトもしていない（これだけははっきり自慢したい）自前の視力に頼るより他ない。気配を感じた方へ顔を向け、眇めるように闇に目を凝らす。

最初にその姿を目にした時、真雪は幽霊が出たのかと思った。

白い影。いや、影そのものが白いわけではない。地に落ちる影はいつだってどんなものでも黒々と黒い。だがその人物が幽霊に見えたのは、姿そのものが真っ白だったからだ。

闇の中。仄かな燐光を纏うように、うすぼんやりとした光沢を放っている。が、別に影自身が自ら光を放っているわけではない。

しっとりと輝く絹の衣をマントのように頭から被り、すっぽりと全身を包んでいる。かなり上等な品なのだろう。夜闇の中であってさえ、わずかな月光を反射しその布は美しく煌めいていた。丁度、布影に隠されるかたちとなっている顔は闇に沈んで伺えない。ゆったりとした衣は闇との境界を示し、夜の中にその姿を浮かび上がら

せるが、反対に身体の輪郭を隠し影の正体を危うくしている。
気配も音も感じさせず、その影は唐突にそこにいた。
いつから、などと考ええる余裕もない。
当然のように。自然のように。
あるいは超然のように。
まるで最初からそこにいたかのように。そこにあることが至極当たり前であるかのように。
影は悠然とそこにいた。
「……マジか？」
分かってる。
あまりに唐突な展開に、頬を引きつらせながら真雪は胸中で繰り返した。——分かってる。
伊達に世界最強を冠する家族に囲まれて育ってきたわけではない。彼自身には特別非凡の才などないが、一男子高校生にしては考えられないほどの修羅場を潜り抜けてきている。経験値だけならば、イラクの帰還兵にも負けはしない。
だからこそ。
目の前の影。無論、その姿に見覚えがあるわけではないが、これによく似た空気を彼は知っていた。
直近ではここに来る寸前に。そしてそれ以前にも何度か。
デッド・オア・アライヴ。
影の姿がゆらりと傾ぐ。ふらついたわけではない。幽玄としたその立ち姿に、危ういところはまるでない。微かに重心を移動しただけだ。つまり。
それを知覚した刹那——
真雪は全力でその場を飛びのいた。

プリズンブレイク

「――っ！！」

轟音と共に粉々に砕かれた檻が、細かな木片となって頭上から降りかかる。これ自体には脅威はないが、目に刺さったら事である。眼球を腕で庇いながら、なんとか体制を建て直し――

「うっそぉ……」

真雪は唖然として、綺麗に開放された檻に目を向けた。否、檻とすら呼べないだろう。檻とは入り口を閉じ、中にいるものを閉じ込めるためのものである。一箇所であれ開放され、中身を封じることが出来ないのであれば、それはもう檻としての用を成さない。檻だったもの、だ。少なくとも、もう脱獄にピッキングは必要なくなってしまったわけである。

とんだプリズンブレイクだ。

引いても押しても蹴ってもびくともしなかった、それ自体が屋台骨ほどありそうなぶっとい頑強な木枠の檻が、まるで発砲スチロールか何かのように粉々に砕けているのを、ぞっとして見やる。この影一体どんな膂力をしてやがるんだ、という話である。

そう、膂力だ。

影がゆらぎ、体を入れ替えたあの瞬間――つまり、後ろに軸を入れ替えこちらに飛び掛ってきた影は、加速を乗せ振りかぶった右腕で檻の木枠を殴りつけたのだ。

閃いた白絹の中から、僅かに腕が見えた。

一瞬の事だったが、人の腕に見えた。

つまり、人だ。

思い出すのは遠野の言葉。

『此度の塵災害では陰陽師の多くが命を落としている』

そんなわけはない。

『まるで塵が選別して人を襲っているかのようじゃ』

そんなはずはない。
全ての事象にはそれに相当する因があり、相応しいだけの（あるいは納得のいくだけの）理由がある。
理不尽なだけの偶然なんて存在しない。
偶然の終着点には必ず必然がある。
それが――これか。
正直、今回の件ではどこかタカを括っていたところがあった。被害の拡大を抑えるためだと説明されても、内心では環境の不便さだけしか気にしていなかった。
だって思いもしなかった。部外者である自分が本当に狙われる事になるなどと。
「ちっくしょー……話が違えじゃねーかよ」
まさか本当に命の危険があるなんて聞いてない（聞いてたけど）
第一、元の世界でならともかくここでは――
「俺襲われる理由ねーじゃん！」
声を大にして全力で訴えてみるが、生憎と相手には通じなかった。畜生。人の話をきかない奴だ。
影が躊躇なく飛び掛ってくる。――それを認識出来たのは、視覚ではなく触覚によるものだった。流れる風の動き。知覚出来ても反応しきれるものではない。真雪は覚悟を決めると再び無様に転がりはせず、腰溜めに軽く構えを取り、相手の先端部分――つまり、こちらに殴りかかって来る拳にそっと触れるように手を伸ばした。捕まえるためではない。指先が僅かに触れた瞬間、そこを支点にくるりと体を反転させる。流れる水のように無駄の無い動き。突貫の勢いをそのまま転化させられた影が、無様に石の壁に激突する。
「……あれ？自滅した？」
自分でも、あまり期待しているわけではなかったが。
恐る恐る呟くその眼前で、やはりというか予想通りというか、影は何事もなく立ち上がった。あの勢いで頭から石に激突したわけだから、相当なダメージを負っている筈なのだが。そんなことはおく

びにも出さない。
それでも勢いが強すぎたのか、見ると影の腕が壁に突き刺さっている。――しめた、これで動きを封じる事が出来た。と、喜んだのも束の間、真雪の見ている前で影はあっさりと壁から腕を引っこ抜いた。
と、その刹那、腕の刺さっていた穴を起点に石の壁ががらがらがら――と音を立てて崩れ落ちた。
「しゃ、シャレになんねぇ……」
その光景に慄きながら、今度こそはっきりと顔を引きつらせて、真雪は呻いた。
なんで生身より石の壁のほうが弱いんだよ。本当にこいつ生物か？腕だけサイボーグとか、実はお前も未来からきた鉄腕野郎じゃないのか！？
あまりの理不尽さに胸中で密かに憤慨するが、それでも一つ分かったことがある。
奴の攻撃を受け流した、あの瞬間。
正直、かなり際どかったがリスクを犯した価値はあった。真雪の手に残った感触は確かに人のものだった。加えて今の動き。多少、奇妙で理不尽なところがあるが、もはや間違いようがない。
これは塵ではない。
間違いなく人だ。
「精霊化……ってやつか」
稀にあることである。
耐性を持たない物質が長期間、塵にさられると――あるいは高密度の塵（たとえば精霊石など）に不用意に近づくと、その物質本来の姿を失い塵に蝕まれる。この現象自体は精霊化と呼ばれる一種の意味破壊にあたり、有機物・無機物を問わず発生する。とはいえ、生物がその影響を受ける場合は大抵、自我の弱い動物がなるものなのだが、人間が精霊化することもなくはない。過去にも実際、何度か症例が確認されている。

今回の話を聞いた時から、まさかとは思っていた。が、これで疑問は確信となった。

塵災害が悪意を持ち、選別して人を襲うなど聞いたことも無い。

不自然な事には必ず理由がある。

状況の中に人意が見えるなら、そこにあるのはやはり人意なのだ。

塵に意思などあるものか。

「さすがに初めて見た……人間の精霊化」

月日あたりに教えてやれば狂喜乱舞して喜びそうだな、とか頭の片隅で呑気な事を考えつつ。

（とはいえこいつ――どうしたもんか）

現実に直面しているのは、避け様もない危機だった。

人型――つまり原型が残っているということは、まだそこまで深刻な汚染は受けていない筈である。とはいえ、奴が既に生物の域を逸脱した存在である事には変わりない。それはこの交錯で見た身体能力だけで充分に分かった。

瞬発力や膂力――筋力では軽く人間を上回り。

肉体強度では石の壁すら貫通する。

おおよそ、この材料を考慮するだけでも生身で立ち向かえる相手だとは思えない。が、真雪にはそこまでの焦りはなかった。対抗手段がないわけではない。異端児である自分なら。

塵を使えば、精霊獣とてやりあえるだろう。もとより、神威能力者とはそのために存在するのだから。

便利な裏技が目の前にあるのに、それを使用しない手はない。それは、単に小心者か馬鹿のとる選択肢だ。必要とあれば、迷う理由はない。　ただ――

ゆだん

全力をもって抗うべき危機を目の前に、思う事があった。それは。
（問題なのは……ここの強度、だよな）
それでも懸念しなければならないのは、この場所が地下にあることだった。
千年前の建築技法など無論、真雪などには知る由もないが（正倉院などを見てみると、日本古来の建築技術もなかなか捨てたものではないようだが）さすがに現代の耐震強度クラスを期待することは出来ないだろう。こんな場所で下手に塵を使えば、精霊獣に殺されるより先に、最悪生き埋めという可能性の方が高い。
加えて問題なのが彼の能力だ。物質操作の対象を炎熱に特化している彼は、繊細さや緻密さには弱い。炎には烈火という表現があるように、本来であれば、非常に激しい性質を持つ。
真雪は微調整が苦手なのである。
地上に上がれば話も違うが、ないものねだりをしても仕方ない。
覚悟を決めるのに逡巡は必要なかった。
呼吸と共に塵を廻らし、隅々にまで行き渡らせる。高揚感と恍惚。塵が満ちていく中で、体内の細胞一つ一つが活性化していく錯覚に襲われる。知覚が拡大され、髪の毛の一筋にさえ神経が行き渡るような感覚。
異端児だけが持つ絶対感。力持つことへの愉悦と快楽。
湧き上がる激情に翻弄されそうになりながら――意思の力でそれを押し止めると、今度は自分から一足飛びに真正面の相手へと向かった。
「　っ！？」
駿足の踏み込み。比喩抜きに一瞬で両者の間が詰まる。眼前といえる距離まで肉薄しても、洞のような精霊獣の表情は伺えない。だがそれでも、互いを隔てる布越しには、はっきりと驚愕の気配が伝

わってきた。
（まさか塵による強化が、自分だけの特権だとでも思ってたのか？）
思いついた皮肉は声には出さず胸中に止め、踏み込みの足とは逆側の腕を引き、半身を捻りながら捻体を加えた渾身の突きを放つ。
肉を打つ感覚。その奥でぐんにゃりとした内蔵が潰れる触感までもが、肥大した知覚にダイレクトに伝わってくる。何度繰り返しても慣れない、怖気の立つ感触を無視して、真雪は更なる追撃をかけた――
（ここで捕まえておかなきゃ――やられる！）
いくら五感が鋭敏になろうと、光なきところで相手の姿を捉えられるわけではない。さっきの直撃はあくまで、相手が正面に立っていたのが分かっていたからという、純粋な幸運に過ぎない。
姉とは違い自分には、明りのない夜闇の中で真実を見通す目など備わっていない。
殴られた衝撃で吹っ飛んでいく精霊獣を捕まえて（布に覆われていたせいで、どこを掴んだのか分かりにくいが、多分腕だ）更なる追撃をかける。腹に突きを、下顎に掌底を、胸元に廻し蹴りを容赦なく叩き込む！
（いける――！！）
油断などするべきではない。特に、戦闘中においては。だが、この時の真雪にははっきりとした確信があった。攻撃の度、確かな手ごたえがある。このままいけば遠からず自分が勝つ――
「っつ……！？」
だが結果としては、そうはならなかった。
油断をしたつもりはない。だが慢心が隙を呼んだのか。常識ではおよそ考えられない角度から伸びてきた足が、完全なく死角から真雪の脇腹を抉っていた。肋骨の隙間をつくように、体の半ばまでめり込んでいる。衝撃に、堪えきれず息が詰まる。離するつもりのなかった手から、一瞬力が緩んでしまう。
（ど、どういう関節構造してやがるんだ！？）

理不尽さに呪いを吐く。だがそれは確かにどうしようもなく致命的な隙であり、敵もまたそのチャンスを逃す気はないようだった。

殺気――などという便利な気配を感じたわけではないが。風のうなる音はそんなあやふやな感覚よりよほど明確に、迫る危険を脳裏に知らしめた。脇腹に食らったせいで、サイドが甘くなっている。自覚はあっても、対処は間に合わなかった。避けきれない。流せない。

覚悟を決めて。

真雪はその一撃を食らった。

『いいか。力に対して力で対抗しようとすんな。力同士のぶつかり合いってぇのは、てめぇが勝ってるうちはいいが、それより強い相手とぶつかりゃ、それだけで負ける』

走馬灯のように。

激痛に耐える中で響くのは、師範代の言葉だった。

『だから絶対に力に力で張り合うな。正面からのガチンコ勝負なんざ、馬鹿のする事だ。確かにお前は体力も体格も並より優れてる。資質や才能に恵まれている。だけどそれでも最強ってわけじゃねぇ。だからまず、技術も持たねぇ癖に、身体能力だけに頼って対処しようとするのをやめろ』

骨の軋む音。更にその先にある、硬質の何かが砕ける音。人体の破壊される音というのは、何度聞いても慣れる事はない。ましてや、それが自分のものともなれば。

師の声音は厳しくなくとも確かに他を圧倒する力があった。

『攻撃なんか受けるな。力でなんかぶつかるな。触れるものは全部受け流せ。ひらかわせ。やりいなせ。正面から対抗なんてすんな。常に自分の負けたケースを想定しろ。そうすりゃ、勝ちはなくとも負けはねぇ』

なるほど。確かに師範代の言った通りだ。

ぶつかり合いに負けた結果がこれか……

防御が間に合わず、咄嗟に盾とした左腕には、金属バットで殴ら

れたような激しい痛みが残っている。確認するまでもなく、完全に折れているのが分かった。激痛があるだけまだマシと見るべきか。神経まではいっていない。致命傷にはなっていないが、戦闘には使えない。

（――くそっ）

無様だった。

一瞬前の自分を縊り殺したくなるほどの怒りにかられるが。生憎と、後悔に浸るほどの時間も彼には与えられなかった。

月下美人（前書き）

３０話のゆだんと３１話ぶざまが同じ内容になっているとのご指摘を頂き、先程訂正致しました。ご指摘頂きまことにありがとうございます。

大変失礼致しました。

修正は本日分にはカウント致しませんので、本日分はまた別に今日中に投稿したいと思います。

攻守が一瞬で逆転する。

咄嗟の判断で横に飛んだ――瞬間、自分が最悪のジャッジをした事は分かっていたが、他にどうしようもない。飛びのいた刹那、一瞬前まで自分のいた空間の地面が、抉られるように粉砕される。

（あ～、もう、畜生っ！！）

一度下がってしまった。先制を譲ってしまった。こうなったらもう仕方ない。それが婉曲に自分の寿命を縮める結果だと分かっていても、信雪はその方法以外に選びようがなかった。

暗闇の中で、一寸先も見通せない役立たずな瞳を閉じる。使えない感覚ならば、なくしても変わらない。視界を閉じ、その分の集中力を他の感覚へと回す。触覚、嗅覚、聴覚、残された全感覚を総動員して、鋭敏に研ぎ澄ます。

相手が動く。

そして――

避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける！！

全身全霊の集中を費やし、迫り来る攻撃を紙一重で交わしながら、それでも真雪は自分が圧倒的に追い詰められているのを感じていた。

これはこれで一種の膠着状態ではあったが、それでもこの状態を続ければ、どちらが不利になるのかは明白だった。

どんなに動きが速かろうと。どれほどの達人であろうと。

超人でも無い限りは、永遠に攻撃をかわし続けられるなんてことは無い。

このままではいずれ、限界が来て終わる――

打開するには手を打つしかない。まだ残っている手札を冷静に数える。何だ？今の俺にはなにが出来る――？

左腕は無残に折れている。が、全く使い物にならないわけではない。少なくとも、痛みがあると言う事は神経は生きている。骨は折れても筋肉はそう簡単に千切れはしないだろう。根性を出せば、一度ぐらいは動かせるかもしれない。まあ、その後で果たして腕が無事に済むかどうかは不明だが。

（もう一度この腕を盾にして奴に接近し、折れた腕で相手を拘束する――出来るか？）

胸中に問いかける。だが問題は実現の可否ではない。やるかやらないかだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｏｒ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｂｅ.

迷うほどに不利となる。仕方ない。

真雪は歯を食いしばり、決意した。

だが結果として、その決意は無意味となった。

隠密性もくそもない、突如辺りに響き渡った激しい轟音はそれと共に爆発的な激震を轟かせた。天井をぶち壊し、それだけじゃ飽き足らず、一部が砂塵となって崩れ落ちる。ただの衝撃では破片はここまで細かな粒にはならない。天井の一部が崩れ去っただけでなく、そのもの全体にまで細かな罅が入っている。少しでも新たな衝撃が加われば、容易に崩れるだろう。崩れた屋根からはぽっかりと天空が覗き、そこから見える月が浩々と光を放っている。

もう暗闇ではない。

月光に照らされた牢内は廃墟のように雑然として、酷く間抜けなものだった。

今の今まで真雪と死闘を繰り広げていた精霊獣も、さすがにこの事態には何か思うことでもあったのか。奴の思考が人間のそれとどう違うのかは知らないが。呆気に取られたように硬直している。

その中に。

もうもうと湧き上がる粉塵が静まる頃（を恐らく見計らって）廃墟と化した牢内に、天空から降り注ぐ月光をスポットライトのように一身に浴びながら、小さな赤い人影が、音もなく優雅に舞い降り

た。

暗闇の中でなお艶めきを放つ長い黒髪が、花弁のようにふわりと広がり、一瞬遅れてその背に落ちる。

月に照らされた完璧なる白貌。漆黒の髪。小柄な体躯。

真紅の衣を翻し。

陰陽師の鬼子――あるいは陰陽七星の一角を担う鬼才、明媛は、突如もたらされた破壊の跡など気にもせず、さながらそこが彼女のために誂えた舞台であるかのように、空気も読まずに堂々と降りたった。

いふうどうどう

威風堂々。それが、当然であるかのように。

「……ふん」

辺りを見回し、鼻を鳴らす。砂煙が収まると、がれきの中、彼女の矮躯はよりいっそう目立った。が、頼りなさはまるでない。周囲を睥睨する様は、威風堂々とし、さながら王者のごとく風格を漂わせている。ついでに、その足元でがれきと一緒に下敷きにされている、真雪の頭らしきものが砂まみれになって覗いていた。

自らが踏み潰している存在に気づいたのか、少女が今更ながらに足元に目線を向ける。

「……ん？人の足元で何やってんだいまし」

「……いや、なんかもーいろいろ言いたい事は山ほどあるが、とりあえず降りろ」

砂粒を吐き出しながら真雪は呻いた。少女は存外素直に降りてくれた。

あーあ。服が汚れちまったじゃねぇか。

こうなってしまうと、選択の余地はなかったとしても、せめてジーパンで来ればよかったと悔やまれて仕方ない。砂汚れは表面だけでなく、繊維の隙間に砂粒が入り込んでしまうので、洗ってもなかなか落ちないのだ。おまけに黒では砂汚れも目立つ。一張羅の制服なのに。どうしてくれるんだ。

こうなってはせめて、学ランを脱いでいた事を不幸中の幸いと思うしかないのだが、よく考えてみればその辺に脱ぎ捨ててあるだけなので、もれなく砂礫に埋もれている筈だ。やっぱり幸いでもなんでもねぇ。

合成洗剤とクリーニングのないこの時代に、粒子の細かな汚れがどこまで落ちるのかは疑問だったが。かけはぎや染み抜きが出来るくらいだ。失われた技術の奇跡を祈ろう。

「多少の汚れなんて洗えば取れるだろ。男の癖に細かな事をごちゃごちゃと言うな」
「お前も女なら多少は周囲に気を使え」
互いに不毛な罵りあいをして、睨みあう。
まったく。
無事な右手で埃を払って体を起こす。ついでに何か人としての大事な誇りも一緒に払い落としてしまった気がするが、まあ気のせいだろう。突然空（天井）から降って来た女子中学生に足蹴にされて踏み潰され、土下座に近い姿勢を取らされるなんて、まあよくある事だ。別段、気にするようなことじゃない。少なくともイベント的には、千年前の過去世界にタイムワープするより、エンカウント率は高いだろう。
気にしない気にしない気にしない。自分に三回言い聞かせる。気にしたら負けだぞ。だから気にしない。
空から降って来たのが、ラピュタ王家の子孫ではなく、赤い小娘だったことに多少がっがりしつつ、天井を見上げ、呻く。
「……君、すごいところから出て参りましたな」
動転のあまりキャラが若干おかしくなった。
天井――というか、壁の一部は原型が分からないほど派手に打ち崩されている。まるで砲弾でも喰らったかのような跡だ。多分、外観を見たら建物の一部が抉り取られているかもしれない。遠野が見たら卒倒するかな、と他人事のように思った。
つーか、派手に壊しちゃってまあ。
俺はなんの為に左腕を犠牲にしてまで塵使うのを控えてたんだよ。
人の苦労が台無しじゃねーか。
少女はこちらが立ち上がるのを待つと、ちゃっ手を挙げ、
「久しいな真雪。息災か？」
「……無実の罪で投獄中の友人を出会い頭に踏み潰しておいて、第一声がそれか？」
「少し太ったんじゃないか？」

「そうじゃねぇだろ！？百歩譲って仮に、俺の体重がマジに増加してたとしても、今注目するところはそこじゃない！！」
衣食住は保障するというだけあって、食事量は変わらないまま運動不足だったからだ。
つーか、そんな事よりもまず謝れ。
お前が土下座しろ。
「ったく。なんでお前はそうやって、毎度毎度、都合いいタイミングで現れるんだ？どっかで監視でもしてたのか？」
「いましを拾ってきた陰陽頭がいただろ。ええと、なんだっけ――」
「伊々美？」
こちらが先に答えを投げると、明は軽く首肯した。
ていうか名前覚えてやれよ、いい加減。お前、仮にも同僚だろ。
「その弟子とかいう小煩い子供が先日、私の元にやってきていましが囚われている事を告げにきた」
「ああ、那由多な」
なるほど。つまり彼は、無事頼みを果たしてくれたわけだ。
「なんか『真雪の不在が明媛様のお心障りとなってはいけませんので伝えに参りました』だとかよく分からん事を言っていたな」
まあ分からないだろう。
人の姿が見えないからって心配するようなタマじゃなさそうだしな。
「一応念のために言っておくが、いましがどうなろうと、私はちっとも気にしないぞ。心配するな」
「皆まで言うな。そこは誤解していない」
畜生。誰だこいつに断りを入れた方がいいとか、余計なアドバイスしやがったのは。
かえって俺が気遣って欲しいだけの痛い人になっちまったじゃねーか。
「まあ、いましの現状などは実際どうでもよかったんで、あの小僧に聞いた一秒後に記憶から消去しておいたんだが。最近の塵災害の

せいで陰陽師の数が減り、当直の者が足りないから、急遽手伝ってくれと借り出されて。寮内の警邏するフリしながら暇つぶしの散歩をしてたら、いきなり凄い爆音と塵を察知したので、おっとり刀でここまで駆けつけてやったというわけだ。どうだ、分かったか？」

「ああ。その説明を聞いて俺は今、お前にありがとうとこのやろうのどっちの五文字を伝えるべきか非常に判断に迷っているよ」

いいタイミングで助けに来てくれた事には素直に感謝するが、それに到る経緯についでは感謝の欠片も感じねぇ。

つーか別にこいつ、俺を助けにきたわけじゃないしな。

むしろ思いっきり忘れ去られてるじゃん。

どんだけ人に関心ないんだよ。

「まあ、お前がここに来た理由は分かったが、なんで天井から入ってきたんだ？普通に階段降りて来いよ」

「丁度のこの上あたりを見回ってたからな。入り口まで行くよりこっちの方が速かった」

さいですか。

修理代は自腹切れよと思ったが、口には出さなかった。

「だからってわざわざ人の上に着地すんなよ。背骨とか折れたらどーしてくれんだっての」

人体の背面には脊髄を始めとし、神経など重要機関が集中している。下手すれば命にも関るし、それでなくても変なところを損傷すれば不随などの障害にもなりかねない。

「いいだろ別に。陰陽師がその程度で文句言うな。そんなん自分で治せるだろ」

当然の抗議をするこちらに対し、彼女は逆ギレという暴挙に出た。

「死人以外の怪我なら塵を使えば治せる――殺されでもしない限りはな」

例えるならそれは、凍った炎のような。燃える氷のような。それまでとは打って違う、有り得ない程に乾いた、硬質の声音。

明らかな怒りを湛えたその声に、真雪は思わずぎょっとした。

本物の

そしてようやくに気づく。彼女が今、怒り狂っているのだという事に。

（考えてみれば、当然か）

この精霊獣が今回の騒ぎの原因なのだとしたら、奴は過去に陰陽師ばかりを狙って殺害している。その中に、少女の知り合いがいたとしても、別段不思議ではない。

「……ようやく尻尾を掴めたな。ちょろちょろ逃げ回りやがって。ここであったら百年目だ。もう逃がさん」

標的を前に笑う彼女は、激怒に任せて我を失うといった様子はない。どちらかといえば、奇妙に落ち着いて見えた。忍耐から来る冷静さではなく、憤怒を一旦通り越して、辿り着いた冷静さ。

「喜べ真雪。多分、生きて奴を追い詰めたのは、私達が初めてだぞ」

「やっぱあいつが犯人なのか？」

「知らん。何せ奴に遭遇した者は残らず死んでいるからな。例外はいましくらいだ」

実際には真雪が負ってた怪我は目の前の精霊獣につけられたものではなく、元の時代で謎の侵入者にやられたものなので、そういう意味ではこの対面が本当に初めてとなる。

「よし」

特に気負った様子もなく。

彼女はその一言だけを呟くと、眼前の敵に向かって躊躇なく突貫をかけた。

獣に向かって駆け出しながら、瞬時に塵を組み上げ前方に放つ。以前見たものと同じ、独特の、癖のある技とも言えない大雑把な構成。投げ捨てるような無数の塵は確実に獣の動きを狭め、その隙をついて振り払われた少女の足が、軽く触れただけで獣の身体を遥か後方まで吹き飛ばす。

なんとなく。
参加するタイミングを逃し、少し離れたところで、折れた腕の治療などしながら、その攻防に見入っていた真雪は、少女の技量にただただ感心していた。
「うっわー……」
我ながら間抜けとは思いつつ、他に出来ることも無く、ただ唖然として声を漏らす。
（おっそろしく目がいいな。それに、反応も早い。あれだけ滅茶苦茶な動きをしながら隙が出来ないのはそのせいか）
狭い牢内を縦横無尽に駆け回り、嬉々として相手を翻弄する少女の動きは、傍から見ていても正直、信じがたいものだった。機動力もそうだが、平衡感覚自体もどうにかしているレベルだ。精霊石で強化されている筈の精霊獣と、生身で張り合っている。異常としか言いようがない。
（これだから天才って奴は……）
今更、羨望するわけではない。既に慣れ親しんだ痛みがじわりと胸中に滲む。
彼女がやっているのは真雪が先ほど諦めた手段――ごく単純なパワーゲームだ。人体の能力を遥かに凌ぐ精霊獣に対して、それ以上の実力で対抗している。技術もクソもない、だからこそ他に避けようのない正面衝突。
身体を覆うほどに長い黒髪が、少女の動きに従ってまるで獣の尾のように跳ねる。
もはや状況は完全に明のペースだった。一旦、距離を置こうとしたのか。悪夢のような速度で迫る少女に、精霊獣が始めて攻勢に転じた。放たれる塵。迅速で強大だ。横に逃げても後方に飛び退いても、かわしきれないだろう。少女は一瞬でそれを判断した。そしてそれ以外の選択肢――上空へと避難した。
「へ……？」
まるで騙し絵のような光景だった。崩れかけた天井を足場に、天

地真逆の状態で少女がしゃがみ込んでいる。呆気に取られたものの、すぐにその力の正体に気づいた。

重力制御だ。しかも上手い。この時代にはまだ、重力などという概念はない筈なのだが、あるいはそんな知識もないままに、純粋なセンスだけでコントロールをしているというのか。

才能の差に落ち込むというより、差がありすぎて比較する事も馬鹿馬鹿しくなる話だ。ともあれ、彼女の常識外れの機動力についても、これで説明がついた。天性の身体能力にプラスして、重力の加速をつけているのだろう。いや、あくまでそういう理屈上の説明がつくだけだけど。実際の所は大いに納得いかないのだけど。

明は天井からの落下速度に過重をかけながら、精霊獣の脳天を目掛け容赦なく踵を振り下ろした。直撃が決まれば、頭蓋骨さえ砕きかねない一撃。だが相手は避けるまでもなくかざした腕でそれを防ぐと、そのまま明の足を掴んだ。

「　っ！」

捕まった。明の顔に、初めて驚愕と僅かな動揺が走る。無理な姿勢で、それでも体勢を立て直し必死に足掻くが、無論そんな事では相手も手を離さない。そのまま、彼女の華奢な体躯を床に叩きつけようとしたところで――

真雪は近場にあった壁の破片を拾い上げ、二人に向かって投げつけた。放たれた礫は狙い違わず、吸い込まれるように丁度両者の間に飛んでいき、それを避けるため明への拘束が一瞬揺るんだ。その隙を逃さず、精霊獣から離れると、空中で器用に一回転しながら後退してくる。

にやり

こちらの隣に並んだ少女は、訝しげな口調でぼそりと呟いた。

「……奇妙だな。なんだアレ。本当に人間か？」

お前が言うかよ、とも思ったが、それは口に出さず真雪は答えた。

「人間だよ。少なくとも、元はな。精霊獣って知ってるか？」

「知ってるけど……あれは獣とかがなるもんだろ？」

怪訝そうに尋ねてくる。

この時代に、塵への正確な知識が　どこまであるのかは不安だったが。

とりあえず知識の共有が図れた事に安堵しつつ、真雪は説明した。

「基本的にはな。だけど、純度の高い精霊石は稀に低級な支配を拒絶する
より高度な使用者を求め、結果として人間が取り込まれる事もある。
稀有な例だけどな」

「へぇ……」

明は感嘆の声を漏らした。

「いまし、変な事ばっか知ってるんだな。初めて感心したよ」

どうやらこの少女と会話するには、褒められる時まで傷つけられなきゃならんらしい。

なんで素直に感心出来ないんだ……

「んで、結局あれは人間に戻れるのか？」

「さぁな。寡聞にして俺も精霊化した奴が元に戻った症例は聞いた事がない。――俺が知らないだけかもしれないけど、常識的に考えてまず無理だろ

「なんだ。結局いましの知識はその程度か。まあいい。図体ばかりが無駄にでかくなって中身の伴ってないいましの頭脳なぞに、少し

でも知性を期待した私が愚かだったというだけだ」

……

そこまで言われるような事、俺言ったか？

言ってねぇだろ？

「……とにかく。そういうわけで、あれはそんじょそこらの精霊獣とはちょっと違うぞ。素体が人間なだけあって、並の精霊獣より遥かに知識も高いし、状況への柔軟性にも優れている。一筋縄ではいかねえ相手だ」

「そうかい」

「手伝おうか？」

「いらん。超余裕だ」

それは特に裏のない、純粋な善意からの申し出だったが。

こちらからの援助を、明は振り向きもせずに一刀両断した。

ていうか、超とかって使うの？平安時代　。

時代考証の必要性を切実に感じた。

「元が人間だと分かれば、かえってやりやすいぐらいだ」

呟くと。

相手の行動を待つつもりも無かったのだろう。

明は即座に塵を練り上げた。

見てて何度か思った事だが、練成から発動まで彼女の扱う術にはほぼタイムラグがない。

異常なまでの速度だ。

練成術は基本を大幅に無視しているが、そこに危うさはない。むしろ安定している。威力そのものには申し分もない。

神威を放つ。

限定空間のみに放出された彼女の望みは、世界の基幹をなす法則すらも歪め、ただ術者の思うままの理想が顕現される……

既に崩壊しきっていた地下牢が。

更に、音を立てて崩れた。

展開された重力場はその有機物・無機物を問わず、範囲内

にいる全ての物質に加圧をかける。
地面のひび割れる音とともに、その重力をモロに浴びた精霊獣が膝を地に着いた。
それを見て。
明はにやりと――まさにそうとしか表現のないくらいにやりと――邪悪に口元を歪ると、一瞬の躊躇もなく精霊獣の元へと踏み出した。

とうぼう

「はぁ？」

呆気に取られて思わず呻く。

当然だが、指定範囲内全域に力場が展開されているため、術者本人と言えど、その領域内に入り込んだら影響を受ける。

案の定、少女の動きは目に見えて精細を欠いた。

それでも、常人と比べれば遥かに動きがいい。

重力場を中和しているのか、それとも単に彼女の身体能力を持ってすれば、この程度のハンデなどものともしないのか。

明は間合いに入り込むと、無造作な仕草で薙ぐように足を払った。

先ほどのように常識外れの動きではなく、はっきりと目で追える攻撃だったが、それでも今の精霊獣にはかわし切れずに背中から地面に倒れ込む。

更に追撃をかけようとした彼女に―

吹き飛ばされた精霊獣が、地面の何かを掴み、彼女に向かって投げつけた

砂だ。生理的な反射によって、彼女が咄嗟に目を瞑る。

顔を背け視線を戻す。まさに一瞬。

だがその一瞬だけで充分だった。

どこにそんな力があったのか。あるは単に温存していたのか。

全身のバネを使い、素早く身体を起こすと、後方に飛びずさって距離を取った。

そのままくるりと踵を返し、脇目も振らずに逃げ出していく。

一瞬、追おうかと思ったがやめた。

奴を追跡するには、明の作った重力場を抜けなければなら

ない。

潜り抜けるまでには、もう手遅れだろう。

あまりにも呆気なく。

現れた時と同じ唐突さで、精霊獣が再び夜の闇へと溶けて消えた。

まるでそんなものは最初から存在しなかったかのように。

跡には破壊された部屋と二人の少年少女が残された。

「あーあ。逃げられたか」

重力場を消した明が、さして残念そうでもなく欠伸交じりにそんな事を漏らす。

「追えばよかったじゃん」

「まぁな。ただ、まさか逃げるとは思わなかったし。不意を突かれたのは本当だよ。おかげで反応が遅れた」

「言った筈だぜ？あれは並の精霊獣じゃない。人間の知恵を持ってるんだ。状況判断ぐらい出来るだろ」

人間ではなく動物だったとしても、だ。

まがりなりにも生物としての本能が少しでも残っているなら、こんな物騒な少女を敵に回した時点でどんな奴でも逃げるだろう。

俺だったら地球の果てまで逃げるかもしれない。追ってきそうだけど。

「まぁいいや。ここで尻尾は掴んだわけだし。次に会ったら容赦しねぇ。今度は確実に仕留めるよ」

「さいですか」

今回の彼女の振る舞いの、一体どこに手加減容赦があったのかはかなり疑問だったが、真雪はあえてそこには触れなかった。

彼は気遣いの日本人だった。

ふと耳を澄ますと、遠くから。人の足音と気配。ざわめきと話し声が聞こえてくる。

「お、ようやく警備兵のお出ましか。まあ、こんだけ騒げば気づく

だろうけど……ちょっと出てくるのが遅いよな。いや、ある意味図ったように見事な登場なんだけど……真雪、いまし怪我はもういいのか？」

「ん？ああ、まあな。大した事ないし、さっき治した」

「よし。じゃあ荷物まとめろ。どうせ大したものなんか持ってないだろうけど、ここに監禁されていたんなら私物もまとめてあるだろう。ある意味、好都合だったな。さっさとここをズラかるぞ」

さらりと当然のように突拍子のない事を言い出す明に、思わず目を見張ると。

彼女は華奢な肩を竦めてみせた。

「なんだ？それとも、ここに残るか？私は別に構わんが……これだけぼろぼろに壊された室内を見られて、脱獄を図ろうとしたなどと妙な嫌疑をかけられても困るだろ。

無実を証明しようにも、犯人なしでは説得力もあるまい。安心しろ。行き場がないならとりあえず我が家に招いてやる」

確かにあの精霊獣には逃げられたけど、この破壊を行ったのは間違いなく目の前の少女であり、彼女は立派にここにいるわけで。

つまり俺の正当防衛はともかく、公共物破損については、濡れ衣どころかきっぱりとてめぇのせいじゃねえか、むしろ責任を取れ責任を。

つーかお前がちゃんと状況説明と身分を保証してくれさえすれば、そもそもそんな嫌疑をかけられる事もないだろうが――

言いたい事や思う事。それぞれに山ほどあったが。

それらを全て飲み込んで、真雪はただ溜息をついた。

かていほうもん（前書き）

昨日、一日お休みしました。

遂に毎日更新の約定が破られた…

空蝉は　殻を見つつも　なぐさめつ

◆　◆　◆

結局逃げる事にした。

状況が状況なのでなるべく目立たぬようにと、牛車を用意するヒマもなく、馬を使って陰陽寮を離れた。

「いまし、馬に乗れるか？」

「いや無理」

自転車に電車や車と、交通機関の発達した現代で、まさか乗馬の経験などがあるはずもなく、そんな特技は持っていない。明もその回答を予測していたのか、

「そうか。仕方ないな。なら私だけ馬に乗るからいましは走れ」

「……」

「いましと二人乗りをすると、前が見えなくなっしまうからな。それが嫌なら仕方ない。私がいましを肩に担いでいくから……」

「いやいやいやいや。構いませんよ別に。大丈夫、俺走りますんで」

慌てて首を振る。女子中学生にリードされて馬にダンデムする図もかなりアレだが、自分の肩ぐらいまでしか身長のない少女に、山賊よろしく肩に担がれてしまうというのは、正直もっと凹む。それくらいなら自力で馬と並走した方がなんぼかマシだ。

年上として男として、大切な何かを守るために、真雪は謹んで明の申し出を謹んで拒否した。

どっちにしろ、異端児の身体能力を持ってすれば、それほど無理な話ではない。

走るのに邪魔になる荷物は、さすがに明に預けておく。それくら

いなら構わないだろう。屈伸して、膝を伸ばす。次いで伸脚、アキレス腱。軽くストレッチをして、よういい、スタート。

風をなびかせ颯爽と馬を駆る少女の後を走って追いかけ、馬上から道案内をされる状況というのも、傍から見たらかなりそれなりなものがあっただろうが（お姫様と下僕、みたいな）それについてはあまり気にせず、真雪はたったったっと無言で大人しくついて行った。

「ついたぞ。ここだ」

多少の距離があったため、明の家に辿り着く頃には軽く汗をかいていた。シャツの襟首を掴み、ぱたぱたと風を送り込む。火照った肌にひんやりとした夜気が心地よい。

見上げる屋敷は予想通り立派なものだった。彼の自宅もかなりのものだが。正直、自分の家に匹敵する敷地面積を持つ家というのを、生まれて初めて見た。

夜の闇に隠れて全体像ははっきり見渡せないが、良質な素材で建てられたであろう建物は、荘厳であっても華美ではなく、重厚な雰囲気がある。余計なものが排除された、シンプルな美しさ。

門を潜るだけで入館料を払ってしまいそうになる、立派な門扉を潜り抜けると、彼女は部屋に案内してくれた。この屋敷内に、無数にある客室の一つだろう。特に目立った家具もなく、シンプルな個室だ。

部屋に落ち着くと、彼女は女房に命じて飲み物（水）と食事を出してくれた。

「なんだ？」

「……いや、めっちゃ食うなぁと思って」

驚いたというよりも、むしろ感心して呟くと、彼女は軽く鼻を鳴らした。

「自分の家の食料を食べて何が悪い？」

確かにその通りだ。

時間が時間なだけに、出された食事も簡単なものだったが、それ

でも彼にとっては充分に有難かった。なにせ、塵を使うと極端に腹が減る。異端児が主たるこの家でも、やはり火急に備えて常に食事が出来る体制にしてあるのだろう。

細切りにされた蕪の古漬けと、根菜と鶏肉の煮物。さすがに炊きたての白米とはいかないのか、大量の塩結び。平安時代では、おかずは少なく主食を大量に食べるのが主流だ。二十四時間電気とガスが使える現代とは違い、この時代では定時以外の食事で暖かいものを用意するのは難しいのだろう。出てきた食事はどれも冷えていたが、釜で炊いた米は、そんな事が気にならないくらいに美味だった。

軽く走った後ということもあり、真雪も遠慮なくちょこちょこつまんだが、明の食欲はそれ以上だった。

多分、米だけで軽く五合分は食べてる。一般的にご飯一膳が半合だとして、十人前だ。それだけでもかなり驚異的な数字だったが、驚く無かれここにちょっとした罠がある。

今は真夜中である。当然だが、食事時ではない。本来の夕飯はもっと早い時間で、きっとこの食材は、その残りだろう。つまり彼女は普通に夕飯を食った後で、その数時間後に十人前の飯を食った計算になる。

どう考えても胃の体積より食った量の方が多い。明の小作りな顔、華奢な身体をまじまじと見つめる。ぶかぶかな服を着ているせいで分かりづらいが、全体的に身体についてる肉も薄い。

体脂肪率、一桁台って感じ。

どうなってんだよこいつ？

胃下垂か？ギャル曽根か？

「夜中にそんなに食って太らんねえのか、お前？」

「いや別に？太った事とかないし」

「マジか？」

どんだけエネルギー効率悪いんだよ。

「……とは言われてもな。陰陽師が大食漢なのはいましも知ってるだろ？正味な話、何時にどれだけ食べようが、それ以上の消費を繰

り返してれば、そもそも太る余剰分などないぞ」
お前の口はそこまで大きく開くのか、というほどに大口を開けて、彼女は更にがぶりと握り飯にかぶりついた。
しかし、なんだろう。かなり大口で物を食べる割に、彼女の食事は全然見苦しくない。むしろ食べ方自体は非常に綺麗で、どこか気品すらあるような気がする。なんでだ？
それにしても美形って得だよな。大食いしてる姿までなんか様になってるし。
眼前の少女の存在につくづく理不尽なものを感じて、真雪は歎息を漏らした。茶碗に酌まれた水を煽る。
冷たく冷えた井戸水は、特別何かをしたわけでもないが、カルキ臭さは微塵もなく、澄んだ甘みが心地よい。走って乾いた身体に、水分が一気に染み渡るようだ。
「あの、精霊獣」
「ん？」
ぽつりと呟くと、明は聞きつけてこちらに目を向けてきた（でも食べるのはやめなかった）その視線に促されるように、続ける。
「今起こってる塵災害って、やっぱり今日出たあいつの仕業なのか？」
「さぁな？とっ捕まえて確認しない事には、正確な事なぞ分からないさ。ただ、ここ最近で塵災害が発生胃している地域に、何の関連もない精霊獣が現れるってのもおかしな話だろ。それだったまだ、両者が関係してると考えた方が辻褄が合う」
辻褄、ね……
確かに、その思考の方が合理的だろう。だが決して、世界は辻褄合わせの為に回っているわけではない。
地球の自転なんて所詮、惑星誕生時の名残に過ぎないし、その中心となっているのは人間ではなくあくまで地軸だ。世界が自分を要にして回っているなんて考え方は、根本から切り捨てた方がいい。
まあ、こいつは本気でそう考えてるかも知れないけど。

でもこの時代ってまだガリレオいないしな。自転どころか地動説さえ唱えられていない。

あれ？コペルニクスはいたんだっけ？いや、どうでもいいけど。

もぐもぐと、黙々と食事を続ける少女（恐ろしい事にまだ食べ続けている）向き直り、今までずっと引っかかっていた事を尋ねた。

「なあ、明」

「なんだ？」

首をかしげる少女に真雪は、確信に迫る一言を投げつけた。

「お前、今回の塵災害に襲われた奴の中に、誰か知り合いでもいたのか？」

かん

少女が、食事の手を止めた。
驚くほど真っ黒い瞳が、じっとこちらを見つめてくる。覗き込むというより、抉りこむような鋭い視線。
自分に向けられる眼差しをはっきり自覚しながら、真雪は無言で煮物の器に箸を伸ばした。鶏肉と一緒に根菜を煮込んだ煮物は、煮詰めすぎたのか若干味が濃い。だが、おかずにはこのくらいが丁度いいのかもしれない。
「……なぜそう思う？」
「なんとなく」
「勘か」
「勘だ」
実際のところは、何の根拠もない、ただのあてずっぽうというわけでもない。
たとえば、先ほど自分が精霊獣に襲われた時とか。
仮にも陰陽寮の誰もが駆けつけない中で――警備兵さえも感知出来なかったあの場に、眼前の少女はいち早く駆けつけた。深夜であったにも関らず都合よく。あの時はただの散歩だとか適当な事を言っていたが、それよりも、本人が起こり得る異常事態に対し、常に気を配っていたからといった方が、説明としてはよほど説得力がある。考えてみれば、初めて彼女と会った時も、自分が暴れまわっていた時だ。
そしてあの激昂。静かに怒り狂う、まるで冷たい炎のような。
あの根底にあるのは義務でも責任感でもない。
つまり義憤ではなく私怨。
単純な、個人的恨みによるものだ。
「……知り合いの誰か、という表現はあまり適切じゃないな」
「あ？」

「正確には、誰かではなく知り合いが、だ」
「？」
「と、いうより、私の知人だけがあのケダモノに襲われてるといった方がより正しい」
さすがに不穏なものを感じて――
真雪はそれ以上言わず、ただ黙って説明を求めた。明はちらりとこちらを見やり、
「遠野からは何も聞いていないのか？」
「いや、特には」
彼女から教えられたのは。
陰陽師達が塵災害の被害にあっているという事と。
自分がその容疑者として疑われているという事だけだ。
その事を伝えると、案の上、彼女は呆れ返った表情を浮かべた。
顔面の表情筋がそれはそれは豊かに『侮蔑』という色で彩られている。
「いまし、よくそれだけで素直に監禁なんぞされる気になったな」
「うっせーな。人にはいろいろ事情があるんだよ」
色香に誑かされたからとは言わない。
無論、餌付けされたからとも言わない。
世の中、言う必要の無い事というものはあるのだ。
「なんで男は皆あいつに騙されるんだろうなあ……あんな若作りで年増の婆さんより私の方が百倍美しいぞ」
それについてはノーコメントで。
彼女はどうということもなく、続けた。
「災害で襲われたのは全員、私の知人だった者だ」
「ぜ、全員？」
「ああ」
思わず聞き返したこちらに対し、少女はどうという事もなさそうにあっさりと頷いた。本当にあっさりと。
「最初のうちは無差別だと思われてた――事実、私もそう思ってた

よ。私だけでなく誰もが皆、だな。でも襲われる人数が増えるにつれて、次第に傾向がはっきりしてきた。殺された者達は皆『ある人物』と親しく言葉を交わしていた――そいつにとって知己と呼べる人達だった」

「その人物ってのが……お前？」

「ああ」

「じゃあ……その人たちってのはつまり――お前と仲良くしてから殺されたってのか！？」

「私は、そう思ってる。――私以外の奴らもな」

自嘲でも嘲笑でもなく。

明はふっと微笑んだ。

なぜ、そんな笑顔を浮かべるんだ？

なんで、そんな風に笑えるんだ？

とてもじゃないが、そんな楽しい話をしているわけじゃないだろう？

「もっとも今や、そう考えているのは私だけじゃない。陰陽師の全員にとっての共通認識だよ。今じゃもう誰も、私と話そうとしない。まあ、確かにそんな事で殺されたりしたら、堪ったものじゃないしな。知らないのは異邦人のいましぐらいだ」

別に、身内と呼べる人間が、誰もいないわけじゃないんだよ。ただ今じゃもう、それがいなくなってしまっただけだ。

そう告げる明の声には、先刻見せた怒りや激しさの欠片もない。とても平淡で凪いだ声音だった。

だが、その内容が何を差しているかを自覚し、真雪は愕然となった。

心配してくれる友達ぐらいいるだろう、だって？

困った時には助けてくれと、自分から声をかけてみろ、なんて。

何も知らない部外者の分際で、一体自分はどれだけ無神経なセリフを吐いたんだろう。

自分がそんな存在だったら。

自分と親しくした人間だけが、残らず殺されていくようなそんな状況で、一体誰に頼れというのだろう。
誰を身内と呼べるというのだろう。
慕った人が死ぬかもしれないのに。
殺されてしまうかもしれないのに。
自分のせいで。
気分が――悪い。
俺は一体、彼女になんて事を言ってしまったんだ？
「ごめん」
深い考えがあったわけでもなく。
気づけば真雪は反射的に明に頭を下げていた。
誰に言われたわけでもなく。無論、頭上から誰かに踏み潰されたわけでもない。
彼は自らの意思で、床に手をつき額づいた。

「え？」

土下座の姿勢で首を垂れる真雪に、明は疑問の眼差しを向けた。

「何が？」

「いや俺、前に無神経な事言ったから。ごめん」

「謝るな」

「ごめん」

「だから、謝んなよ鬱陶しい」

「それでもごめん」

迷惑がられても、自己満足だといわれようと。

それ以外に謝罪の方法を知らなかった。

深く陳謝するこちらを見て、明は呆れたように歎息を漏らした。

「……別に怒ってるわけじゃないし、謝るならお互い様だ。私もいましを利用しようとしたんだから」

私、も？

も、って事は他の相手は誰だ？

「襲われたのが皆、私の知己だった事が分かった時には、もうほとんどの人間が残っていなかった。それにつれて被害もだんだん少なくなっていったんだが……反面、標的となる基準がすごく厳しくなっていった。少しでも私と会話した者、接触を持った者さえもまた狙われるようになっていった。――今ではもう、陰陽師の中で誰一人、私に話しかけてこようなどと数奇な者はいない」

明は言った。

別段、悲しんでいるようにも見えないし、何かを堪えている様子もない。

その姿に、痛みを覚えないわけでもなかったが、それよりも彼女のセリフが真雪の中でひっかかった。

あれ？話しかける人がいないって……

俺、普通にこいつとトークしてるけど。
しかもなんかそれ、周囲に知れ渡ってるっぽいけど。
ちょっとヤバくね？
「誰一人って……そんな風になる前に、誰かいなかったのかよ。お前を助けてくれる奴とか――」
「ああ、いたな。昔」
明の何気ない一言は、それ以上の質問を遮るのに充分だった。
「ま、私も陰陽寮という集団組織に属するものだ。完全に誰とも口をきかないで過ごすなんて出来はしないけどな。極力、周囲との控えるようにしてるよ。相手も怖がっちゃって可哀相だし。おかげで心ある奴は私との会話を積極的に避けるようになっていった。身分のある奴に関しては、私との用向きに代理人を立てるくらいだ。よっぽど直接話したくないらしい。いましもやっていただろ？あの子犬みたいな小僧を使って」
「あれは……そんな意味じゃねーよ。そもそも俺、お前がそんなになってるなんて知らなかったし」
実際、その言葉自体に嘘はなかったのだが。そういった事情を聞かされると、あの時まさに伝言を頼まれた那由多が、あそこまでビビッてた理由が分かろうというものだ。それでもちゃんと頼みを聞いてくれた少年は、多分、とてつもなくいい奴なんだろう。
とはいえ、奴には本気で悪い事をした。
知ってたらちゃんと自分で伝えたのに。
つーかそれって、俺はともかく伊々美が知らなかったわけではないよな。
なんで弟子がそんな目にあってるのに、止めなかったんだろう？
実はSなんだろうか、あいつ。
「全員って……じゃあお前、家族とかどうなったんだ？親父さんとかは――」
「私は父上以外に身内はいないし、彼や他の七星は無事だよ。というか、手が出せないんだろうな、実際。あの精霊獣、知恵があると

は思っていたが、元人間だったってのもすんなり納得出来た。奴は自分より強い奴は襲わないんだ」

たとえ塵の力を借りようと。自身の限界を超える力を手に入れようと。

世の中には、それだけでは絶対に越えられない壁がある。

偽者は本物に敵う事など、所詮はない。

明は何がそんなに面白いのか、堪えきれないようにくつくつと笑った。

「それって要するに、保身って事だろ。獣の生存本能とも呼べるかもしれないが、それでも保身だ。人間的だよな――もの凄く人間的だ。自分より弱い者だけを狙い、正体がバレないように姿を隠し、強い者には近づかない。打算的で、卑怯で、臆病で、常に我が身の安全を図ってる。そんな器用な事は人間じゃなきゃ出来ない」

だから――人意か。

人の意思なんて大層なものじゃない。奴の行動の裏にあるのは、獣の本能ではなく人としての保身。

打算が――働いている。

「なあ真雪。あの精霊獣はいつになったら完全に精霊化するんだ？」

彼女からの質問に、真雪は少し考え込んだ。

「この塵災害が始まったのはいつからだっけ？」

「いましの来る一月くらい前からだな。だからもう一月半ぐらい経ってる」

「もし素体となっているのが、並みの人間だったらとっくに石に乗っ取られて精神が崩壊してる。よっぽど根性のある奴でも、せいぜいもって一週間だ。けど、相手が神威能力者だった場合は話が違う」

明自身、その答えを聞くまでもなく、半ば予想していた事だったのだろう。視線に促され、続ける。

「生まれつき塵に耐性のある異端児――陰陽師が素体となっている場合、どのくらい持つかは石の大きさと本人の実力次第だ。場合によっては、飲み込まれずに石を完全に同化するって事もある」

下地のある異端児と普通人ではそもそも最初に立っているステージが違う。

抵抗力を持たない人間ならば精霊石の支配下に置かれるだけだが、異端児はそれをコントロールする術を持っているからだ。

「……なるほど。てことは、やっぱ時間切れを狙うのは無理か」

「時間切れ？」

「奴が本当に獣と化したら――小賢しい浅知恵なぞ、使う余地もなく理性を失ったら、こそこそ隠れたりもせずに、私や今までは避けれ来た他の七星を狙うだろ。そうなれば一瞬でケリがつくと思った」

「……すげぇ自信だな」

「当然だろ」

彼女は大物っぽく堂々と、無い胸を張った。一瞬、皮肉かと思ったが、すぐにそれが掛け値なしに彼女の本心である事に気づき、真雪はそれ以上の会話を避けた。

「とはいえ、それについては諦めるしかなさそうだ。いくら生き残ってるからといって襲われもしない人間を囮にする事は出来ない。かといって、迂闊に誰かを囮に使えばそいつが殺されてしまうかもしれない。――だから、真雪。余所者で、知り合いがなく、ほどほどの実力があり、陰陽師であるいまし。いましの存在は、今の陰陽寮にとって本当に都合がよかった」

そこで明の目つきが変わった。まるで、獲物を狙う禿鷹のように。

否、今までもそんな気配を匂わせていなかったわけじゃない。会話の端々でも彼女は、時々こちらを探るような視線を向けていた。ただ、単に今、それが露骨になっただけだ。

狙われてる狙われてる。

真雪は箸を置くと、流れるように隙のない、ごく自然な動作で立ち上がった。

「ご馳走様。じゃ、俺そろそろ終電なんで帰るから――」

「この状況になって以来、私に話しかけてくるような阿呆に会ったのは初めてだよ。おまけに鳴り物入りで現れたため、無駄に知名度

はあるし実力もなかなかだ。いましなら充分、囮としての効果を持つ」

明はこちらのボケを完膚なきまでにスルーして、完全に空気をキャンセルすると、強引に話を進めた。

（なんで俺の周りには、こう身勝手な女が多いんだ）

うんざりしながら歎息し、眼前の少女に向かって諭すように話しかける。

「囮ってなぁ……」

「実際、狙い通り『アレ』は現れた。今まで後手に回るばかりだった分、これは絶好の機会だ。なんとしてでもこれを機に『アレ』を仕留めてみせる」

とりあえず話をしようにも、彼女は一切こちらの言を聞いていなかった。あるいは、相手が拒否する事など、考えてもいないのかもしれない。幼く美麗な面立ちの中には、硬い決意の色がある。その熱意には関心するが、おおよそ理解しがたい発想でもある。

「仕留めるって意気込むのはいいけどよ、なんで俺がわざわざ自分の命を危険に晒してまで、それに協力してやらなきゃなんねーんだ？勝手に人を予定に組み込むのはやめてくれ」

「え？」

信じられないものを聞いたかのように、彼女はきょとんと目を瞬いてみせた。

不意をつかれたように驚く彼女の顔は、いままでのものとは違いどこか無防備であどけない。そういう仕草だけを見れば年相応で、うっかりすると可愛いなどと思ってしまう。

「え？　じゃねーだろ。なんでそんなに意外そうだよ。まあ、話を聞けば大変そうだし、力になってやりたいとは思うけど、今の俺は自分の事さえままならねぇんだ。理由もなく呑気に人助けしてる場合じゃねーんだよ」

誤解ないようにきっぱりと告げておく。実際、彼女の境遇についてはいささかならず気の毒に思うし、思いについても共感するところはあったが――かといって、ボランティア奉仕出来るほど今の自分には余裕がない。

明は、暫し考え込むような仕草をし――やがてぽんっと手を打つと、すすすっと音もなくにじり寄りぴたりと寄り添った。そのままこちらの肩にこてんと小さな頭を乗せて、まったく色の映らない真っ黒な瞳で酷く平淡に呟く。

「好き」

「……いや、別にそんなぞんさいに理由を作って欲しいわけじゃねーし」

こんな心無い告白は生まれて初めて聞いた。

つーか、まったく感情のない声でそんな事を言われても、信憑性は皆無である。嬉しくもなんともない。

反論して、とりあえず肩から彼女の頭を外す。と、明は存外抵抗なく首を垂直に戻しながらやれやれとかぶりを振った。

「おいおい。どうやら自分の立場を分かってないようだな、真雪。いましは私に借りがあるんだぞ？」

借り？

明の唐突な言いがかりに、はてなと首を傾げる。

迷惑をかけられた覚えならあるが、借りを作った覚えはない。
「しらばっくれんな。さっき、助けてやったろうが」
「あれ、借りか？」
かなり疑わしい気持ちで、尋ねる。
プラマイで考えるなら、どちらかというと助けられたプラスよりよりややこしい事に巻き込んでくれやがったマイナスの方が大きい。
こちらが礼を言うより先に、相手からの謝罪を求めたい。
「借り、だろ。助けてやったじゃん。逃亡先までご丁寧に提供したし」
「驚くほど都合のいい記憶力をお持ちのようだから、一応忠告しておくが、そもそも俺が脱走しなきゃならない事態に追い込んでくれやがったのはお前だろうが」
「食事も作ってやったし」
「飯を食わして貰った事については反論ないが、作ったのはお前じゃない」
しかもほとんど自分で食ったろうが。
態度の大物っぷりに反し、意外に小さな恩をかなりしつこくふりかざすタイプらしかった。
律儀に事実を訂正していると、やおら明は　顔をしかめた。見ていてあからさまに表情が不機嫌になる。
「なんだよー。別にいいだろ。ごちゃごちゃ言ってないで素直に手伝えよ。いましも陰陽師の端くれなら、この状況に思うところがあるだろ。大体、遠野には素直に利用されときながら、命の恩人たる私の頼みが聞けないってのはどういうことだ!?」
「なんでいきなりキレるんだよ!?いや、つーかちょっと待て！なんだ、その遠野に利用されてたってのは!?」
慌てて問いかけると、むしろその反応こそ意外だったのか、瞳に呆れの色を浮かべた。
「……気づいてなかったのか？あんな風に、今じゃ誰にも使われてない座敷牢に、いましを一人で閉じ込めるなんて――どう考えても

こいつ囮なんで好きに襲って下さい的な処置じゃん。言っとくけど、私があの小僧に話を聞いた時には、既に陰陽寮のほとんどの者がいましの境遇を知ってたぞ。だから、誰でも襲えたんだ。ついでに、誰がその話を広めたかなんてのは――もう言うまでもないだろ？」

「ああ、ねぇよ……」

くっそ、あの熟女……

どうせなんか裏があるだろうな、とは最初から思ってたけど！

勝手に人を餌にすんなよ！

マジで死ぬトコだったじゃねぇか！

こちらが世間の冷たさと大人の汚さに煩悶していると、明はそんな悩みを知ってか知らずか、仕方なさそうに首をふった。清流のような癖のない髪の毛が、その動きに従ってさらさらと揺れる。

「まったく……頑固な奴だな、真雪は。まあ無駄に自分を安売りしないところは、好感が持てるけど」

「そっかい。ありがとよ」

「正直、私のこの人知を超えた、神をも凌ぐ麗しさと魅力を持ってすれば、いましごときを意のままにするなど、朝飯前だと思ってたんだけどな」

「ごときとか言うな」

あと自分で自分をベタ褒めすんな。

ていうか、もうこいつにはきっと、何を言っても無駄だな。

「だがいましがそこまでゴネるなら仕方ない。取引をしよう。黒野真雪」

「取引？」

「ああ。どちらにしろ、遠野の姦計にハメられた以上、いましはこれからもあの精霊獣につけ狙われる。遠野の提示した見返りが何かは知らないが、私ならそれと同等以上ものを提供出来るぞ。更に、いましの命の安全も保障してやる。どうだ？」

「……随分な自信だな」

余りに尊大な彼女の言い草に、半ば圧倒されつつも、それを認め

たくなくて、力なくぼやく。事実、取引などと言いながらこちらに条件を提示してくる彼女の瞳は、きらきらとまごうことない自信に満ちていた。

到底年下の、それも少女の言動とは思えない。

一体どんな育て方をしたら、この歳でこんな人間が出来上がるのだろう？

仮親だという養父に、是非ともレシピを教えて欲しい。

「だって謙遜する理由がないし」

呟きが耳に入ったのか、彼女は事もなげに答えた。続ける。

「陰陽七星を侮るな。私は仮にも陰陽師においては最高位に連なる者だ。いましが私に協力するというなら、私は必ずいましを守って見せる――相手が何であろうとも」

そう断言する彼女は、やはり揺ぎ無い自信に満ちていた。気負うでもなく力むでもなく。ごく自然に当たり前の事として、自分の力を信じている者の顔。それが可能であると知っているからこその確信に満ちた瞳。

「自分に出来る事を自覚するのに、遠慮は必要ないだろ。さしあたり、当面の生活ぐらいは面倒みてやるよ。その代わりに、いましは贄として私があのくそったれな精霊獣を仕留めるのに協力する。どう？」

そう言って、自他共に認める白貌ににっこりと、花のような笑みを浮かべ、こちらへと手を差し出してくる。普段は無愛想で人間味がないと思っていたが、なまじこうして表情が生まれると、それ以上に生物らしさが薄れるのは意外だった。

なんというか。

造作があまりに整いすぎていて、その表情が完成されきっているが故に、どこか造り物めいた人形のような印象を受ける。

ひょっとすると、普段の彼女が不機嫌そうな無表情をしているのは、自分でもその自覚があるからなのかもしれない。とはいえ、呆然と見つめるまでもなく、明に差し出された手の意味は明白だった。

深遠を讃えた少女の瞳には、常人の理解を超える何かが映っているのか。月のない夜空のような、驚くほど黒い闇色の瞳。思わず、吸い込まれそうになる程の。純粋な漆黒。

どの道この状況で、選べる選択肢などそれほどない。

覚悟を決めて、真雪は明の手を取った。

握り返された小さな手は、人間のように温かかった。

恋心

玉の緒よ　絶えなば絶えね　ながらへば

◆　◆　◆

初めてその少女の存在を知ったのは、まだ彼女がほんの子供の頃だった。

酷く小さく頼りない矮躯。その身を包みこむ衣は分不相応に上等の品で、どこかちぐはぐな違和感を受ける。ただ、腰まで届く長い髪と、黒い大きな瞳だけが奇妙なくらいきらきらと美しく、その事だけが酷く印象に残っていたのを覚えている。

彼女を連れてきたのは、その養父と名乗る人物だった。大よそ、陰陽寮においては、知らぬ者のいないほどの、実力者。その事実は陰陽師達にとって、大きな波紋を呼んだ。

なぜ彼のような人物が、こんな得体の知れない子供を連れてきたのか。嫉妬と疑心、好奇心と下世話な歓心から、暫く陰陽寮はその話題で持ちきりになった。当の少女とその養父は、そんな口さがない噂などまるで聞こえもせぬように振舞った。

彼女はとことん、家名や身分に相応しくない振る舞いを好んだ。――とは、周りの大人の言い分だったが。仮にも貴族の家に養女として引き取られながら、男言葉で話し、男性の衣装に身を包み、几帳の奥に隠れるでもなく平然と外を歩いた。そんな姿や奇矯な振る舞いを嘲笑う者も少なくなかったが、養父となった人物は特段、それを諫めようとはしなかった。また少女自身も、他人の風評など気にする事もなく、飄々としたままどこまでも自由に振舞った。

そんな少女が珍しく、まるで新種の蝶でも愛でるかのように。気づけばいつも視線で少女の姿を追っていた。

だが、少女の成長と共に、そんな周囲の目線や出自に関する噂なども徐々に収まっていった。理由の一つとしては――彼女がずば抜けた天才だったからだ。世間にとって異端となる神威能力者の中にあってさえ浮き立つほど、その才能は圧倒的だった。

事実、長じれば間違いなく、歴史に名を残す一人となるだろう。少女の才に比べると、自分を含めた他の陰陽師達の技は酷く稚拙なものに思えた。現れた当時は得体の知れない、嘲笑と侮蔑の対象でしかなかった少女は、瞬く間に陰陽寮でも頂点の一人に上り詰めた。異能者の集団である陰陽寮は、才能のある者に対して公平で平等だった。陰陽七星に選ばれたのは、それからほどなくしてすぐの事。当時の彼女はまだ十歳だった。

他の七星や大人たちに混じり、まだ年端もいかない小さな子供が、しかめつらしく対等に振舞っている様は、傍から見ていてどこか微笑ましくもあり、また頼もしくもあった。同じ陰陽師として、嫉妬がないのかと問われれば嘘になる――少なくとも、自分で自分の才能に見切りをつける気持ちはなかったし、自分の歳の半分にも満たない子供に実力と地位で劣るという事実は、あまり気持ちのいいものではなかった。同僚の中にははっきりと嫉妬を示した者もいる。無理もない。ただ、不思議と反感は抱かなかった。否、考えてみれば、自分が彼女に悪意を抱いた事は一度もなかった。胸中を占めるのは、羨望と憧憬。

まるで恋をしているようだと思った。

一回りも年下のこの少女に。だが。

憧憬と羨望。関心と好意。好奇心と嫉妬。それが全て揃えば――それはもう、恋のようなものだった。

自覚したからとはいえ、その後、少女との距離が狭まったかとい

うとそうでもない。むしろ、周りには誰にも気づかれないよう、注意して振舞った。

元より、少女自身は身分的にも立場的にも既に手の届かない存在と化していたので、本人に気づかれる心配はなかった。否、むしろ当の少女自身は自分の事など覚えてもいないだろう。彼女は常に才ある人間に囲まれていた。

その事に不快を覚えないでもなかったが、彼ら――あるいは彼女ら――もまた、自分などは足元にも及ばない力量の持ち主で、だからこそ怒りを覚える事はなかった。それは遠目から見ていても、自分などよりよっぽど、彼女の周囲に立つに相応しい実力を持った者達だったからだ。

だが、そんな彼女にも同世代の友人がいなかったわけではない。多くの者は身分を弁え、立場を自覚し。少女の影すらも踏まぬように振舞っていたが、中にはそれを理解しない身の程知らずもいた。

ある日、廊下を歩いていた時に、ふとした拍子でその光景を見た。彼女と一緒にいたのは、同世代くらいの見たこともない少年だった。服装からして、到底彼女に並び立つ者ではないだろう。恐らくは陰陽師の見習い生といったところか。特に目立つところのない、才能どころか凡庸極まりない、せいぜいが背が高い事ぐらいが取り得の、ただのつまらない子供。

気になったのは、その少年ではなかった。その隣で談笑する、彼女の表情。

歳の離れた大人と対等に渡り合うでもない、子供らしからぬ威厳を讃えた、厳しい顔つきでもない。そこにいたのは、対等な立場の、まるで気の置けない友人とくだらない事で笑い合う、何の特徴も変哲もない、ただの子供の姿だった。

思うに、あれを見た瞬間から、自分は引き返せなくなったのだと思う。

ヒモ生活開始

見上げる天井は寝そべっていても、やはりさほどの距離感は感じない。ご自慢の視力を持ってすれば、もっとも細かな木目までも数えられそうだった。それでも、油断していると崩れ落ちるかもしれないなどという、物騒な心配をしなくてもいいのは、まあありがたい事なのだろう。普通に考えて、天井が突如崩れ落ちる境遇というのも、思いつかないが。

与えられた部屋は特に広くもなく、かといって狭くもなく、つまりはそんなものだった。旅館――この時代では旅籠というらしいが――の主人は、愛想を振りまいてくるわけでもないが、必要なものを出し惜しむ事もない。足りないものを告げれば、それはいつの間にか用意されていた。まあ、恐らくはこちらが支払った対価を超えない限りで。

（つっても別に、払ったのは俺じゃねーけどさ）

他人が支払った料金分の恩恵をきっちり享受しつつ、出された食事を素直に頂く。

飯椀に山盛りに（比喩ではなく本当に山型になるまでみっしりと盛られている）米、汁物、煎り豆腐、漬物の千本切、小魚の佃煮、舐め味噌。基本的に味の濃いものが多く、なるほど、白い米の友としては充分以上にありがたかったが、こう食物繊維系のヘルシーな食事ばかりが続いていると、さすがにいささか飽きてくる。老人でもあるまいし。つーか肉食いてぇ肉。

恐らく、この時代の食文化からすると、まだ肉をさほど食べる風習はなかったのだろう。多少は食べたかも知れないが。明治維新後、外国文化が民間にも取り入れられて以来、急速に欧米化した日本の食事ではあるが、本来の日本食は、どちらかというと動物系タンパク質より、山菜などの植物性に富んだものだったと聞く。現在、流行のメタボにかかってる患者などでも、古来からの日本食に切り替

えるとうまくダイエットが出来るそうだ。
それにしても……
「あー……肉食いてぇ肉」
今この瞬間に、マックか吉牛かケンタかモスか牛角かドンキか、なんかそういうジャンキーな物が食べられたら、何も文句は言わないのだが。
それはそれとして、真雪は目の前の食事をありがたく頂いた。他に食いたい物があるからといえ、出された物を残すのは勿体無いし別段、彼は日本食が嫌いなわけでもない。むしろ、出された物はなんでも食べれる雑食系だ。
「……雪はちゃんとメシ食ってんのかなー」
甘みと粘り気のある白米を噛み締めながら、唐突に思いつきぽつりと呟く。
二十一世紀の黒野家において、家事全般はほとんど真雪の仕事だった。幼い頃に母親が他界して以来、食事を始めとする黒野家の労働を一手に引き受けている。理由としては、自分以外の家族が、あまりにも生活不能者揃いだった事に気づいた為だ。
特に姉の白雪はその傾向が強い。ロクな料理も出来ない癖に、好き嫌いはやたら激しい。あの偏食欠食引きこもり女に、定期的な食事を取らせるのは、それなりに難易度が高いのだ。少しは明の問答無用な食欲を見習って欲しい。
（ま、あんな奴が普通に家にいたらそれだけでエンゲル係数が半端ない事になるけど）
その明も、今この場にはいない。ニートである自分とは違い、彼女には（如何に年下であろうと）立派な仕事があるため、真昼間から暇を持て余してごろごろしているわけにはいかないのだ。
年下の女子中学生を労働に従事させておきながら、その金で自分の生活費を賄って貰い、あげく当の本人はひがな一日寝過ごしているだけだと思うと、うっかり自分がヒモみたいに思えてきて情けない。

ていうか、ちょっと泣きたくなってくる。
「もう三日目か……ったく、いつまでこうしてりゃいいんだか」
力なくぼやく。大幅に環境改善がされたとはいえ、やることのない日々は、やはり変わらずに退屈で、ともすれば日にちの感覚さえも忘れそうになる。
とはいえ別に、ここが牢獄のようだとか、そこまでの事を言うつもりもないが。
「牢獄との違いは、好きに出入りが出来るって事か……でも、行く場所がなけりゃどこにいても同じだよな」
結局、時代が変われど場所が変われど、人はそんな事では自由にはなれないのかもしれない。
いつぞやの、多分冒頭の導入部分あたりで交わした、姉との会話をふいに思い出す。
彼が居座っているのは、明の屋敷ではなく彼女に用意された宿泊施設だった。あのどでかい屋敷に、まさか部屋の一つや二つ、余っていないとも思えないが――実際、当初の明は自宅に真雪を住まわせる予定だったようだが――それに反対したのは他でもない自分だ。
「あー？なんでさ？うちにいた方が、何かあった時にすぐ駆けつけられるし、便利じゃん。ごちゃごちゃ面倒な事言ってるとぶっ殺すぞ」
「なんでそんな短気なんだよ！？迂闊に意見をいうだけで、命をかけなきゃなんねぇのか俺は。お前、自分で言った事をもう一度よく考えてみろよ。今まで、塵災害にあった犠牲者の中に、陰陽七星とかいう、お前と同格の能力者は含まれてなかったんだろ？」
「ああ、それが？」
何の意味があるというのか？不思議そうに首を傾げる明に、思わず溜息をつく。いくら大人びて見えても、こういうところはやはり子供なのだと思う。
「意図的に自分以上の実力者を避けているような相手が、当の七星であるお前の屋敷なんぞに、どうしてのこのこ近づいてくると思う

んだよ？確かに、ここにいりゃ俺の防御って意味じゃ鉄壁の守りかもしれんが、そもそもそれじゃ、囮としての意味がないだろうが」

「なるほど」

それなりに筋の通った話だからか、この少女にしては珍しく、特に皮肉もなく頷いた。どうやら、殺されはしないで済むようだった。

にしても、会話してるだけで脅迫を受けなきゃならないとは……

キレやすい子供というのは、現代特有の現象かと思ったが、あにはからんや千年前から子供の性質というのはあまり変わってないらしい。

正体不明の精霊獣を捕まえるより先に、まずこの小娘を取り締まる方が先なんじゃないかと、切実に思った。

「ところでお前、自分の身内が狙われる理由とかって見当ついてんのか？誰かから恨みを買った――とか」

「さぁ？正直、恨み妬み嫉みなら、人一倍買ってる自信があるしなあ。心当たりなんて、掃いて捨てるほどあるよ」

「……もう少し、平穏な生き方をしてこうぜ」

一応、彼女の将来を思っての忠告だったが、当の本人はといえば、反省もなく軽く肩を竦めるだけだった。

「別に私が悪いわけじゃないもん。身元不明の子供が、いきなり貴族の家に引き取られ、あげく最年少で七星の一人に選ばれたら、やっかみの一つも買うだろうさ。むしろ、この状況で恨みを買わない方が不可能だ」

「完全逆恨みじゃねーか」

否、正確に言えば逆恨みですらない。ただの嫉妬か――あるいは八つ当たりに過ぎない。

他人事ながら、その理不尽さに顔を顰める真雪に対し、明は特に怒りに示すでもなく、どうという事もなさそうにひらひらと手を振った。こういうところは器がでかい。

「ま、仕方ないのさ。そもそも、私のように人知を外れた美貌と神さえ嫉妬するであろう才能、そして天に選ばれたとしか思えない天

才的な頭脳を前にして、平静な心持でいられる人間の存在なぞ、この世に皆無なのだから。まあ、私と比べてあまりにも才能を持たない凡人に対し、哀れみというか憐憫というか、なんとなく悲しいものを覚えないでもないが……それもこれも、私が美しすぎるのが悪いんだ。凡俗の嫉妬や羨望など、天才の宿命として受け入れてやろう」

「はぁ……」

予想外の方向に器がでかかった。

何が凄いってこの娘、比喩でも誇張でもましてや冗談なんかでもなく、本気で掛け値抜きにこのセリフを言っているところだ。

自画絶賛、といいたいところだが。

否定する要素が見つからないのも悔しい。

でもいくらなんでも褒めすぎだろ。

ナルシー明と呼ぶことにしよう。

（…ガキか俺は）

生活費を全て賄って貰っている筈の少女の悪口を、せめてもの憂さ晴らしに胸中でこっそらと呟き。真雪はその意味のなさに諦めて嘆息した。

きょうりょく？

ナルシーの話に、真雪は腕組みして呟いた。
「……じゃ、やっぱそっちの線で潰すのは無理か――ん？けど明、恨みの対象が陰陽寮の人間だと推測してるって事は、やっぱお前も陰陽師の仕業だってのは気づいてるのか？」
「気づいてたというか……あの精霊獣自体がまさか陰陽師だとは思わなかったけど、その背後にいる人間が陰陽師なのは間違いないと思ってたよ。あくまで、根拠としては消去法だけどね。第一に、私に関る人間は、陰陽寮以外に存在しない。第二に、あの精霊獣は陰陽寮の内情を知りすぎている。じゃなきゃ、いくら不意を突かれてるとはいえ、仮にも国家の精鋭たる陰陽寮の陰陽師達が、こんなにも簡単にやられるとは思えない」
「そうか……」
しかし、相手の姿が見えない事には変わらない。
正直、敵の正体が不明というのはそれだけでやりづらい。警戒すべき対象が不確定であるという状況は、それだけで容易に神経を磨り減らす。
とはいえ、明に心当りがないのも本当だろう。少女の性格を考えるに、少しでも怪しいと思える奴がいたら、間違いなくその場で仕留めてる。その場合、知己であろうと見ず知らずの他人であろうと、相手を倒す事に一切の躊躇もしないだろう。
つまり、現在の段階では敵については『本当に』お手上げで――それなりに切羽詰っている状況なのだ。
そうでなければさすがに、いくら対象として都合がよいとはいえ、ほぼ初対面に近い自分すらを巻き込もうとはしないだろう。
「……つーか、気になってたんだけど。お前、家族とか大丈夫なの？お前と親しい人間っていうなら真っ先に目標になりそうなもんだけど。そして手伝ってくれる奴とか俺以外にいねぇのか？例えば父

ちゃんとか」
「家族の心配はしなくていい」
明は必要以上にきっぱりと断言した。
「いつぞやも言ったかもしれないが――元より私は天涯孤独の身だ。身内は父上しかいないし、その父上も今は京にはいない。帝の命で東の地へ塵の鎮禍に向かっておられし、第一、父上は曲りなりにもこの陰陽寮の長を務められる方。あの程度の下賤な獣など、出会った瞬間に五体を裂いて一瞬で仕留めて終わり、だ」
「なんかすげぇ親父だな」
父親の事を語る時の彼女は、はきはきと頬を紅潮させいかにも嬉しげな様子だった。
まるで、何か大事な宝物を自慢するような。
心底、大切な物を誇るような。
思わずこちらが毒気を抜かれてしまうくらい、それは純粋な父への思慕に満ちていた。
女系の黒野家では、父親の威厳などお目にかかった事はない。偉いのも強いのも基本は女達だ。それ故にか、父親を自慢する彼女の様子は如何にも新鮮で、真雪の目には初々しく映った。
「それに、他人の助力を期待するというのもこの場合は無駄だな。言っただろう。今回の塵災害では、私と関りを持った者だけが狙われている。そんな状況で、私を手伝おうとする奇特な馬鹿などいまし以外にはいないよ」
「遠野なら？あいつとなら共同戦線張れるんじゃねぇか？」
つか、今どさくさに紛れてさりげなく馬鹿っつったかこのガキ？
例の妖女の名前を出すと、案の定、明ははっきりと嫌そうな顔を浮かべて断言した。
「あいつは嫌いだから組みたくない」
ストレートな理由だ。
「いや、あのな……」
「大体、あいつは年寄りだしいつも動かないしどうせいたって役に

も立たんだろう。今までだって何も出来なかった奴が、これから急に役立つと思うか？」

もっともらしく理屈をこねるが、残念ながらいまいちへ理屈感は否めない。

ていうかこいつ、本当に好き嫌いがはっきりしてるよなぁ……

子供だからまだいいとして、これから大人になっていくのに、この先こんな状態で、人間関係とか大丈夫なんだろうか。

他人事ながら、如何にも不安になる話だった。

「そもそも、いましは遠野から逃げてきたから私の元にいるんだろう。これであいつの助力を求めたりしたら、また座敷牢戻りだぞ」

「……それは勘弁だな」

真雪は素直にそう言って、その提案を取り下げた。

それにしても――と、思う。

それにしても、相手の正体が見えないというのは厄介だ。真雪は声に出さず、胸中で密かに独りごちた。

明自身に、相手の心当たりがない事を疑うわけではない。寧ろ、当の本人にすら意識されない相手だというのが、この場合は問題なのだ。

現代の例を取るまでもないが、ストーカーなどは大抵、本人とはまったく関係のない人物――それこそ、本人にとっては『他人』として位置づけられてしまうような、接点の低い人物のケースが圧倒的に多いと聞く。

だからこそ、情報も少なく周囲からもターゲットとして浮かび難い。

少女自身には一切の危害を加えず。

ただ自分の安全だけは計り。

彼女と親しくした者だけを狙い、順に殺していく。

その手段と方法から、感じるもの。

吐き気がするほどにどろどろとした、非常に人間的な非情に非人間的な執着心。

その思考を辿ろうとするだけで、気持ち悪い、と素直に思う。
「……で。協力者はいない方向で進めるとして、具体的な計画は何かあるのか？つーかお前の計画でいくと結局のところ、俺は一体何をすればいいんだ？」
「んー、特に何も」
明はあっさりと首をふった。
「こちらの警戒するさなかをすり抜けて、陰陽師達は次々にやられていった――無駄のない見事な手際だ。それだけの技量の持ち主相手に、下手な警戒も策も無意味だろう。どうやってるのかは知らんが、相手はこっちの動きを掴めるようだし、いましが独りで適当にうろついていれば、探すまでもなくあっちが勝手に来てくれるさ」
「そんなもんか」
それなりに切迫した状況のわりには存外、適当な答えだった。
ま、中学生の思考能力じゃこんなもんか。
所詮、お子様だしな。
この場合、対ストーカー捕縛用のノウハウを求める方が酷というものだろう。
「ていうかそもそも、相手の居場所が分かるようなら、こんな回りくどい事をせず、私自らが乗りこんでる」
「そりゃそーだ」
まったく反論の余地もないセリフに、頷く。
「……だったらなおさら、俺は何の為にここにいるんだ？」
彼女の言を聞くに、別に戦力として期待されているわけではないらしい。それはそれでムカつくが、明の実力を垣間見た以上、不満を言ったところで負け犬の遠吠えにしかならなさそうなので、真雪は黙り込んだ。
「そうだな……とりあえず、いましが狙われてるのは確かだから、外を出歩いててくれ。なるべくあの精霊獣に襲われやすいように、人気のない、何かあっても誰も助けに来てくれなさそうな、間違っても他人に迷惑のかからない、それでいていましが殺されやすい感

じの危険な場所を選ぶんだ。まあ、心配するなよ。いましが襲われてる時に丁度ヒマで、距離的に間に合えば私が助けに行ってやるから」

「思いっきりやる気の殺がれる枕だな……」

つまりは。自分でどうにかしろと。

至極当然のように言い張る明に、真雪は他にどうしようもなく、うんざりと呻いた。

で。

「なーんでお前のその自殺行為に俺まで付き合わされてんだよ！？」

「うっせーな。耳の近くできゃんきゃん騒ぐな。鼓膜が破れんだろ。あと、自殺行為とか言うな」

「だったらなんで俺がお前の自殺に付き合わなきゃいけないんだよ」

言い直してより酷くなっていた。

自殺って……そのままじゃん。

相手との歩幅が違うせいか、並んで歩いていてもうっかりするとすぐに、連れとの距離が開いてしまう。

真雪は、相手を引き離さないよう速度を微妙に調整しながら、後ろからついてくる少年を振り返った。

「いいじゃねぇかよ。だいたいお前、伊々美から仕事免除されて暇なんだろ？だったら、その時間に俺の手伝いしてもいいじゃねぇか」

「別に暇じゃねーよ、お前がいなくなったんだから、御勤めもいつも通りに戻ったよ。何の仕事もせず、暇してんのはお前だけだ。年下の女の子を働かせて、その報酬で生活費を賄って貰ってる真雪みたいな奴と一緒にすんな」

「……酷い事言うなー、お前」

心の中に　ＰＴＳＤなりかねない深刻なダメージを受けた。

そんな事言って俺が傷ついたらどうすんだと、年長者らしく説教の一つでもかましてやろうかとも思ったが、相手がさして気にするとも思えなかったので、止めておいた。何も自らの手で傷口に塩を塗る必要はない。真雪はそれ以上の会話を避けて、話題転換を図った。

「ていうかお前、なんでそんな事まで知ってるんだ？俺、陰陽寮の人間には誰にも連絡を取ってねぇぞ？」

「なんでも何も……」
　那由多は、こちらの呑気な疑念を嘲笑うかのように、ひょいと肩を竦めてみせた。三日ぶりに会ったというのに、少年の様子にはまるで変わったところはない。いつも通りににぎやかで、ガキくさく、きゃんきゃんと喧しい。男子三日会わざれば刮目して見よ、とかいうあの格言は嘘らしい。明とは違いこちらは年相応の威厳を持って――つまり何の迫力もない様子で――態度だけは無駄に偉そうに続ける。
「お前がいなくなった翌日に、明媛が遠野様に直談判しに行ったんだよ。陰陽寮内では安全性が疑われるため、七星として拘束中の真雪の身柄を自分が預かるってな」
「へぇ」
　あの時、帰宅直後に即効で出かけたと思ったら、そんな事してたのかあいつ。
　個人的には、寮を破壊した張本人の癖に翌日顔を出すなんて、度胸あるなぁとか思ってたが。
「何せ、呼び出しも受けずに、明媛が遠野様の元を訪れるなんて滅多にないしさー。ひょっとして殴りこみなんじゃないかって、あの時は結構、寮全体がひやひやしたもんだよ」
　それはそれは、だ。
「出来れば可能な限り遭遇したくない場面だな、それ」
　両人共に、さして深い付き合いでもないが、それでも明の態度からして、あの二人が犬猿の仲である事は疑いようがない――というよりもむしろ、明が一方的に遠野を毛嫌いしているフシがあった。
　遠野はああ見えて、見た目以上に（確実に）歳を食っていそうなので、あまり心配は要らないだろうが、明は外見に反し、必要以上に好戦的な性格をしているので、嫌いな人間を目の前にしたら、本気でいつ喧嘩を吹っかけるか分からない。
　野放しにするにはかなりの危険人物だ。
　なまじ、実力があるから始末に悪い。

……本当に、なんであんな物騒なのが自由に生活を送っているのだろう？

誰か取り締まれよ。

「まあ結局、話し合い自体は何もなく、本当にただの話し合いだけで終わったんだけど。寮は今でもその話で持ちきりだからさ、真雪の居場所なんて、今の陰陽師は誰でも知ってるよ」

「なるほど」

つまり――そういうことか。

あの小娘はそうして――誰にとっても派手なパフォーマンスを取ることによって『ごく自然に』自分の居場所を周囲に伝えたのか。

周囲というより、彼女の伝えたい相手は一人だけなのだろうけど。

精霊獣の狙う標的である黒野真雪が、陰陽師七星・明の庇護下にある事を世間に知らしめるため、彼女は遠野の元を訪れた。

「――で、座敷牢に監禁されてた所を謎の襲撃者に突然襲われ、偶然通りがかった明様に助けられて泣く泣く命乞いをして、お屋敷に匿って頂ける事になった筈のお前が、またどうしてこんなところをうろついてるんだ？自らから願い出て鎖に縛られてるんじゃなかったのか？」

「……世間ではそういう設定になってんのか？」

なんでそんな無駄な嘘をついてるんだ、あいつ。

人の風評を貶めて、あの赤娘になんぞ特でもあるんだろうか？

「その明様からの指示でな。今回起こってる塵災害の犯人を突き止める為に、俺が囮になって街をうろつけってよ」

「塵災害？……って例の、うちの陰陽師が連続で被害にあってるっていうアレか？なんでいきなりそんな話が出てくるんだ？」

予想もしていなかったのか、きょとんとした顔を浮かべ、那由多が怪訝そうに聞いてくる。明の行った無駄な情報操作のせいで、正しい状況を認識出来ていないらしい。真雪は掻い摘んで、真実を説明してやった。

「……なるほどなるほど。そんな事になってたのか。お前も大変だ

ったんだなー」
　一通り話を聞いた那由多は、何やら難しげに腕組みなどしながら、しみじみと呟いた。
「時に真雪。事情は分かったが、それでどうして俺がお前に付き合わされてんだ？」
「しゃーねぇだろ。俺、この辺の地の利とかさっぱ分かんねぇし。それなりに、地元に詳しい奴がいないと、せっかくの囮作戦がただの迷子になりかねん」
「なるほど」
　一応、こちらの言い分に納得する所があったらしく、もっともらしい顔で頷いたりしている。
　匿われたその後、明に言われ一旦は素直に街中をうろついてはみたものの、結果は予想通りに芳しくはなく、何の成果も上がらなかった。また加えて、情報が乏しいという点も否めない。京の都は碁盤目状に造られているため、慣れない者にも比較的歩きやすい構造にはなっているらしいが、地元民でもないのに地図もなく当てずっぽうに歩けと言われても限度がある。そんなわけで、探索を始めて早三日目にして、真雪は現状の数少ない知人であり（恐らくは）地元民っぽい那由多を助っ人として借り出す事にしたのだ。
「まあ、そういう話なら協力すんのにやぶさかじゃなけどさ――具体的に真雪は今、どの辺りを目指して歩いてんの？」
「さぁ？」
「さぁって……」
「つーか、土台無理な話なんだよなー。こんな風に適当にうろついてるだけで、標的を誘き出そうだなんて。こういう人海戦術的なローラー作戦ってのは、まずそれなりの人数がいて初めて成り立つものであって……」
「ローラーってなに？」
「お前の知らねぇもんだよ」
　ついうっかり口にしてしまった横文字については、説明するもの

面倒だったので、適当に誤魔化す。こうして口にしてみると、改めて現代日本語の中に含まれる外来語の多さに驚かされる。

一方、そんなこちらの態度が気に障ったらしい。那由多がぷりぷりと怒りの表情を浮かべる。

「だからって目的もなく歩いてたんじゃ、ただの散歩と変わらないだろ。なんか目当てとかないのかよ？」

「って言われてもなぁ……幽霊の正体見たり枯れ尾花じゃないけど、目的が分かっていようが正体不明の奴を追いかけてる事には変わらねぇし、適当に人気のない場所うろついて、うまく相手が出てきてくれる事を祈るしかないだろ」

「杜撰だなぁ……」

「文句があるなら明に言ってくれ。そもそもあいつの提案だ、これは」　うんざりと頭を抱える那由多の意見には、彼自身よほど同意ところだったが。誘った立場上、それも出来ずこの場にいない少女に責任転嫁する。案の定、どうやら明に対して畏怖に近い感情を抱いているらしき彼は「俺が明様に文句なんか言えるか」と小さく愚痴を零した。

「まあ、そこまで完全に闇雲ってわけじゃねぇよ。一応こっちも、奴と死合った事があるし身だし相手の波長ぐらいは覚えてる。それを探しながら歩いてるつもりだけど……今んとこ、それほどはっきりした手ごたえを感じないんで、なるべく塵の濃度が高そうな場所を回ってるつもりだけどな」

「なんだ。それを早く言えよ」

当てずっぽうというのがよほど不安だったらしく、一応の手がかりを教えただけで、少年は途端に安堵の表情を浮かべた。反応が素直すぎる。

「あんま期待はすんなよ。俺、探査系は得意じゃねぇんだ」

塵を視認出来る異端児には、塵濃度の濃い場所――それを知覚する術を持たない普通人などには、パワースポットなどと呼ばれているが――をある程度なら感知する事が出来る。それを差し引いても、異端児の五感は普通人のそれと比べて遥かに鋭い。更にその感覚機能を塵で強化すれば、普通人のスペックを遥かに凌駕する。

ましてや、真雪はその対象者と一度接触している。地道に探せば確かに、標的を発見出来る確立は少なくないように思えた。が、しかし――

系統別の能力差を差し引いても、真雪は元来、探査など『周囲の気配を探る』行為が徹底的に苦手だった。無論、塵による五感強化はとっくに行っているが。彼がはっきりと自覚的に把握出来る警戒範囲は、せいぜいが半径５Ｍ以内である。それは単純な能力不足などではなく、その距離内であれば、いかなる事態にも対応出来るという自負の証明でもあった。

もしもここに姉の白雪がいれば、百年後の未来でも地球の裏側でも、確実に見抜いてみせるのだろうが。

が、こちらの思惑を余所に、那由多はあっけらんとした口調で

「塵の濃い場所を探るだけでいいなら、俺にだって出来るよ。あと並列の検索条件として、人気の少ない場所ってのを付け加えればいいんだろ。だったらいくつかに絞れるかなー」

その言葉に、思わず真雪も呆気に取られる。

「へ？何お前、ひょっとして探査系得意なのか？」

「知ってて俺を誘ったんじゃなかったの？」

「いや、最初に言ったじゃん。遭難防止と、単にこんなかったるい作業を一人でやるのがムカついたから。その退屈しのぎ」

「なんかすっげー帰りたくなってきた……」

言葉通り、明らかにやる気を失った様子で、那由多が懐から札を取り出す。高品質の和紙には、千年後の未来から訪れた真雪には読む事も出来ない、古い呪いがびっしりと書かれていた。

うわ、同じ日本語なのに本当に読めない。

時の流れっていろんな意味でデカイのな。

那由多は慣れた仕草で取り出した札を扇のように広げると、残る片手で器用に印を切りながら朗々とした声で唱え始めた。

「伏して願い奉る。我が常にも仕え祭る四方を統べし御方へ。我が言により、此のもの行先を示す導とならしめ給へとかしこみかしこみ申し上げる……」

（音声認識か……また、えっらいレトロな）

紡がれる声と共に、那由多の指先から塵が展開していくのが見て取れた。

初めて見る――わけではないが、現代ではもはや滅多にお目にかかることのない、いにしえの技に、真雪は密かな感動を覚えた。

塵を扱うのには何も、過去の呪い師や魔女によろしく、仰々しい呪文や身振りを唱える必要はない。というか実際には、発動に声さえ必要としない。極端な話、寝ていようと身体を拘束されていようと、自我が残っている限り神威能力者は永遠に神威能力者である。使用者に意識があり、それを望めば塵はいつでも遅滞なく発動される。塵は神威能力者のみが持つ特有の変異細胞によってのみ、顕現

が可能となっており、つまりは素養さえああれば誰にでも使える。そこに方法論は必要ない。

早い話。

今、目の前で那由多が唱えている仰々しい呪文もどきや札なども、塵の使用においてはあまり意味のないものなのだ。無論、集中力を高めるなど所謂自己暗示的な効果はあるだろうが、それ以上の意味はない。

現代でこそ、徐々に解明されつつある神威能力ではあるが、この時代には当然、体系だった理論や技術論など存在しない。だが異端児が異能者として扱われ、神威能力が何たるかを解明されていない時代においては、こういった意味のないパフォーマンスこそが塵の発動に不可欠であると信じられていた。

事実、那由多が詠唱すると響きにそって、塵の構成が練り上げられていくのが見て取れる。現代ではもはや、この手の無意味な演出は削除される傾向にあるが、それでもこうして改めて見ると、なるほどその効果は伺えた。

（確かに、状況効果としちゃ結構なもんかもな。詠唱時間のロスがあるけど、視覚・聴覚面から相手に与える影響はデカい）

実際の戦闘においてはまったくハンデにしかならないが、儀礼的な場においては見栄えもするだろう。だからこそ、廃れたといはいえこういった技は未だ健在なのだが。

加えて、詠唱式と札などの媒介に起動式の基礎を練りこみ、万人に同様の術が使えるようにしてあるのが面白い。これなら確かに那由多のような工夫の足りない者であっても、ある程度までなら塵を使うことが出来るだろう。

声だけは滑らかに詠唱と終えた那由多は、それと同時に塵を完成させた。多少ぎごちなくはあるが、癖もなく基本にそった丁寧な構成。掲げた札から光の粉が湧き上がり、さらさらと崩れ去る。音もなく弾けた燐光と共に、光の欠片が収束し一定の方向を指し示す。

「うし、出来たぞ！後はこの導にそって進めば、とりあえず塵の濃

厚な場所が分かるから……って、何やってんだ真雪？」
「いや、先人の知恵と技術に感動してた」
起動までの一連をまじまじと見つめ。
腕組みなどしながら呑気に見物していた真雪に、少年が呆れの声をかける。
「阿呆な事言ってないで、とっとと行くぞ。俺はお前と違って忙しいんだから」
那由多は自分よりも遥かに身長の高い真雪の首根っこを（凄い頑張って）無理やり掴むと、ずるずると引きずりながら歩き出した。

「……見つからねぇもんだなー、やっぱり」
「こっちを見ながら仕方なさそうに溜息ついて言うなよ！！　なんだが俺が失敗したみたいな空気になってるだろうが！！」
「おいおい、那由多。それは被害妄想だろ。俺はそんな事、ひとっことも言ってないぜ」
「言ってるよ！口に出して言ってなくても顔と態度が全霊で俺の責任を追及してる！」
「根拠ない言いがかりはよしてくれ。――ま、あれだな。仮にお前がそんな罪悪感を抱いてるんだとしたら、原因は俺じゃなく、お前自身の中に『自分が無能なばっかりに、真雪様のお役に立てなくて申し訳ない』という真摯な思いがあるからだ。気にすんな」
「ねぇよ。そんな勘違いな思いは欠片もねぇよ。ていうか、何で善意で手伝ってやってる俺が、いつの間にか責められる立場になってるんだ？」
「急いては事を仕損じる」
「意味分からんし」
　那由多はぶつぶつと毒づきながら、大仰な――けど、本人にとってはそうでない――歎息をしみじみと吐いた。
　那由多の案内に従って、京の街をうろついてみたものの、精霊獣の正体を掴むための手がかりらしきものは、全くと言っていいほどなかった。元より、真雪としてはさほどこの散策に期待していたわけでもないので、それはそれで別にどうでもいいことだが。寧ろ、後世にも名高い平安時代の京都をリアルに見物出来た事の方が、彼にとっては遥かに価値があった。ありがとう。
　と、改めてこの眼前の少年に礼を言いたいくらいである。

一方で、そんなこちらの胸中など知る由もない那由多としては、この結果に些か不満らしい。口をへの字に曲げて、不機嫌そうな面持ちで中を睨んでいる。

別に成果が出ないのはお前のせいじゃないし、那由多の神威自体が使えなかったわけじゃないし（めぼしい場所には行ったものの、単に何も見つからなかっただけだ）そもそも基本的な問題として、これだけ人死にの被害が横行している中で、少年探偵もどきが多少捜査の真似事をしたところで、都合よく見つかるわけないし。つまるところ、俺的には最初から期待してたわけでもないんで、気にすんなよ、と言ってやろうと思ったが、口に出したら確実に激怒されそうなのでやめておいた。

いい奴だなぁ、こいつ。他人に無理やり付き合わされてる時も、いちいち全力だし。

若いのがバカいだけなのかは知らんけど。

「――と、そうだ那由多。もしこの先、運よく精霊獣を見つけられたとしても、お前は絶対に戦闘には加わるなよ。そうなったら、とりあえず逃げろ全力で」

「は？何それ？」

ふと思いついて告げた言葉に、案の定那由多は首をかしげた。

「俺は囮役なんだから、いざ遭遇した時にそのままやられたりしちゃ意味ねーだろ。だから、俺が狙われてる間に、陰陽寮に援軍を呼びにいく役が必要なんだよ」

那由多を呼んだのは、道案内よりもむしろその役を任せたかったという腹積もりもある。もとより、この気のいい少年を荒事に巻き込む気などない。

「はぁん……まあ、頼まれてやってもいいけどさ。そうなっても、救援が来るまで真雪が呆気なくやられちゃったら、それはそれで意味ないじゃん」

「いやぁ……多分、大丈夫だろ」

「およ？随分余裕な発言じゃん」

鷹揚に頷いてみせるこちらに、那由多が意外そうに目を見張る。
とはいえ、別段見栄を張っているつもりもない。あくまでそれは、実際に精霊獣と対面した者としての率直な感想だった。
始めに目にしたのが明だったため、些か気づくのが遅れたが、先ほどの那由多を見てはっきりと確信した。この時代の塵には無駄が多い。
起動から発動までのタイムラグが、現代の比べてとにかくでかいのだ。だからこそ前回、塵を本格的に使用していない状態であっても、あの精霊獣にはそこそこ対抗出来た。
その弱点をうまく利用すれば、勝つのはともかく、時間稼ぎぐらいは容易に出来るだろう、というのが真雪の打算である。
せかせかと早足で並んで歩く那由多が（真雪は心持ち速度を落とした）ふと、思いついたように尋ねてくる。
「ところで真雪ってさぁ、なんでそんなに明媛と仲いーの？」
「はぁ？なんだそりゃ」
真雪は思わず怪訝そうに顔を顰めたが。彼は当然のように続けてきた。
「だってそーじゃん。明様がお前に固執する理由は分かるけどさ。精霊獣をおびき出すのに、有効な餌はお前しかいないわけだし。でも、真雪がそれに付き合って、こんな事する必要は全く皆無だろ？」
「別に皆無ってわけでもねぇよ。少なくともこうして協力してる間の生活費やらはあいつ持ちだし」
「そんなの、陰陽寮にいたところで一緒じゃん。否、むしろその方がいいとさえ言えるかもしれないぜ。だって一応衆人の目があるし。そりゃ、環境条件は多少落ちるかもしれないけど、それだって命には代えられないだろ？」
「どっちもどっちな事には変わりねぇけどなぁ……」
ついでに、その衆人の目とやらもあまり当てにならない。
なにせ真雪は前回、まさにその場所において精霊獣に襲われたのだから。

「正直なところ、お前の中で遠野様と明様の違いってのがよく分からない。立場的にはお二人とも、真雪を利用しようとしてるのに、お前は一方だけに味方してるじゃん」

「……で、『仲がいー』か。単純だね、お前も」

ガキみたいなというより、まるきり中学生あたりの子供の発想だ。

まあ、子供だし仕方ないんだけど。

真雪が思わず苦笑を浮かべると、那由多は不満そうに口を尖らせた。

「違うのか？でも明様とこんな風に気兼ね那なく付き合える奴ってそうそういないんだぜ？お前の事を好いていらっしゃるのは間違いないよ」

「いや、それは真剣にどーだかな……」

「えー、間違いねぇよ。だって、明様がここまで親身に面倒みてるなんて、初めての事だもん。絶対お前の事気に入ってる証拠だって」

初めての事といっても、それはあくまで必然性に駆られたからの事であって、別段そこに好意が付随するわけではない。

だが、あえてそんな事を口に出す必要はない。　真雪はただ黙って肩をすくめてみせた。

「随分と明様、明様って騒ぐなお前も。てっきりお前は、あいつが苦手なんだと思ってたけど」

言われて那由多が、心持ち口を曲げて黙り込む。が、特に急な話題転換に怒ったというわけでもなく、その仕草は単に次に吐く言葉を選んでいるだけに見えた。続ける。

「……別に、苦手ってわけじゃねーよ。なんか、恐れ多すぎて近づきがたいってだけで。明様については、陰陽寮の中でも賛否両論いろいろあるのは知ってる？そりゃ、年長者の中には身分がどーとかいう方々が多いのは確かだけど……俺らみたいな平民出の若手からすれば、明様は憧れの存在なんだ！」

「そーなのか？」

「そりゃそうさ！いくら陰陽師が実力主義っつったって、裏を覗けばその実態は、身分や血筋に縛られた、完全な権力社会だし。その中で、血筋や家柄の確たる証もなく、掛け値なしに実力主義で七星の地位にまで上り詰めた明様は、俺達みたいな立場からすれば英雄だよ！たとえ、父君の助力があったんだとしても、彼女の存在がずば抜けてるのは変わりない」

「へぇ……」

子犬のようにくりくりとした瞳を、興奮気味にきらきらと煌めかせ、頬を僅かに紅潮させて熱心に語る那由多の様子は、なるほど確かに彼女に対する熱意が見て取れた。はっきりと分かりやすく。誤解のしようがいないほどに、確かにこの少年はあの小娘に焦がれているようだった。

意外な思いもする反面、確かにあの美貌とカリスマ性を思えば、こういうファンがついても不思議ではない。

少女の立場から推測するにさしずめ、アウトローの英雄的な魅力があるのだろう。少なくともＡＫＢ４８よりは美人だしな。

「そういや、伊々美も明に対して結構気を使ってたしな。そんな嫌われてるわけでもないんだな、あいつも」

孤立無援、てわけでもなさそうだ。別に、俺が心配するまでもなく。

が、それを聞いた那由多は難しげに腕を組み、いささか気まずそうに首を傾げた。

「うーん、どうだかな。伊々美様はそのへんの馬鹿どもとは違うから、そうあからさまな差別や批判はしないけど。ご実家が貴族の出ではあるし。立場的には中立に近い感じかなぁ。明様の支持者はあくまで平民に多いから」

「あ、そうなのか？」

ちょっと意外な答えだった。

そういうの、差別しそうなタイプには見えないのに。

その後も根気よく探索を続けたが、結果としては芳しくなかった——否、はっきり言ってなんの成果も出なかった。

共に幼くまだ未熟な部分もあるとはいえ、真雪も那由多も同様に異端児——陰陽師である。基礎体力たるや、普通人の比ではない。故にこの日の探索も朝から晩まで——比喩抜きに——京の都を隅々に到るまで探し続け、途中に休みを挟みながら一日中を費やしたものの、結局は何の手掛りを得る事も出来ず、そんな彼らが漸く足を止めたのはもう日が沈み、辺りが暗ずんでからの事だった。

「つっかれたー」

さすがに疲労したのだろう。近くの茶屋に入った途端、那由多がさっそく根を上げた。出されたお茶を煽るようにして、ずるずると力なく座り込む。

「……お疲れさん」

こちらも声に多少の疲労を滲ませた真雪が、そんな那由多の様子を見て労う。同じ距離を歩いた事には変わらないが、彼と那由多ではそもそも、基礎体力と体格が違う。それを思えば、この強行軍についてきた那由多の苦労も、押して知るべしと言った所だった。

まあ、半分以上は負けん気と意地だったみたいだけど。
「ありがとうな、協力して貰って。も、いーから。ここで少し休んだら、お前はもう帰れよ」
「えー、でもー、まだ何も見つかってないしー」
ぐったりと力なく机にうつ伏せていた那由多が、ゾンビのような動きでのろのろと顔をあげ呻く。その声にすら力がない。
「いいよ、もう充分だ。もともと、一日やそこらでそんな簡単に見つかるとは思ってなかったしな。また気長に探すさ。お前だって、いい加減そろそろ戻らねぇと門限とかあるんだろ？」
「そりゃあるけど……」
「だったらもう帰れよ。かなりへばってるみたいだから、暫くここで休んでた方がいいだろうけど。回復したらテキトーな所で帰れ。金、先に支払っておくから」
自分がいると帰って気遣って無理をしかねない。こんな疲労満載な子供を放置するのもどうしたもんかと一瞬迷ったが、自分が傍にいた方がかえって無理をするだろうと思い、早々に引き上げる。勘定の数え方が分からなかったので、言われた分より多めに払っておいた。勿論、明に貰った金だ。
年下の女の子から生活費のみならず小遣いまで支給されている……改めて自覚した事実にしみじみとへこんだりもしたが、気を取り直して自分も帰る事にする。とはいえ、行き先は自宅ではないが。
（しっかしまぁ、一日中歩き回って手掛り皆無かよ。先はなげーなオイ）
愚痴というほどでもないが、胸中で呟く。無論、那由多にも言った通り、そんな簡単に成果が出るとはまさか思っていなかったが。問題なのは、成果がなかった事ではない。果たして本当に成果が出るか否かも分からない事を、それでも信じて続けるしかないという現実がある事だ。
（……先に心が折れそうな状況だよな）
こうなったらもう、いっそこの際多少の危険には目を瞑るので、

さっさと襲い掛かってきてほしいとさえ思う。
（……とはいえ、実際はこんな事やってる場合じゃないんだけどな）

実際のところ、本音を言ってしまえば彼にとって精霊獣などは至極どうでもいい。確かに多少は命の危険に関るため、こうして明にも協力の姿勢を取ってはいるが……それよりも遥かに、優先して取り組まなければならない事が、彼にはある。
（ようするに、これもただの現実逃避みたいなもんだよな）
解決しなければならない問題が目の前にあったとしても、その糸口さえ見つからない。故に代償として、もっと分かりやすいゴールの定まっている問題に取りすがり、目を逸らそうとしている。
背を向けたところで、何かが変わるわけでもないのに。
と、そこで。
「……あれ？」
予定より長い時間をかけ（まだあまり環境に慣れていないため、建物の区別をつけづらて軽く迷ってた）仮宿ともいうべき宿舎にようやく辿り着いた真雪は、何か言いようのない違和感を感じ、宿に入る前にその足を止めた。
「なんだ……なんか――？」
具体的に、何か視覚に訴えるものがあるというわけではない。もとより既に夜が近づき、闇に染まろうとしている光景の中では（迷子になった理由の一端だ）建物の外観などさほど明確に分かろう筈もない。それでも彼の足を止めたのは、そういった理性の声すらもを上回る、本能からの声を信じたからだ。
あるいは、より動物的な直感ともいうべきか。
人が文明を得ると共に、失われていった第六勘からの声に従い、慎重に歩みよる。だが外から見る限り、違和感以上におかしなところはない。首を傾げ、疑問を胸に残しながらも、本能からの警告を無視して中に入ろうとしたその刹那――
（あれ……？この建物ってこんなに大きかったっけ？）

気づくのと。
肌が粟立つような怖気を感じ、咄嗟にその場を飛び退くのと。
その真雪の足首を狙い、宿の壁から剥離した蔦が鞭のように撓りながら、一瞬前まで彼のいた空間を穿つのは、全てまったく同時に起こった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3336w/

お前はいっぺん死んでこい！

2011年10月12日08時50分発行